

博士学位請求論文

村上春樹における〈他者〉  
— 中国表象と女性表象を中心に

平成30年1月

城西国際大学大学院 人文科学研究科  
比較文化専攻

王 寒笑

# 目次

序.....	1
I 村上春樹における中国.....	7
第一章 村上春樹における中国表象：他者の矮小化.....	7
第一節『羊をめぐる冒険』における「羊」の意味.....	7
第二節「羊」のふるさと.....	11
第二章『中国行きのスロウ・ボート』における中国人表象.....	15
第一節『中国行きのスロウ・ボート』における在日中国人.....	15
第二節 在日中国人のメッセージ.....	16
第三節 在日中国人と日本人の間のディスコミュニケーション.....	20
第四節 在日中国人との共感.....	23
第三章 初期三部作における中国人表象.....	25
第一節 初期三部作における「ジェイ」の先行研究と研究課題.....	25
第二節 中国の視点から「ジェイ」の位置を見る.....	27
第II部 村上春樹における女性表象.....	34
第四章 戦闘美女青豆——カルト集団との戦闘.....	34
第一節 青豆の身体とセクシュアリティ.....	34
第二節 青豆の戦闘経歴.....	37
第三節 家庭に帰還した青豆.....	46
第五章 戦闘美少女ふかえり：父との戦い.....	48
第一節 超自然性を持つ美少女.....	48
第二節 ふかえりの父との戦い.....	49
第三節 少女の役割.....	51
第六章『1Q84』における老婦人論：暴力との戦い.....	57
第一節 家庭内暴力と戦う老女.....	57
第二節 老婦人の戦闘と「山姥性」.....	60
第三節 老女の消失からわかる村上春樹.....	63
結語.....	66
参考文献.....	68

# 村上春樹における〈他者〉

## —中国表象と女性表象を中心に

### 序

本論文は中国人女性留学生という個人的な立場から、中国と女性をはじめとした他者という視点から村上春樹の読み方と感動の仕方を明らかにしたい。

他者とは、「私」と関係を結ぶ相手のことを意味し、哲学やポストコロニアリズム、フェミニズム文学批評などの領域により多義的にとえられている概念である。現在は、自分のなかの他者、自分以外の1人や物、死など、他者について統一な定義することがほとんど不可能と言えるだろうが、哲学や、哲学やポストコロニアリズム、フェミニズム文学批評という領域での意味を区別しながら論じていきたい。

哲学的に他者を統一的なあるもの「一者」にたいして、「有限なもの、変化するものという意味」<sup>1</sup>で、もともとプラトンによって使われたことばであるが、ヘーゲルによっても存在の中の「(有)にたいする〈非有〉を意味する言葉として用いられた」<sup>2</sup>のように解釈し、他者の問題を「直感的な感覚経験から外界のモノや空間についての認識がつくられてゆくという主観-客観の認識論の立場では、かりにそれが成功したとして、つぎに自分と対等な他の人間主観の存在がどのようにして保証されるのかという問題が生じる」<sup>3</sup>のようにまとめた。『哲学・思想翻訳語事典』<sup>4</sup>は他者を論じる時、「人間の根本的な概念」であるが、明確な定義を与えることがほとんど不可能と言った。そのかわり、「他者」の語源に辿り、「他者」はドイツ語 *ander* からきて、*ander* の意味は「①他の人(事物)、もう片一方の人(事物)、残り、その他大勢、②別種(異質)の人(事物)、これまでとは違う人(事物)」である。「他者」の直接的な語源である「*der Andere*」は *ander* のこの用法の上に、さらに大文字で始まる「*der Andere*」の意味は「他者」として特化されたものとなっており、対応存在者(我-汝の関係)が指示されていると考えられる。また「*der Andere*」つまり他者の概念の中でも「人間の他者」、しかも自分とは区別されて措定される「他者」というものが念頭に置かれているためと考えることができる。したがって「他者(*der Andere*)」とは、「私」を抽出し、問題として取り上げるかぎり必然的に「私」と対峙するものとして措定される「もう一人の私(*der andere ich*)」のことであり、「私」を根本において成立させる不可欠の要素、概念である。*der Andere* を問題にすることは、「他者」ではなく「私」を問うことと直結しており、関係性の中でそれらを問うことにほかならない。<sup>5</sup>

ポストコロニアリズムにおいて、他者(*other*)を「自分と異なるすべての人のことである」のように定義したが、他者は「正常な」(*normal*)を定義し自分を位置付ける上で不可欠な存在であ

<sup>1</sup>思想の科学研究会編『新版哲学・論理用語辞典』新装版 三一書房 2012.05 P269

<sup>2</sup>思想の科学研究会編『新版哲学・論理用語辞典』新装版 三一書房 2012.05 P269

<sup>3</sup>思想の科学研究会編『新版哲学・論理用語辞典』新装版 三一書房 2012.05 P270

<sup>4</sup>石塚正英 柴田隆行監修『哲学・思想翻訳語事典』【増補版】論創社 2013.05

<sup>5</sup>石塚正英 柴田隆行監修『哲学・思想翻訳語事典』【増補版】論創社 2013.05 P193 を参考

り、「植民者の文化や世界観の公正性や優位性を主張し、植民者と被植民者から二項対立の分類法を定着させる」<sup>6</sup>手段の一つであることを強調している。他者とアイデンティティの関係にたいしてサルトルは『存在と無』でよく「他者」を使い、自我の目覚めやアイデンティティの概念を構築した。またラカンの理論では、「他者」(other) —小文字の「o」が使われた場合—とは、自分に似た別の人であることがはっきりと示されていて、この他者は、主体のアイデンティティを定義する上で重要なものである。「他者」(Other) —大文字の「O」が使われた場合—とは「偉大なる他人」とも呼ばれ、その視線の内に主体がアイデンティティを築くことになる。「偉大なる他人」とは現実の対話者ではなく、それを代表するような母親とか父親とか「超越的もしくは絶対的な対応者」であり、主体によって不可欠なものであり、なぜなら、主体はその視線の内に存在するからである。このような他人は二つの点で、帝国の中核とか帝国言説とか帝国それ自体に喩えられる。最初に、それは被植民地が依存的な「他者」としてのアイデンティティ感覚を何とかして身につけたという意味の用語を提供することになる。

フェミニズム文学批評において、シモーヌ・ド・ボーヴォワールは『第二の性』で「他者」を使って女性の抑圧を説明した。女性はすべての文化の中で、男性にとってだけでなく、自分自身を客体化することを受け入れて、男性に定義づけられた通りの他者の役割を演じてきたため、女性自身にとっても、他者となっている<sup>7</sup>。ガヤトリ・スピヴァックはさらに他者化 (othering) という言葉を作り、帝国言説が他者たち (others) を作り出す様々な過程を指して使われる。フェミニズム理論はラディカルな「他者化」という形式を示すために用いた。白人で西洋人の異性愛の男性に対する様々な「他者」の個性が否定され、廃棄された。シモーヌ・ド・ボーヴォワールの実存主義的フェミニズムにおける他者とサイドのオリエンタリズムの他者は、別の自己ではないが、中心的な主体の傲慢な自我を守るために否定された自己である。他者としての女性とは、男性的西洋哲学の伝統を批判する際の、現代のフェミニズム理論の主要テーマの一つである (Irigaray 1974)。しかし、ボーヴォワールのフェミニズムとして企ては、女性の自由とエイジェンシーにとって障害物となるものを取り除くことによって、超越的な自己となるようにすることであった。<sup>8</sup>

このような多領域にわたる他者論のなかで、自分以外の人間や団体など、個人以外の人間や団体という他者が注目されている。他者とアイデンティティの問題を共有することで戦争や暴力を防ぐ効き目があることが近年指摘されている。イスラム教徒とヒンドゥー教徒の激しい対立やベンガル大飢饉を目撃しつつ狭隘なアイデンティティを強く意識するようになったインド出身のアマルディア・センは、初めてのアジア人としてのノーベル経済学賞の受賞者である。アマルディア・セン

---

<sup>6</sup> ビル・アッシュクロフト ガレス・グリフィス ヘレン・ティフィン著 木村公一編訳『ポストコロニアル事典』南雲堂 2008年8月 P197

<sup>7</sup> リサ・タトル著 渡辺和子監訳『フェミニズム事典』明石書店 1991.07 P275

<sup>8</sup> ソニア・アマンダマール キャロル・ウォルコウィッツ テリー・ロヴェル著 榎村愛子 金子珠理訳『現代フェミニズム思想辞典』明石書店 2000.03 P254

は『アイデンティティと暴力——運命は幻想である』<sup>9</sup>で、「世界における多くの紛争や残虐行為は、選択の余地のない唯一のアイデンティティという幻想を通じて継続されている」<sup>10</sup>と述べ、アイデンティティと暴力とを関連づけて論じている。アイデンティティには内的な包括性と外的な暴力性が統一してされていることを指摘している。国や宗教の間に戦争が起こった時、人は単一のアイデンティティで自分か他者を判断し、他者を人間視しなくなり簡単に暴力を加える、暴力の企画者は単一のアイデンティティを強調し人為的に他者を作り上げテロリストを生産するという。単一化されたアイデンティティによる暴力に対抗するため、アマルティア・センは、複合的なアイデンティティに基づいたグローバルな民主主義を提起した。グローバル的なアイデンティティの土台の一つは他者のアイデンティティへの注目である。他者の主体性への無視は暴力を醸成するが、逆に他者への注目は世界を平和に導くという。

さて、このような主体の無視されやすい他者のなかにどんな人間がいるのだろうかを問うてみたい。まず自分以外の人間がいる。例えば身近な男性にとっての女性、女性にとっての男性は性的他者に属している。歴史学や人類学、文学など今まで既存の学問のほとんどが男性の視点で語った物語であり、客観的に両性を踏まえる事実ではないことがジェンダー批評の研究で次々と明らかにされてきている。女性による自己発信と批評が活発に行われてきたが、時代にふさわしい課題の発展と解決が必要だと思う。また植民地支配やグローバル化により移動する人たちである。植民地から引き上げた人間たちはもちろん、平和時代の移動にも現地の既存集団から疎外され、移動する人ないしその子孫のアイデンティティに注目しなくてはならない。さらに、第三世界から移動してきた女性のような人間を、ポストコロニアリズム視点とフェミニズム批評の視点に基づき、生存と性、及びアイデンティティなどの視点で見る必要があると思われる。

本論文では村上春樹を通して他者の主体性に注目するという目的を文学の解釈によって行いたい。なぜなら文学は身近に他者と邂逅できる無限な空間を作りあげ、批評により他者の発見を顕在化することができるからである。この問題を追及するため、作家の村上春樹をとりあげていきたい。

村上春樹は「高くて硬い壁と、壁にぶつかって割れてしまう卵があるときには、私は常に卵の側に立つ」とエルサレム賞受賞式典（2009年）スピーチで発言したことはよく知られている。同じスピーチの続きでは「私が小説を書く理由は、たった一つしかありません。それは個が持つ魂の尊厳を表に引き上げ、そこに光を当てることです。小説における物語の目的は警鐘を鳴らすことにあります。（略）小説家の仕事は、物語を書くことによって、一人ひとりがそれぞれに持つ魂の特性を明らかにしようとするに他ならないと、私は信じている」と語り、「卵」は「個の持つ魂」のメタファーとなっている。今まで光のあたらない魂の特性を書くことが村上春樹の小説における追求であり、光のあたらない魂というのは、何よりも今まで十分注目されない他者であり、このような他者を表象することこそ文学の役割であり、村上はそのに自身の文学の根拠をおいているのである。

<sup>9</sup>アマルティア・セン著 大門毅 東郷えりか 訳『アイデンティティと暴力 運命は幻想である』勁草書房 2011.07

<sup>10</sup>アマルティア・セン著 大門毅 東郷えりか 訳『アイデンティティと暴力 運命は幻想である』勁草書房 2011.07 P1

村上春樹は今日までその文学理念を追求してきたと言える。彼は国籍・性別・宗教・年齢を問わず他者を書き続けてきた。その意味でも村上春樹を論じる時、他者視点が不可欠である。これまで他者表象の視点からの村上春樹作品についての研究はジェイ・ルービンや林少華など翻訳者たちをはじめ日本の内外から行われてきた。ジェイ・ルービンの研究は『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』<sup>11</sup>にまとめられている。林少華は村上春樹と中国・アジアと暴力について著書と論文を中国で発表し、日本語に翻訳された部分もある<sup>12</sup>。これらは他者からの他者表象の研究の成果である。また、日本において、国際交流基金の企画に基づき世界各国から村上の翻訳者・批評家が結集したシンポジウムの記録『世界は村上春樹をどう読むか』<sup>13</sup>という一冊もまとめられている。これらの研究からわかってきたのは、村上春樹が各地域の変動期に、しかも今までの日本文学作品と一線をかくすものとして、つまり「普遍性」をもつ作品として受容されてきたことと、アジアの歴史についての反省または暴力への着目が目立つことである。

また、性的他者としての女性を性的相手として描写することや、簡単に女性を消失させることから、村上春樹をフェミニズムの視点から批判する声も多く出されている。このような研究は主に上野千鶴子や渡辺みえ子によって行われた。上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子は『男流文学論』で『ノルウェイの森』（講談社 1987）に登場した女性にリアリティがなく、他者化された存在として批判した。渡辺みえ子は『語り得ぬもの 村上春樹の女性(レズビアン)表象』で、村上春樹の『ノルウェイの森』と『スプートニクの恋人』（講談社 1999）を扱い、レズビアンという「異性愛中心社会の他者」を論じることによって、村上春樹がレズビアン行為を行った女性に「不可解な闇」を担わせ、他者化していたことを明らかにしている。村上春樹の二〇一七年の新作『騎士団長殺し』に対して、大森望と豊崎由美は対談で村上春樹が女性を死なせたり消えさせたりしており、女性の描きかたは好き勝手に御都合主義であることを指摘した。村上春樹は女性を他者化する点においては反対意見を取り入れない「確信犯」であるとして批判を加えている。

以上のように、先行研究における村上春樹の文学の〈他者〉についての論及をみてきたが、具体的に村上春樹はどのように他者を表象してきたか、そのような描写が村上春樹が文学理念を具現化する上でどのような役割を果たしてきたかはまだ追求する余地が少なくない。また、女性表象において村上春樹の今までの達成も十分踏まえられ論じられているわけではない。

本論文は中国人女性留学生という論者の個人経歴から出発しながら、中国人表象と女性表象を中心に、村上春樹の描いた他者表象というテーマについて、他者から村上春樹の作品を理解する新しい視点を提供しようとする試みである。

まずは村上春樹における中国表象である。

第一章では、『羊をめぐる冒険』のなかの「羊」の表象を先行研究を踏まえながら解説し、中国のイメージが「羊」の表象に含まれていることを明らかにしたい。『羊をめぐる冒険』について多

<sup>11</sup>ジェイ・ルービン著 畔柳和代訳『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』新潮社 2006. 09

<sup>12</sup>例えば「闘志としての村上春樹-東アジアで十分に重要視されていない村上文学の東アジア的視点」明石川聡士訳 『東アジアが読む村上春樹』藤井省三編 若草書房 2009. 06

<sup>13</sup>柴田元幸 沼野充義 藤井省三 四方田犬彦編『世界は村上春樹をどう読むか：a wild Haruki chase』文藝春秋 2006

様に研究されてきているが、これまでの「羊」表象についての解釈をまとめ、さらに「羊」の背後に隠された中国を指摘し、中国が他の集団のように村上春樹の作品において矮小化され、個人の自由の妨げのように描かれたことを批判的に考察したい。この章はテキストに基づき、夏目漱石『三四郎』にも言及しながら羊の意味と羊のふるさとという二部に分けて展開している。

第二章では村上春樹の初短編小説『中国行きのスロウ・ボート』において登場した中国人を論じたい。その中国人は大陸部に生活する中国人ではなく、在日中国人であることはすでに指摘されているが、それに基づき、この章では今まで論じられなかった『中国行きのスロウ・ボート』に登場する中国人小学校の先生、中国人女子大生、高校時代の中国人クラスメート三人の在日中国人の心理状態を分析したい。20世紀80年代の始め、村上春樹は日本を生きる在日中国人の生き方とアイデンティティを先見的に描写したことを評価したい。

第三章では初期三部作において登場した「ジェイ」という中国人の脇役を分析していきたい。「ジェイ」は今までの研究であまり論じられていなかったが、三部作（『風の歌を聴け』、『1973年のピンボール』、『羊をめぐる冒険』）の三作目『羊をめぐる冒険』の最後に「僕」は「ジェイ」を思い出し、彼を寛容で暖かい存在だと思ふシーンがある。それは「ジェイ」が日本と中国・アメリカとアジアの戦争史に挟まれた経験があり、戦争で生き残ったジェイは多国の人間に理解と共感を持ち始め、国籍を超えて「僕」と鼠の家族になったからではないかと問題提起を行った。移動のなか、ジェイは複合したアイデンティティの象徴として描かれているのではないかと考えられる。

また村上春樹における女性表象である。第四章では『1Q84』に登場した青豆という女性主人公を中心に論じていく。青豆は受動的なヒロインと違い、積極的に行動を取るヒロインである。彼女は偏狭な宗教と家族から脱出し、親友の復讐のために殺人に至った。また家庭内暴力と戦うため暴力を振るい、宗教のリーダーと最終戦を行った。しかし、結局青豆は自殺するが再生し、家庭のなかに回収された。今までの村上春樹作品のなかの女性登場人物と違った色彩を持ったヒロインに挑戦したにもかかわらず突然の「消失」は村上春樹の他者視点の不徹底の表れとしか言えないだろう。第五章では、『1Q84』に登場したふかえりという美少女ふかえりを中心に論じていきたい。サブカルチャーを連想できるふかえりは『1Q84』において性的描写や身体描写が不自然に多いものとなっている。ふかえりは実に父に性的被害を受けたが、意識的に復讐することなく、作品中では「母」や「愛と理解をもたらす」役割を果たしてただけだった。ふかえりの表象から、村上春樹が女性をリアリティに反してまで性的相手として描く傾向が強いことが指摘できる。第六章では、『1Q84』に登場した老婦人という登場人物を中心に論じた。村上春樹は若者を主な読者に想定して、若者を中心に作品を創作してきたと言えるが、『1Q84』の中に、脇役ではあるが、重要な老女像を作り上げた。この老婦人はリーダーとして反家庭内暴力と戦った。現代システムから自由な居場所に移動し、規範的な女性のアイデンティティから解放された老女として意味づけられた。しかし、反カルトをテーマにする村上春樹は結局老婦人の精神をカルトの文脈に回収しカルト的に描き、「消失」させた。老婦人の消失から善と悪の境目を曖昧化しすぎた村上春樹の精神がうかがえるだろう。

以上の検討によって村上春樹における他者表象には様々な問題が内包されていることが指摘できるが、中国、女性という他者表象において現代の問題をテキスト内に先鋭に取り込み、新たな他

者性の表現空間を創り出していることは疑いようがない。本論文は村上春樹文学の他者を中国、女性という〈他者表象〉を分析することによって明らかにするものである。



## I 村上春樹における中国

### 第一章 村上春樹における中国表象：他者の矮小化

#### 第一節 『羊をめぐる冒険』における「羊」の意味

村上春樹の中国人関心はおそらく神戸生まれに期限するだろう。神戸には「南京町」という中華街があり、周りに中国人がたくさんいて、村上春樹は敏感に在日中国人という日本の中の他者に中国していた。

また、村上春樹はエルサレム賞受賞式典（2009年）でのスピーチの中で、自分の父と戦争を言及した。

昨年私の父は90才でなくなりました。彼は元教師でたまにお坊さんとして働いていました。彼は大学院にいた時、徴兵され中国に送られました。戦後生まれの子供として、父が朝食前に長く深い祈りを仏壇の前で捧げていたのを目にしましたものです。ある時、私がどうしてお祈りをするのかたずねたところ戦争で死んだ人々のために祈っていると答えてくれました。

味方と敵、両方の死んだ人たちがすべてに祈りを捧げていると父はいいました。仏壇の前で正座する彼の背中をながめると、父にまわりつく死の影が感じられるような気がしました。

父は亡くなり彼の記憶も共に消え、それを私が知る事はありません。しかし父に潜んでいた死の存在感は今も私の記憶に残っています。それは父から引き出せた数少ない事のひとつであり、もっとも大切な事のひとつであります。

このように村上春樹は幼い時から「中国」を意識していた。村上春樹の精神世界において、戦争の被害を考える上で中国を避けていけない存在であろう。しかし村上春樹は作品において「中国」と「中国人」を分けて表象してきたことは今までの研究では十分注意されてこなかった。この章では『羊をめぐる冒険』における「羊」の意味を解説しながら、村上春樹における中国表象の独自性と問題を分析したい。

『羊をめぐる冒険』は村上春樹の1982年の長編小説であり、「僕」、ネズミとジェイを中心人物とする初期三部作の三作目である。この小説は前の二作（『風の歌を聴け』と『1973年のピンボール』）と同じ、都市に生きる孤独な「僕」の物語である。日本を支配する大物の先生の秘書に私は「羊」探しの仕事を任され、その後ネズミの願いに答えて、ふるさとに帰ってネズミの代わりにさようならを二人（ジェイとネズミの付き合っていた女性）に告げて、北海道へ向かう。北海道で「僕」は、羊に入られたことのある羊博士に会い、「羊」の前世の事情を知り、その後、羊博士からもらったヒントで北海道の山奥に行き、ネズミが羊と一緒に自殺したということが分かったという物語である。

この作品により一九八二年に村上は第4回野間文芸新人賞を受賞した。また一九九一年にフランス語訳版『La Course au mouton sauvage』の翻訳者パトリック・ドゥヴォスが第2回野間文芸翻訳賞を受賞した。現在まで二五〇万部以上発行されていて、村上春樹の小説のなかでよく知られて

いる小説の一つであると同時に、村上春樹研究者に注目されている小説である。

「羊」はこの作品の中で中心になっていることは言うまでもない。「羊」を巡って多様な解釈が行われてきた。鮎川信夫は「羊」という存在を「政治・宗教・文化のどの領域でも、その影を認めることができる」「それだけのメタフォリカルな幅と力」を持ったものとしていた<sup>14</sup>というように羊を論じた。生井英考は村上春樹が「羊」のイメージをブルックス・ブラザースの商標の金羊毛から採ったと指摘した<sup>15</sup>。加藤典洋は「羊」を「あの一九六〇年代末期から七〇年代初頭にかけて、当時の若い世代をより非現実の彼岸へと押しやった「革命思想」「自己否定」という「観念」ではないだろうか」と論じた<sup>16</sup>。磯田光一は「羊」を「あらゆる対立が一体化する」「完全にアナーキーな観念の王国」を築こうとするもの、「憑依力を持った観念の魔」のように論じた。(ここだけ注ない)柄谷行人は「羊」という概念が個に根ざす思考を否定し、「均質と確立の世界」に対して「意味」を保証するものであり、この羊の属する領域を「アジアと民権という軸に存在する「暴力」の領域」として論じた<sup>17</sup>。清水良典は「羊」は「あたかも日本ファシズムや悪しき権力や「アナーキーな観念の王国」の〈影〉として生まれたものが、その後の村上の作品に地続きで根を延ばし、物語の生命力を供給する地下茎に育っていった」のだと論じた<sup>18</sup>。の位置

また、キリスト教における羊のイメージから論じたものもある。羊はキリスト教において頻出した動物で、主人に従順な動物でキリスト教では神に信仰をささげるキリスト教徒のシンボルとされる。『新約聖書』に最後の審判でキリストが善き者と悪しきものを分けるのを、羊と山羊を分けるようにと例えている如く、よく山羊との対比で語られるが、山羊より羊は優れた存在に見られている。これに基づき、徳永直彰<sup>19</sup>は「羊」を「キリスト教的表象と日本的表象の並存がみとめられる」と語っている。山羊スケープゴートは聖書に見える「贖罪の山羊」の意味である。古代ユダヤでは、白い山羊に人間の罪や苦難を背負わせて荒野に放す習慣があり(『旧約聖書・レビ記』)、これから転じて、ナチズムにおけるユダヤ人のように他のものの責任の身代わりとして社会から圧迫・迫害される個人や社会層を指す。桂秀実<sup>20</sup>は「羊」を「スケープゴート」であると考え、この小説は「様々な『政治』的問題の比喩として読み換えうる」ものと考えている。(注の位置はここ)関井光男は「〈羊〉はどこへ消えたか」<sup>21</sup>で西欧において星は不死・魂を表し、ダビデの紋章に象徴される芒星やキリストを指す。これらのことから、背に星型の紋を帯びた羊は近代西欧の力を象徴すると共に、近代日本の西欧化への意志を象徴すると指摘する。(注の位置はここ)

テキストに「近代日本の象徴」のように詳しく書いた一方、深みのあるメタファーとして「羊」

<sup>14</sup>鮎川信夫 「若い世代の感性」『週刊文春』1982. 11

<sup>15</sup>生井英考 『村上春樹と黄金の羊』『ユリイカ』 15巻12号 1983. 12

<sup>16</sup>加藤典洋 「自閉と鎖国——一九八二年の風の歌——村上春樹『羊をめぐる冒険』」『文芸』河出書房新社 22巻2月 1983. 02

<sup>17</sup>柄谷行人 「村上春樹の『風景』」『海燕』8巻12号 1989. 12

<sup>18</sup>清水良典 「1982『羊をめぐる冒険』——作家「鼠」の死」『ユリイカ』32巻4号(通号429) 2000. 03

<sup>19</sup>徳永直彰 「村上春樹作品におけるキリスト教的表象——『羊をめぐる冒険』『ノルウェイの森』を中心に」『埼玉大学紀要(教養学部)』43巻1号2007

<sup>20</sup>桂秀実 「折り返された「未来」」『すばる』5巻7号 1983. 07

<sup>21</sup>『國文学』一九八五年三月号。その後『村上春樹スタディーズ01』(1999. 06)に収録

に魅力があるものとして設定されていると捉えることができる。本論はテキストに戻って、中国という角度から「羊」を検討し直したい。

『羊をめぐる冒険』の中に書かれて注目された羊は二つある。一つ目は日本の歴史の中の羊であり、もう一つは背中に星型の斑紋を背負う羊である。今までの研究の中で、この区別を指摘したものはない。(以下赤字部分不要。おそらく言わなくても読者がわかるだろうということを前提に考えたのだろうが、)

ここでまずテキストの中にある二種類の羊を明らかにしておきたい。まずは日本の歴史の中の羊である。羊が安政年間に中国から日本に輸入されたが、すぐ絶滅した。その後、明治時代に日本はアメリカから羊をもう一度輸入して、戦争のために北海道に農民を移入し養育を推薦した。その歴史を『十二滝町の歴史』という地方誌によってテキストで紹介している。しかし戦後オーストラリア及びニュージーランドとのあいだで羊毛と羊肉が自由化されたことで、日本における羊育成のメリットは殆んどゼロになって、羊は日本に見捨てられた。他方、背中に星型の模様を背負う特定された「羊」だが、この「羊」は霊能者的なもので、人間の体に入ることによってその人を変えることができる。この「羊」は1936年に中国の満州で農林省スーパーエリートだった羊博士の体に入った。羊博士が国に送られたことにより、「羊」は日本に渡った。1936年の秋に、この「羊」は羊博士の体から抜け、監獄に投じられたある右翼の青年の体に入った。「羊」に入られたこの青年は後にカリスマ的な大物の先生になり、戦前は中国に行きそこから大量な財産を日本に持って帰り、その財産で戦後の日本を支配した。しかし、いつの間にか、この「羊」は先生の体からも抜け出た。「羊」を探すために、先生の秘書は「僕」に「羊」探しを強要した。結局その「羊」は先生の息子であり「僕」の親友であるネズミの身体に入って、ネズミの自殺により消滅したという次第である。このように実在の歴史の中の羊とメタファーとしての観点の「羊」という二種類が存在している。

羊は二つに分けられているにもかかわらず、どの羊もメタフォリカルな幅と力を持っているに違いないので、その意義を本章で探ることにしたい。テキストから見ると、日本の歴史の中の一般的な羊は「日本の近代そのもの」を象徴しているようだ。そのことばを言い出したのは、「僕」に羊探しを強制したある右翼の大物の先生の秘書である。

羊が日本に輸入されたのは明治初期ではなく、安政年間だ。しかしそれ以前には、君の言うように、日本には羊は存在しなかったんだ。平安時代に中国から渡来したという説もあるが、殆んど日本人は羊という動物を見たこともなければ理解もできなかったということになる。十二支の中にも入っている比較的ポピュラーな動物であるにもかかわらず、羊がどんな動物であるかということは、正確には誰にもわからなかった。

(略)

歴史的に見て羊という動物が生活のレベルで日本人に関わったことは一度もなかったんだ。羊は国家レベルで米国から日本に輸入され、育成され、そして見捨てられた。それが羊だ。戦後オーストラリア及びニュージーランドとのあいだで羊毛と羊肉が自由化されたことで、日本における羊育成のメリットは殆んどゼロになったんだ。可哀そうな動物だと思わないか？まあいわば、日本の近代そのものだよ。

(略)

徹底して管理された動物なんだ。<sup>22</sup>

秘書は羊を「日本近代そのもの」だとはっきり言った。村上春樹も講演で「羊は明治維新の折に外国から珍しい動物としてもたらされて、日本政府によって政策として飼育を奨励され、そして今では経済効率の悪さからほとんど見捨てられかけている動物であるということを知りました。羊の運命というものは、ある意味では日本という国家の無謀なほどの速さでの近代化の一つの象徴でもあったわけです。そのようにして僕は「羊」というキーワードを使って長編小説を書こうという気持ち固めていきました。」<sup>23</sup>と述べているところから、羊は日本の近代そのものであることはおそらく間違いないだろう。しかし、羊は近代のどの段階でありどの方面であるかについては多様な連想ができるに違いないが、この実在する羊への注目がこれまでほとんどなかった。

その中で、日本の北海道への「進出」の歴史に注目する指摘がある。「僕」は羊博士の牧場のある町——十二滝町へ向かう途中、『十二滝町の歴史』という本を読み始めた。この本は昭和四五年五月に、昭和十五年十二滝町(三階?滝町という町があるが、北海道に十二滝町がなかったことから、十二滝町は架空の町に違いない)に生まれの郷土史家によって書かれたものである。著者の著書はこの一冊だけだった。本によれば、明治十三年の初夏十八名の津軽の貧乏な小作農が北海道へ来て、札幌でアイヌ人の案内人を雇った。語り手の推察によれば、このアイヌ族の青年は躁鬱症の傾向がある。十九人は平野部を避けて未開の名前のない奥地を探し出し、北海道の酷な気候と戦い定住した。アイヌ族の青年はそのままふるさとに帰らず、名前を変えそこに住んだ。その後この町は少しずつ人口を増やした。それに明治二十一年に戸籍を作ってもらった。明治三五年(1902年)に、十二滝町の近くが牧草地として適していることがわかってから、政府からただ同然の値段で羊の群れが払い下げられた。ふるさとに帰らなかったアイヌ族の青年は羊に最も興味を持っていた。「来るべき大陸進出に備えて防寒用羊毛の自給を目指す軍部が政府をつつき、政府が農商務省に緬羊飼育拡大を命じ、農商務省が道庁にそれを押し付けた」<sup>24</sup>という話だった。緬羊は増えつつあるが、日露戦争が始まり、アイヌ族の青年の息子は死んだ。「どうして外国までかけて行って戦争なんかするんですか」<sup>25</sup>という誰の?問いに答えてもらわないまま、年寄りになったアイヌ族の青年が死んでしまった。その後の十二滝町の歴史はアイヌ族の青年抜き歴史になり、つまらなくなると「僕」は感じた。

松枝誠<sup>26</sup>はここに叙述された十二滝町の歴史とそれに映る北海道開拓の歴史と事実との間に二点の齟齬があると述べた。一つ目は歴史にこういう「自移農夫」ではなく「募集移民」として北海道

<sup>22</sup>村上春樹『羊をめぐる冒険』上 講談社文庫2004 P176

<sup>23</sup>一九九二年十一月十七日、パークレーで行われた英語講演「羊男と世界の終わり」の中の発言である。ジェイ・ルービン 著 畔柳和代訳

『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』(新潮社2006)より引用。

<sup>24</sup>村上春樹『羊をめぐる冒険』下 講談社文庫 2004 P89

<sup>25</sup>村上春樹『羊をめぐる冒険』下 講談社文庫 2004 P90

<sup>26</sup> 松枝誠 「『羊をめぐる冒険』論：北海道から満州、そして戦後」『論究日本文学』86号2007.05

に渡ったということである。もうひとつはアイヌ族の青年は自発的に名前を変え、「日本の国民」に同化することである。明治維新後、国防・経済およびナショナリズムの高揚に基づき、明治政府は「開拓使」を設け、「蝦夷地」を「北海道」と改称し、移民を募集して移動させた。この二点に基づき、松枝はアイヌ青年の視点が『十二滝町の歴史』に排斥されたと述べた。確かに、松枝が指摘するようにアイヌ青年は躁鬱症の傾向があるかどうか、自ら住むことを決め名前を変えたかどうかは非常に疑わしいことである。戦後、移住した本土人の子孫の郷土史家が作った偽装の「歴史」ではないかと思う。

『羊をめぐる冒険』が出て間もなく、日野啓三によって北海道の描写に文体の不統一で批判されたことがある。<sup>27</sup>小説に地方誌のまともらしいものを長々とページ数を使ったところもそれに当たるだろうが、こういう歴史記述の中に他者視点の欠如を指摘するに欠かせない手法として村上が用いたものと考えられる。スピヴァックは「サバルタンの文学的表象——第三世界の女性のテキスト」において、歴史と文学は現実の出来事を扱うことには程度の違いだけが考えられると述べ、歴史にはサバルタンをはじめとする第三世界の女性を含み他者の声が隠蔽されていることを指摘した<sup>28</sup>。アイヌ青年の声や北海道開拓の歴史の欠落から、村上春樹は本の中に本を読むという形で他者に注目し歴史の虚構性を暗示しているのではないかと思う。

一方、「安政年間」が気になってならない。安政年間の終末に第二次アヘン戦争という日本史とアジア史に影響を及ぼす大事件が発生した。清国を倒すことによって日本は自信を持ち、約半世紀後、日露戦争でロシアに勝ち、アジアにおいて侵略を広め、第二次世界大戦でアジアに向かって侵略戦争を発動して失敗し、日本を含めたアジアに大きい被害を及ぼすことはここで饒舌に述べるまでもない。中国から輸入してきた羊の絶滅に、日本近代の「脱亜」と「脱華」の傾向が象徴されていると言えるだろう。このように村上の文学には日本の歴史の中に羊というメタファーで「中国」という要素を強く持ち込んでいるのである。

## 第二節 「羊」のふるさと

この「羊」は自分の意志で宿主を選んでいることがはっきりわかり、憑依先によって「羊」に対する理解も違っている。

右翼の先生は「羊」を体に入れられ、戦後の日本を支配するよく知られた大物になった。北海道の貧農の三男坊に生まれた彼は、十二の歳で朝鮮に渡り、また内地に戻って右翼団体に入った。そこまでの先生は普通の右翼であったが、一九三六年の夏に刑務所から出た先生は羊に入れられ、まるでべつ人間に生まれ変わった。というのは「人心を掌握するカリスマ性、綿密な倫理性、熱狂的な反応を呼びおこす演説能力、政治的な予知能力、決断力、そして何よりも大衆の持つ弱点をてこにして社会を動かしていける能力」を備えていた。その後、彼は影の道を歩んで、社会を動かした。結局一九三七年中国大陸に渡った。戦後、先生は裁判を逃れ、政界、財界、マス・コミ、官僚組織、

<sup>27</sup> 日野啓三 佐伯彰一 佐々木基一「創作合評村上春樹『羊をめぐる冒険』『群像』 37 巻 9 号 1982.09

<sup>28</sup> ガヤトリ・C・スピヴァック著 鈴木聡他訳『文化としての他者』復刊版 紀伊国屋書店 2000.06

文化、権力から反権力まで強大な地下の王国を築いた。この王国は戦後の日本に大きな影を落とした罪悪的な組織である。

しかし先生は作中時間で倒れていて、生命の終結する立場であって、彼の代わりに出場するのは先生の秘書である。秘書は戦後エリート階層を代表している。彼の「羊」への態度として、「生活のレベルで日本人に関わったことは一度もなかった」しかも「徹底して管理された動物」である「羊」を、秘書は一見して批判と同情の立場をとったようだ。しかし、『羊をめぐる冒険』の最後、この秘書は背中に星型の模様のつく羊を日本に導き、日本を支配する為に再利用しようとしたことが分かった。戦後生まれのエリート階層は日本の近代化をみて考えることはそれを日本に導入することであることが、「羊」から分かった。つまり、戦後のエリートたちは「羊」の愚劣さを知りながらも、反省するより利用する態度をとっていたのである。

また、「羊」の一人目の憑依先は実は羊博士であることに注目しなければならない。羊博士は明治時代の知識人である。日本本土と朝鮮と台湾を一体化した広域的な計画農業化をテーマに東京大学を首席で卒業すると、農林省に入省し、二年間本省で鍛えられた後、当時日本の植民地になった朝鮮半島に渡って稲作の研究をし、そこで「朝鮮半島における稲作に関する試案」というレポートを提出した。羊博士は政府に信頼された「スーパーエリート」であった。中国に対する全面的な侵略戦争の始まる三年前、つまり一九三四年に羊博士は東京に呼び戻され、陸軍の若い将官にひきあわされた。中国大陸北部における軍の大規模な展開に向けて羊毛の自給自足体制を確立することが羊博士の任務だった。それで羊博士は満州に渡って現地視察をした。満州に行くまでエリートの羊博士は帝国の精神と政策に忠実だったと言えるだろう。満州で羊博士は羊に入れられ、エリートの座から「転落」をし始めた。一九三五年の七月に、羊博士は一人で馬に乗って緬羊視察に出かけ、満蒙国境近くで道に迷ったので、洞窟に一夜を過ごした。夢の中に羊が現れ、中に入ってもいいかと羊博士に聞いた。夢の中だと分かっているから羊博士は承諾したが、目が醒めても羊が体内にいますままだった。それから羊博士が羊との間に「特殊な関係を持つようになった。羊博士はその特殊な関係を「交霊」のように説明していたが、政府に認められず、「精神錯乱」というレッテルを貼られて本土へ送り帰された。精神錯乱について「いわゆる植民地呆け」<sup>29</sup>のように羊博士は説明した。これは羊博士が「羊」に入れられ捨てられた経緯である。

さて、羊博士は「羊」をどのように理解しているのだろうか。

まず確認しておかなければならないことは、羊博士は「羊」を重要視して、生涯をかけて羊を研究して、人に羊博士と呼ばれるまでになったことだ。羊博士は「羊」について明言していないが、「役人なんてみんな馬鹿だからな。奴らには物事の真の価値などわからんのだ。あの羊の持つ意味の重大さも奴らには永遠にわからんのだろ」<sup>30</sup>と語り、「羊」の大切な意味を当時の政治家・官僚批判と関連付けて論じた。そこにとどまらず、日本の近代そのものを批判しはじめた。

「日本の近代の本質をなす愚劣さは、我々がアジア多民族との交流から何ひとつ学ばなかったことだ。

<sup>29</sup>村上春樹『羊をめぐる冒険』下 講談社文庫 2004 P64

<sup>30</sup>村上春樹『羊をめぐる冒険』下 講談社文庫 2004 P61

羊のこともまた然り。日本における綿羊飼育の失敗はそれが単に羊毛・食肉の自足という観点からしか捉えられなかったところにある。生活レベルでの思想というものが欠如しておるんだ。時間を切り離れた結論だけを効率よく盗みとろうとする。全てがそうだ。つまり地面に足がついていないんだ。戦争に負けるのも無理はないよ」<sup>31</sup>

「日本の近代」と「羊」をかかわらせていることは明らかであり、この話を踏まえると羊博士の注目する日本の近代は戦前までの戦争によって推進した日本の近代化である。羊博士は日本の近代を「愚劣」だと述べ、アジア他民族との交流の中で、効率だけを重視し、「羊」を代表とした精神内核を無視したといった。夏目漱石が『三四郎』で三四郎の目を借りて東京の風景を見るとき、「明治の思想は西洋の歴史にあらわれた三百年の活動を四十年で繰り返している」と発したことを連想してならない。また、羊博士の身から連想される人物は同作の中の広田蓑先生である。夏目漱石の分身のような広田蓑先生は日露戦争に勝ち、強国の夢に耽った日本にどういう評価を下したのだろうか。三四郎は上京の電車で西洋人を見たところ、あまりの美しさに驚いた。同じ列車の髭の男広田は日本が日露戦争に勝って一等国になってもダメだと言い出した。それに、三四郎は「しかしこれからは日本もだんだん発展するでしょう」と弁護したが、その男は「滅びるね」と答えた。ここで共通するのは知識人として日本の近代への危惧である。夏目漱石の影響を村上春樹は受けたといってもいいだろうが、むしろ100年隔たってはいるが、二人は当時の日本を見て共に思索したのだろう。

それは、交流というのは平和的にも進行できることだし、そもそも平和的でなければ進めないものだろうが、日本は北海道を日本の中の外地にし、朝鮮、満州を日本の外の外地にして、戦争という最も残酷で愚劣な手段を選んだ。外見では近代化が発展したと見えても、その内核はナショナリズムによる他民族・他国を他者化し、暴力を施し、どの側にとってもメリットはなかったことが歴史的事実であった。

もともと、羊博士が羊に入られたのは「満蒙」近くの「国境線」であり、数年後そこでノモンハン事件が発生したことで注目されているが、実はその前にも多数のより小さい規模の戦争が行われた。村上春樹はそれを背景に代表作の一つ『ねじまき鳥クロニクル』（1994～1995、新潮社）を創作した後、現地まで行って紀行『辺境・近境』（1998、新潮社）を書いた。『辺境・近境』で村上はノモンハンにおける戦争を「日本という貧しい国家が生き残るために、中国というもっと貧しい国を「生命線を維持する」という大義のもとに侵略していたのだから、考えてみれば救いのない話である」<sup>32</sup>や「このあたりはもともとは、遊牧民が家畜を連れて季節ごとにあっちからこっちへと移動する「誰のものでもない」土地だった。そこで戦闘がおこなわれなくてはならなかったほとんど唯一の理由は、軍の面子と、「あわよくば」という冒険主義的な思想だけだったのだ。故郷を遠く離れて、蛆まみれになって激しい苦痛のうちに死んでいかなければならなかった当時の青年たちは、

<sup>31</sup>村上春樹『羊をめぐる冒険』下 講談社文庫 2004 P65

<sup>32</sup>『辺境・近境』文庫版 新潮文庫 2000.06 P196

死んでも死にきれない思いだったのではないか」<sup>33</sup>と述べ、日本の近代戦争の「愚劣」そのものを論じた。

アイヌの青年と羊博士が精神病にされるのは当時の主流思想としての戦争に反対する故ではないかと思えるし、羊博士の息子に対する無視と暴力も戦争に基づいた精神的なダメージに起源するだろうと思う。また、『1Q84』において主人公の天吾が父に無視される内核も全く同じ理由ではないかと思う。近代の戦争がもたらした苦痛は他民族・他国にとどまることなく、当時の日本人、または日本の戦後まで伝わったことを『羊をめぐる冒険』から伺えるだろう。このような日本近代の視点が村上の根底にあることは、村上と〈他者〉を考える上で、確認しておかなければならない。

しかし、日本と中国の戦争を考える上で、中国をどのように表象するかは問題だと思う。中国は侵略の被害を受けながら、『羊をめぐる冒険』の中で、邪悪な「羊」の故郷のように描かれたのは作者の偏見だろう。「羊」のようなひそかに戦後日本に暴力をもたらす存在はその後の村上春樹の作品『1Q84』に「リトル・ピープル」の形で現れたが、大学闘争に失敗した毛沢東を信仰する青年により作られた文化大革命前の中国のような農業コミュニンで初めて登場したことから、村上春樹の思想の構造の中で、中国という国を矮小化する傾向があるのではないかと思う。

一方、村上春樹は「中国」と「中国人」を論じる時、正反対の態度をとることはまだ指摘されたことがなかった。「中国」を矮小化したが、「中国人」特に「在日中国人」の生存とアイデンティティに先駆的に注目してきた。これは二章と三章で詳しく論じる。

---

<sup>33</sup> 『辺境・近境』文庫版 新潮文庫 2000.06 P199



## 第二章 『中国行きのスロウ・ボート』における中国人表象

### 第一節 『中国行きのスロウ・ボート』における在日中国人

村上春樹は現代日本で一番多く他者や外国を書く作家であり、言うまでもなく世界で読まれている作家である。ジェイという表象をはじめ、彼は中国が日本に重視されてなかった1980年代から、中国に注目した。特に、初期三部作(1979～1982)や、短編小説『中国行きのスロウ・ボート』(1980)、『アフターダーク』(2004)、『ねじまき鳥クロニクル』(1994-1995)『1Q84』(2009)で、中国や中国人はプロットとテーマの重要な部分になっている。現在日本の中の中国を研究するうえで村上には重要な参考になる作家である。本論はこれまで十分研究されてこなかった村上春樹早期の短編小説『中国行きのスロウ・ボート』に絞って、在日中国人という周縁化された人間と彼らのアイデンティティに注目し、論を展開していく。

『中国行きのスロウ・ボート』は「僕」と三人の中国人との邂逅を描く物語である。その三人は混乱したアイデンティティに痛みを感じながら、力いっぱい日本で生活し、日本人とコミュニケーションをとろうとしている。一人目は小学校一年生の時、試験会場の中国人小学校で出会った中年男性の中国人の小学校の先生だ。この小学校の先生は受験生に、中国人小学生を尊重してデスクに落書きしないことを理解させるために静かに普通ならぬ力を込めて語りかけ、何年経っても「僕」の記憶に残る。二人目は、大学二年生の時、バイト先の東京にある出版社で出会った中国人女子大生である。日本生まれ日本育ちの「中国人女子大生」は、日本を自分の居場所にするのができず、委縮と涙の混じった年月を過ごして来た。「僕」は彼女に同感したが、慰めてあげることができなだけでなくて、彼女の心に新たな傷をつけ加えた。三人目は、28歳の時、青山にあるカフェで出会った高校時代のクラスメートの男性である。高校時代「僕」よりしっかりしていた彼は、普通のサラリーマンになれなくて、今は中国人相手に百科事典を売っている。「擦り減りつつある」彼に何かしてあげる気持ちで、百科事典のパンフレットをもらっていつか買おうとしたのだが断られた。百科事典販売に定着することなく、それ以後は中国人相手に外のもの売るかもしれないのが理由であった。「僕」は最後に思うのは、日本は中国人の場所ではないに限らず、「僕」の居場所でもなかった。「僕」の思う中国は「僕」のための中国だけであり、「僕」は中国人のための「中国」を理解もできないし、何かしてあげることもできなかった。「僕」が児童期、青春期、成熟期に見て感じた中国人である。これらの中国人たちは、「僕」に他者を強烈に印象づけた存在であると同時に、「僕」の存在の場所の不確かさを自覚させた鏡でもあった。

『中国行きのスロウ・ボート』は村上春樹の大切な作品の一つである。『中国行きのスロウ・ボート』は村上春樹の初短編小説である。また、1980年4月『海』に掲載後単行文収録(1983年)と全作品収録(1990年9月)に当たって、二回も大幅な加筆修正が加えられる上、1997年に改定版も出された。初短編小説の上三回も加筆修正されたもので、この短編小説は村上春樹に相当重要視されていることがわかる。

しかし、『中国行きのスロウ・ボート』についての研究はまだ少ないと言える。先行研究では、3

人の中国人を「われわれ自身の象徴」(阿部好一)、〈日本人〉に対する他者の総称(田中実)<sup>34</sup>、「この世界で〈孤立〉しながらも失いそうな〈誇り〉を切符のように握りしめ、懸命に生きる人々の総称」(津久井秀一)<sup>35</sup>のように見解が分かれているが、作品に登場した3人の中国人を抽象的・観念的に捉える傾向があり、具体的な中国人とは別に考えているところは一致している。

## 第二節 在日中国人のメッセージ

村上春樹の出身地である神戸には、神戸中華同文学校という歴史のある中国人小学校が一つある。

神戸が1868年に開港されて以来、神戸に華僑が住み始めた。後に西洋商人の使用人や商売人として華僑は次々と集まり、現在の中華街南京町の原形となっている。なお、華僑の学校、病院、関帝廟なども南京町の周辺に散らばっている。華僑を含めた移民は世界が波乱になる時、アイデンティティや生存そのものに一番早く被害に遭う人々と言っても過言ではなかろう。神戸中華同文学校の歴史を見ると、日中米三国の戦争に挟まれた華僑の歴史がよく分かる。

1900年に神戸中華同文学校の前身の一つ神戸華僑同文学校が神戸において開校した。その一年前、戊戌の変法<sup>36</sup>のリーダーの一人梁啓超<sup>37</sup>は日本に来て、中国が侵略を防ぐには教育を重視しなければならないとスピーチし、その影響で華僑たちは寄付金を出して華僑小学校を建設した。その小学校は2018年の今でも日本に残っている五つの中華学校<sup>38</sup>の一つとして活躍している。1932年に、満州事変の影響で帰国する華僑が増えたせいで、神戸中華同文学校<sup>39</sup>は学生減少だけではなく経費不足にもなり、一時閉校したこともあった。1945年に、神戸大空襲により校舎は焼かれたのでまた閉校になった。1952年に、横浜に「学校事件」が起こり、中華人民共和国と中華民国政府とのどちらを支持することで、横浜の中国人小学校・華僑総会の全ての組織が二分された。神戸中華同文学校は横浜の轍を踏まないため、賢明に1972年日中国交が樹立するまで中立の立場を堅持した。このように、神戸にある一つの中国人小学校の歴史から、アジアの近代戦争史が覗かれている。<sup>40</sup>

「僕」がはじめて中国人と出会ったのは、神戸中華同文学校が原型であろうと思うある中国人小学校であった。模擬テスト会場とされたそこで「僕」が出会った中年男性の監督官は、「僕」たちに中国人小学生を尊重し、落書きしないいたずらしないことを説得しようとした。幼い時の出会いは、「僕」の心に深い印象を残した。

<sup>34</sup>田中実 港のない貨物船―「中国行きのスロウ・ボート」 『国文学：解釈と鑑賞』1990.12

<sup>35</sup>津久井秀一 村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』試論：〈非正規〉な記憶への「放浪」あるいは「冒険」 『宇大 国語論究』 2015.11

<sup>36</sup>戊戌の変法というのは、清王朝時代の中国において、1898年(戊戌の年)の4月23日(新暦6月11日)から8月6日(新暦9月21日)にかけて、光緒帝支持の下、若い士大夫層である康有為・梁啓超・譚嗣同らの変法派によって行われた政治改革運動。西太后の反対により、光緒帝は監禁されて実権を失い、変法派の主要人物は処刑。

<sup>37</sup>1898年9月21日に戊戌の政変が失敗した後、梁啓超は日本大使館に救いを求めた。日本政府は梁の亡命を許可し、10月3日に軍艦大島丸に乗船させた。その後、横浜中華街に居住。

<sup>38</sup>他の4軒は横浜中華学院(1897年～)、横浜山手中華学校(1898年～)、東京中華学校(1929年～)、大阪中華学校(1946年～)である。

<sup>39</sup>当時はまだ神戸中華同文学校に合併していない神戸華僑同文学校と中華学校は全部閉校になっている。

<sup>40</sup>華僑華人の事典編集委員会『華僑華人の事典』(2017.12.1)と神戸中華同文学校のホームページに参考

「もちろんわたくしたち二つの国のあいだには似ているところもありますし、似ていないところもあります。わかりあえるところもあるでしょうし、わかりあえないところもあるでしょう。それはあなた方のお友だちでも、やはりわかってもらえないこともある。そうですね？わたくしたち二つの国のあいだでもそれは同じです。でも努力さえすれば、わたくしたちはきっと仲良くなれる、わたくしはそう信じています。でもそのためには、まずわたくしたちはお互いを尊重しあわねばなりません。それ……第一歩です」

沈黙。

「例えばこう考えてみて下さい。もしあなた方の小学校にたくさんの中国人の子供たちがテストを受けに来たとしますね。今みなさんがやっているのと同じように、今度はみなさんの机に中国人の子供たちが座るわけです。そう考えてみて下さい」

仮定。

「月曜日の朝に、みなさんが学校にやって来ます。そして席に着きます。するとどうでしょう。机は落書きや傷だらけ、椅子にはチューインガムがくっついている、机の中の上履きは片方なくなっている。さて、どんな気がしますか？」

沈黙。

「例えばあなた」彼は実に僕を指さした。僕の受験番号が一番若いせいだった。「嬉しいですか？」

みんなが僕をみていた。

僕は真赤になりながら慌てて首を振った。

「中国人を尊敬できますか？」

僕はもう一度首を振った。

「だから」と彼は正面に向きなおった。みんなの目も、やっと教壇の方向に戻った。「みなさんも机に落書きしたり、チューインガムを椅子にくっつけたり、机の中のものにいたずらしたりしてはいけません。わかりましたか？」

沈黙。

「中国人の生徒はもっときちんとした返事をしますよ」

はい、と四十人の小学生たちが答えた。いや三十九人。僕には口を開くことすらできなかった。

「いいですか、顔を上げて胸をはりなさい」

僕たちは顔を上げて胸をはった。

「そして誇りを持ちなさい」

「落書きはやらないでください。机の中のものにいたずらしない下さい。チューインガムを椅子にくっつけてはいけない」このように簡単な話を、その中国人先生は長々しいスピーチにした。四十歳以上で、左足を引きずって教室に入り、粗末な桜材の杖をついたこの監督官、無論日本社会で他者化された存在である。他者化されたこの先生は、主流の日本社会とのコミュニケーションを諦めず、他者と自己の間の広い間隔を越えようとしていた。彼は日本と中国という両国を分かちあえ

る人と人のように説明した。そして日本人の子どもにいたずらされる立場を想定して中国人小学生の気持ちを説明した。最後にやっとな落書きといたずらをしないでくださいという願いを言い出した。

山根由美恵は、この「監督官」の言葉を「理想的な美しい考え」と、その語りに「理想に同意を強要する」性質を読み取った<sup>41</sup>。浅利文子は、その長々しいスピーチを「日本社会における過剰な気負い」を感じ取った<sup>42</sup>。津久井秀一は落書きを「中国」と繋がりたい欲求の現れ、つまり「交信」のようなものだと解釈した<sup>43</sup>。日本人本位の考え方と違って、中国人小学校の先生を「在日中国人」の一人だと考えると、これらの論には先生の行動が理解されていないところがある。

言葉と文化の隔たりによって、実は在日中国人は日本において周縁化された人間の一例である。それは小学生の「僕」の目にも映っている。中国人小学校は遠くて、行くだけに電車で三十分かかる。小学生の「僕」にとっては、それを「世界の果て」のように感じる。また、「僕」は中国人小学校について周りの人に聞いたが、誰一人何一つ知らなかった。子供が知らなかろうが、保護者たちや先生たちさえ知らないというのはおかしい。

実は中国人小学校は学校法人ではあるが、朝鮮学校と同じく「民族学校」と言われた。日本の学校教育法に基づく「一条校」でなくて、日本政府からの助成金もないし、地元からも助成金ももらえなかった。一方、欧米系のインターナショナルスクールがもらっている指定寄付金からも対象外である。また、恒常的な寄付金免税の「特定公益増進法人」としても認められていない。そのほか、日本の学校では当たり前の「学校保健安全法」、「日本スポーツ振興センター法」「学校給食法」などからも対象外である。<sup>44</sup>

中国人小学校は法律から排斥され、また一人一人の無関心によって築かれた偏見によって、世間から抹殺されていたのだろう。

そんなところに「僕」一人だけが行かせられるのは孤独で不安であった。そのため「僕」は無意識のうちに中国人小学校を排斥するようになり、試験の日も「僕」は暗い気持ちだった。一ダースの新しい鉛筆を削って、指定されたとおりに弁当とスリッパをビニールの鞆に詰めて、母に分暑いセーターを着せられた。中国人小学校に行くに当たって、「僕」は万全の準備を整え、母は旅に出る子を心配している。「僕」と母の慎重さが語ってくれたのは、中国人や中国人小学校は「僕」と「僕」の世界にとっては完全な他者であることだ。

他者化されたとは言っても、他者は自分の存在を他者と認めて諦めてはいなかった。先生の長いスピーチは何よりの証拠である。机に落書きされて、上履きが片方しか残らなくて、席にチューイングガムがくっつけられる日本人の小学生に尊重を求めるために、この先生は力一杯にメッセージを出した。大人のようにやく発したメッセージである。子どもはどうかというと、沈黙していた。「な

---

<sup>41</sup>山根由美恵「村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』論—対社会意識の目覚め」『国文学攷』2002.03

<sup>42</sup>浅利文子「村上春樹の中国—『中国行きのスロウ・ボート』という視点から」『異文化』2010.04

<sup>43</sup>津久井秀一「村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』試論：〈非正規〉な記憶への「放浪」あるいは「冒険」」『宇大国語論究』2015.11

<sup>44</sup>華僑華人の事典編集委員会『華僑華人の事典』（2017.12.1）に参考

ん百人という小学生が列を作って同じ方向に歩いていたのに、彼らは地面にボールをつくわけでもなく、下級生の帽子をひっぱるでもなく、ただ黙々と歩いていた。彼らの姿は僕に何かしら不均一な永久運動のようなものを想起させた<sup>45</sup>この日、中国小学校に受験する日本の子は、おそらく「僕」と同じように、元の学校から一人だけがここに流された憂鬱な気持ちでいただろう。それに加えて、周りに知り合いもなければ、いたずらや話ができなくて、黙っていたのだらう。しかし本校で受験する中国人小学生はなぜ沈黙を続けたのだらうか、堂々と声を出すことができないのであろうか。話を認めてくれるのはあまりにも難しいからであらう。この現状は、在日中国人のアイデンティティの根本であり、尊重されない幼少期の人間に共通する挫折感であらう。子どもたちは反抗のメッセージを出すことができなくて、できたのは大人の先生だけだった。

先生が「在日中国人」であるというアイデンティティを無視することなく『中国行きスロウ・ボート』を見ると、現在の解釈とはむしろ反対の結論に至る。先生のスピーチは美しい理想とはいえ、それを「強要」するだけの価値と理由がある。落書きはあくまで一方的ないじめであり、「交」でもないし、「信」でもなかった。このような結論の背反は、村上春樹を見るときに立脚地の違いに起源すると思う。世界に注目する村上春樹を読むとき、世界からの読者の視点が必要不可欠なものである。

日本人の小学生や親にとって、中国の小学生は完全な他者であり、彼らへ共感を及ぶのは想定外のことであろうが、それに対して先生は日本人の小学生に中国人小学生の身になって物事を考えることを薦めた。在日中国人という他者への思いやりを日本人小学生に説明しながら、コミュニケーションをとろうとしていた。

先生のメッセージは日本人小学生の「僕」の耳に届いたから、「僕」はその日他者と交流することができた。しかし、そのメッセージを受け取ったのは「僕」だけだった。高校の時、「僕」は女友達に中国人小学校の細部、特に落書きするかどうかをめぐる出来事を幾度も確認したが、「僕」と心を通じるはずの彼女は全然記憶に残っていなかった。他者と対話したことがある人間と、ない人間との間に越えがたい隔たりが存在するせい、結局「僕」と彼女との間に何も起こらなくて、他者からのメッセージを内包しながら「僕」は孤独を続けた。ちなみに、この女友達との追憶は『村上春樹全作品 1979～1989』第3巻に収録された版にはなくて、初発表から10年後の単行本発行に際して書き添えたものである。10年間の間、他者からのメッセージを孤独に消化する作者にとって、知音を得られない寂しさゆえの一筆だらう。

女友達を家に送り届けた後、「僕」はバスの中で一人の中国人の少年の姿を思い浮かべた。それは「月曜日の朝、自分の机の上に誰かの落書きを発見した中国人の少年のこと」である。その後「沈黙」という一言が続いた。先生のメッセージはやがて全ての人に届かず、被害者が出たのは幻想だけではなく、おそらく日本社会に無視された事実であらう。その後の沈黙はコミュニケーションを断念した被害者の沈黙であり、他者に気づかないままの加害者の沈黙でもあるだらう。

---

<sup>45</sup>『中国行きのスロウ・ボート』 中公文庫 1986.01 P15

### 第三節 在日中国人と日本人の間のディスコミュニケーション

外部にメッセージが届けられなかった在日中国人はだんだん大きくなって、大きくなった「僕」と新たな出会いを遂げることになる。十九歳の「僕」は同年代の在日中国人女性との間に、在日中国人と二番目の出会いを成した。

彼女は横浜で輸入商をする父親を持ち、生まれてから中国へ行ったことなく、中国語も全くできない在日中国人女子大生である。彼女は中国へ行ったこともないし、中国語もできないし、中国人小学校へ通うことなく日本人と同じの人生を送った。しかし通訳になりたいということから、父と関係を悪くしても中国人というアイデンティティを受け継いだことがわかる。通訳の仕事を通して、文化とコミュニケーションの隔たりを償おうとしていたのだろうが、結局所属感に欠け自分まで主流社会の他者になり、緊迫感に追われた日々を送っていた。

「僕」とこの女子大生とはバイト先で知り合った時、彼女のこの熱心さの切迫感を感じた。「彼女のまわりのあらゆる日常性がその熱心さによって辛うじて支えられているのではないかといったような」切迫感である。熱心さにより在日中国人として辛うじて日本社会に入ったかもしれないが、その熱心さの深層に恐怖が潜め、彼女の他者化を深めただけではなく、日本人男性とのコミュニケーションの可能性を臆し、自分を疑うようになった。

つまり僕は彼女を逆回りの山手線に乗せてしまったのだ

(中略)

彼女が駒込駅に姿を見せたのは十一時を十分ばかりまわったところだった。階段のわきに立っている僕を見て彼女は力なく笑った。

「間違えちゃったんだ」僕は彼女と向き合うようにして、そう言った。彼女は黙っていた。

「何故かわからないけれど、とにかく間違えちゃったんだ。どうかしてたんだよ、きっと」

「……」

「それで待ってたんだ。君に謝ろうと思って」

彼女はコートのポケットに両手をつっこんだまま口をすぼめた。

「本当に間違えたの？」

「本当って……、もちろんさ。でなきゃこんなことになるわけじゃないじゃないか？」

「わざとやったのかと思ったわ」

「僕が？」彼女が何を言おうとしているのか、僕にはよくわからなかった。「何故僕がそんなことをすると思う？」

「知らないわ」

彼女の声は今にも消え入りそうだった。僕は彼女の腕をとってベンチに座らせ、僕も並んで腰を下ろした。彼女は足を前にのぼし、白い靴の先をじっと見ていた。

「何故、わざとやったと思ったの？」僕はもう一度そう訊ねてみた。

「怒ったのかと思ったのよ」

「怒る？」

「ええ」

「何故？」

「だって……、早く帰るって私が言ったから」

「女の子が早く帰るって言うたびに腹を立ててちゃ身が持たないよ」

「それとも私と一緒にいるのがつまんなかったのよ、きっと」

「まさか。誘ったのは僕の方じゃないか？」

「でもつまんなかった。そうでしょう？」

「つまなくなんかないよ。とても楽しかった。嘘じゃない」

「嘘よ。私と一緒にいたって楽しくなんかないわ。あなたが本当に間違えたんだとしても、それはあなたがこころの底でそう望んでいたからよ」

僕はため息をついた。

「気にしなくてもいいのよ」と彼女は言った。「こんなのこれが最初じゃないし、きっと最後でもないんだもの」

彼女の瞳から涙が二粒あふれ、コートの上膝に音を立ててこぼれた。

いったいどうすればいいものか、僕には見当もつかなかった。僕たちはそのままの姿勢でずっと黙っていた。電車が何台かやってきては乗客をはき出し、彼らの姿が階段の上に消えると、また静けさが戻った。

「お願い。もう私のことは放っておいて」

僕は何も言えずじっと黙っていた。

「本当にもういいのよ」と彼女は続けた。「正直言って、あなたといる時はとても楽しかった。こんなのって久しぶりだったの。だからとても嬉しかった。いろんなことがうまく行きそうにも思えたわ。山手線の逆回りに乗せられた時だって、まあいいや、と思ったの。何かの間違いだろうってね。だけど……」  
彼女の声がつまり、涙の粒が彼女のコートの上膝を黒く染めていった。「だけどね、電車が東京駅をすぎたあたりから、何もかもが嫌になっていっちゃったの。もうこんな目にあいたくない、もう夢なんて見たくないってね」

そんなに長く彼女がしゃべったのは、それがはじめてだった。彼女がしゃべり終わると、長い沈黙がまた僕たちのあいだに下りた。

「悪かったと思う」と僕は言った。冷やかな夜の風が、夕刊をばらばらにほぐして、フォームの端まで運んでいった。

彼女は涙に濡れた前髪をわきにやって微笑んだ。「いいのよ。そもそもここは私の居るべき場所じゃないのよ」<sup>46</sup>

言葉と文化の隔たりによって、在日中国人は日本において周縁化された。英文学専攻の夏目漱石は『私の個人主義』で「本場の批評家のいうところと私の考と矛盾してはどうも普通の場合気が引ける事に」なり、内面の苦闘を通してやっと立脚地を堅めたと決心した。文豪でさえ外国の文化に

<sup>46</sup>『中国行きのスロウ・ボート』 中公文庫 1986.01 P32

臆するほどであることがわかるが、一人一人の在日中国人は日本で怯んでいる。中国に住む中国人との間とは無論隔たりがあり、完全に理解しあうことができないが、日本や日本人に対しては、さらに気がひけるところがある。このことは一人目の在日中国人との出会いでわかったが、この女子大生からさらにわかるのは、時代の進みにつれ、在日中国人は日本とのコミュニケーションの可能性を疑うようになり、諦めつつあることだろう。

この諦めの背後に潜んでいるのは彼女をはじめとした 1980 年代の在日中国人女性の危ういアイデンティティであろう。

彼女の父は「横浜で小さな輸入商を営んでおり、その扱う荷物の大半は、香港からやってくるバーゲン用の安い衣料品だった」。永野武は『在日中国人：歴史とアイデンティティ』<sup>47</sup>で郷土理念を重視することを在日中国商人層の特徴としてまとめた。つまり同郷の人と群れて住んだり商売したりするほか、故郷の文化と言葉を重視すると言われた。香港に通用する言葉は北京語と違い、いわゆる広東省と香港で使われたカントン語であった。香港と商売ができることから、おそらくこの女の子は中国の中で外国へ出稼ぎ広東人の子どもではないかと推測できるが、広東省は二十一世紀の今でも家父長制の伝統を頑固に継いだことで有名である。彼女は父親とあわなくて、兄のところに「転がり込んだ」と作品の中で紹介された。この父親は小さな商売をしながら、日本の女性大生でも珍しい八〇年代に娘を大学に送り出す新しい理念を持っているが、娘と違う母語と価値観を持ち結局コミュニケーションできない親子になったか、「女子才無ければ便ち是れ徳」という伝統理念を持ち娘の進学を断り、娘を必死にバイトしなければ生きていけない境地に陥らせたかのどちらかだろう。しかし、彼女は父から中国というアイデンティティを部分的に継続したが、言葉と文化理念を継承できず、結局日本と中国のどちらにも完全になりきれず移民のこどもならではのジレンマを持っている。八〇年代では日本の中の移民は今ほど多くなかったが、港町で育った経験を持った村上春樹は、先駆的にこの問題を気づき、在日中国人アイデンティティの危うさに注目してきた。

また、この女性の涙と悔しさの元は女性という身に起源するものもあるだろう。「わざとやったのかと思ったわ」「だって……、早く帰るって私が言ったから」と彼女は「僕」に言い、「早く帰る」というのは夜の続きを断る意味だろうが、それを言いだしたことで、「僕」にいたずらされたと思った。本田和子は『女学生の系譜・増補版』<sup>48</sup>で明治の女学生を明治という時代によって用意された若い娘たちの近代化の装置に置かれたもののように論じ、近代化されながら、高等女学校で良妻賢母主義教育をひそかに無化していることを明らかにしていた。半世紀を過ごし、リブ運動も盛大に行われた一九八〇年代に、女子大生は男性の誘いを断ることを恐縮に思い、怒られるのを怖がっていた。中国女性大生の恐縮は中国人故だけではなく、女性だからでもあるだろう。

中国人小学校の先生は「僕」たちに対して、長々しいスピーチをし、コミュニケーションを取ろうとしていたが、そのメッセージを受けとったのは「僕」だけだった。この中国女性「僕」を信用して話し合い、連絡先まで教えたが、「僕」はうっかり連絡先を書いたメモをゴミ箱に捨てた。

<sup>47</sup>永野武著『在日中国人：歴史とアイデンティティ』明石書店 1994

<sup>48</sup>本田和子『女学生の系譜・増補版』青弓社 2012. 09.



「僕」の間違いに対して「あなたが本当に間違えたんだとしても、それはあなたがこころの底でそう望んでいたからよ」と言いだしたことのある彼女は「僕」の行動を無意識のうちの選択だと理解し、また泣いただろう。彼女はこのような交流の挫折を長く経験した在日中国人と日本社会の間はだんだんディスコミュニケーションになるだろう。「こんなのこれが最初じゃないし、きっと最後でもないんだもの」「何もかもが嫌になっていっちゃったの。もうこんな目にあいたくない、もう夢なんて見たくないってね」という彼女の最後の言葉は非常に重かった。「いいのよ。そもそもここは私の居るべき場所じゃないのよ」という一言はこの名のない中国女性の結論であり、多くの在日中国人の気持ちであった。

#### 第四節 在日中国人との共感

##### 第四節 在日中国人との共感

二十八の時、「僕」は結婚して六年目に入った。三匹の猫を埋葬し、幾つかの希望を焼き捨てた。二十代と言いながら、青春から遠ざかりつつあった。その時、「僕」は高校時代のクラスメートだった在日中国人に出会った。ある日、喫茶店でコーヒーを飲んでいる「僕」に、ある男の人が「僕」の名前を口にして声をかけてきた。僕と同年代で、「仕立ての良いネイビー・ブルーのブレザー・コートに、色のあったレジメンタル・タイというきちんとした身なりではあったけど、何もかもが少し擦り減りつつあるという印象を与えていた」男の人だった。このきちんとした男の人に、「僕」は違和感を感じた。なぜかというと、「彼の顔に浮かんでいる表情は、その場に応じて何処からむりやりかき集めてきた断片の集積にすぎなかった」からである。この男の人は「僕」の名前を知っていたのに対して、「僕」は全く彼のことを覚えていなかった。彼は「僕」の忘却を「潜在的」に全てを「忘れたがっている」傾向に対して、彼が「忘れようとするほど、ますますいろんなことを思い出してくる」と述べ、「僕」の心をとらえ始めた。そして彼は実は「僕」の高校時代のクラスメートであったことを教えてくれ、話は家庭の事情まで進んだ。しかしその時に、「僕」は彼が百科事典のセールスマンであることを知り、「借金をやっど返しはじめたばかり」だとすぐ断った。「僕」の断りに対して、彼は「僕」に彼が日本人に百科事典を売らないという驚いたことを披露した。意味も目的もなくただ声をかけたただけだ。それを聞いた「僕」は、初めて彼と目を合わせ、百科事典のパンフレットをもらい、いつか買おうとしていた。彼は「僕」の住所をもらい、パンフレットを郵送すると約束した。しかし、彼は「僕」が百科事典を買う余裕を持つ時、彼はもう百科事典ではなくて、中国人相手に他のこと（生命保険とか）を売るようになるかもしれないと言い、二人の出会いは終わった。

本文からもわかるように、このクラスメートは育ちも良いし、高校時代より「僕」より「まとも」だった。しかし、彼はちゃんとした会社に就職できず、在日中国人という小さい日本の中の孤島に拘禁された。彼の仕事は在日中国人の家庭に電話をかけ百科事典を売ることだ。その後の仕事は在日中国人の家庭に電話をかけ、生命保険とかなんとかを売るだろうと彼本人は推測した。「僕」の出会った在日中国人、中国人小学校の先生、在日中国人女子大生とこの男の人三人はいずれも在日中国人の中で貧乏な階層と言えず、むしろ経済的に余裕を持つ方である。特にこの男の人は「日本

人にはうらなくてもいい」立場であり、経済的に不自由はないだろう。しかし、三人とも日本で他者化された自己を感じている。このギャップを作ったのは経済というより、日本人の他者に対する疎外感と言える。健康でまともなこの男の人でさえ、「擦り減りつつある」人生を過ごしてきた。百科事典が在日中国人に売れる理由の一つに、在日中国人は自分の身の外の事情がわからない故であろう。百科事典の後に、生命保険が必要と推測されるのは、他者化されたことによって身の安全が心配になる象徴であると思う。

しかし、日本から他者化されたのを感じるのは在日中国人だけではない。子ども時代から、「僕」の成長につれて三人の在日中国人と出会ったが、三人目の在日中国人は「僕」とある程度心を交わすようになっていた。「僕」の考えていることに共感し、「僕」よりも的確に言い出した。その理由を探ると、今の「僕」は、もう子どもでも大学生でもなく、社会の中で生計を立て、夢を失い、大事なペットを失い、全共闘の挫折感を抱え、日本の主流社会に周縁化され他者化された経験を持ち始めたからであろう。この時期の「僕」は大学時代に出会った中国人女子大生の「そもそもここは私の居るべき場所じゃない」という言葉に対して、九年後に「ここは僕の場所でもない」と答え始め、在日中国人と他者同士のつながりを感じた。「僕」は初めて「中国」という国に興味を持ち始め地球儀で検索し、「中国行きのスロウ・ボート」を待ち始めた。ここで村上春樹は「出口」という言葉を使い、中国は日本の出口であるということより、中国という他者視点を持って初めて日本という国を観ることができるとを言いたかっているのではなかろうか。

三人目の中国人の話語る前、村上春樹はこのような「歴史的事件」を語った。太平洋戦争の激戦中、ジャングルの中の空地で原隊をはぐれた日本兵とアメリカ兵がたまたま会った。両方が銃をかまえる余裕もなく茫然としている時、一人の兵士が突然二本指をあげてボーイ・スカウト式の敬礼をした。相手の兵士も反射的に二本指をあげてボーイ・スカウト式の答礼をした。そして、二人は銃を下げたまま、黙ってお互いの原隊へ戻っていったという「歴史的事件」である。この事件を明白に「歴史的」と言えない理由は、おそらくこれは個人的な出会いであり、歴史書に載せる大事件ほど大切だと思われまいだろう。しかし、「僕」はこの物語を心に刻んでおり、個人と個人の国籍を超える善意を何よりも大事に思っていた。このような国籍と当時の政治状況を超えた個人から個人への善意こそ、人々に安心感と帰属感を持たせる平和へ導くだろう。これを在日中国人という他者により「僕」はさとり、村上春樹のテーマの一つになっている。

### 第三章 初期三部作における中国人表象

#### 第一節 初期三部作における「ジェイ」の先行研究と研究課題

初期三部作に登場したジェイと名付けられたバーテンについて、今までの先行研究の中での言及が少ないのは、おそらくバーテンであること以外の印象は薄い故であろう。確かに、ジェイは登場するたびに、ポテトを出したりビールを提供したりして、バーテンの身分に相応しい行動ばかりをとってきた。

しかし、そのジェイが提供した食べ物を、前田愛は「僕と鼠の記号論—二進法的世界としての『風の歌を聴け』」<sup>49</sup>において、村上春樹を理解する糸口としていた。前田愛は『風の歌を聴け』と立松和平の『蜜月』を比較したところ、村上春樹を「飢えの体験が欠如している」という結論を出し、飢え体験の欠如に顕著な証となったのは、ジェイの提供した食べ物である。

「僕」と鼠が落ちあうジェイズ・バーは、スナック・バーそのもので、二人がいつも何かをつまんでいることも納得が行くが、<sup>スナック</sup>軽食の習慣はどうやら「僕」の住いのなかにも持ちこまれているらしいのだ。(略)

充足されることのない精神の飢餓感、実の世界と虚の世界の顛倒を恒常化するテレビの機能と、テレビの画面と向かいあいながら、ポテト・チップスやらカップえびせんやらのスナック菓子をとめどなく食べつづける悪習とのあいだには、微妙なアナロジーがある。<sup>50</sup>

このような食べ物は無意味なしゃべりの象徴となり、意味のある会話の消失は、自己と他者または自己と自己の間の隔たりが埋められないままに残されているということになったと指摘している。つまり、ジェイが提供した食べ物とジェイズバーから窺える『風の歌を聴け』の風景は、意味の持たない言葉を交わす空虚な人間たちの語りからできた異色のテキストであるという。

映画化された時の『風の歌を聴け』において、サクソ演奏者の坂田明氏がジェイに起用された。「J」と同音であることから、ジェイをジャズに解釈すること故だろう。これを指摘したのは田崎弘章である<sup>51</sup>。作品の中に流れる音楽から作品のテーマまでジャズと村上春樹の関係は切っても切れないものである意味で、田崎弘章はジェイを村上春樹の核の一つと結びつけている。また、田崎はジェイをこれ以後の村上春樹作品を「予告」する役と解釈した。その予告内容に当たるのは、まず、ジェイが飼っていた虐待を受けた猫とその猫の死亡から、パートナーの消失と暴力という村上春樹のその後のテーマが浮き上がってくるからである。また、中国人のジェイが登場したことは村上春樹の中国関心の表れだと指摘されてきた。指摘のとおり、村上春樹は初期の作品から中国人への関心を示しており、ジェイはその傾向の始まりの一つに違いない。

ジェイと村上春樹の中国人関心をさらに詳しく論述したのは藤井省三である。藤井省三は 2000

<sup>49</sup>前田愛「僕と鼠の記号論—二進法的世界としての『風の歌を聴け』」『國文學：解釈と教材の研究』30(3) 1985.03

<sup>50</sup>前田愛「僕と鼠の記号論—二進法的世界としての『風の歌を聴け』」『國文學：解釈と教材の研究』30(3) 1985.03 P98

<sup>51</sup>田崎弘章「ジェイ—村上春樹『風の歌を聴け』」『絃説. 2：文学批評』通号5 2003.01 P83

年から村上春樹と中国の関係について注目してきており<sup>52</sup>、そして『人民中国』創刊 50 周年記念シンポジウム「日本の中の中国」を契機に、村上春樹と中国について次つぎと研究を進めてきた。その研究が中国語に翻訳され、中国の村上春樹研究にも影響を及ぼした。藤井氏はジェイについて、「村上春樹のなかの中国を読む(3)「ジェイズ・バー」という歴史の記憶—『風の歌を聴け』論」<sup>53</sup>において、「ジェイという在日中国人は、日本占領軍のアメリカ兵により英語名を命名されて中国名を失ったのである。そしてこのアメリカ名を名乗る中国人は、戦後の中国とアメリカとの関係に翻弄されてきたようすでもある」<sup>54</sup>と論じた。「ジェイ」を見て藤井は英語名の「Jay」を連想したからだろう。偶然にも村上春樹のアメリカ翻訳者・研究者の名前は「Jay rubin」であり、「ジェイ・ルービン」と日本語で呼ばれているから、この思いつきは非合理的だと言いつらいだろう。その後藤井省三はジェイが在日中国人というアイデンティティの事と、アメリカ・日本・中国の三國の間の板挟みになることを論じ、そのなかでも特にアメリカと中国の関係によって翻弄される可能性に重点をおいた。

朝鮮半島とベトナムにおける二つの戦争は、東アジアをめぐる中国とアメリカとの戦争でもあり、二つの戦争で在日米軍基地は大きな役割を果たした。だがジェイは祖国の軍隊と交戦しているアメリカ軍のために最初は軍事基地で働き、その後は基地周辺で米軍将兵を顧客とするバーを経営していたのである。それが単に生計のための方便であったのか、共産主義政権に対する批判意識に基づく自覚的アメリカ軍支持の行為であったのかは不明である。<sup>55</sup>

藤井省三の「ジェイ」の名前が奪われた事の指摘は大事であろう。宮崎駿の代表作の一つ『千と千尋の神隠し』のなかに、名前の一文字が強力な魔法によって取られたあげく、今までの記憶を全部忘れたというシーンが思い出される。ジェイの名前が奪われた事はおそらく千尋と同じく記憶の抹殺につながるだろうが、名前の解釈に「ジェイ」を英語名だと断定してそれを前提に解釈するのは適当であろうかは疑われるところである。

「ジェイ」というカタカナの表記を見て豊富に連想できるだろう。例えばジェイを「J」だと思えば、「J」は「Japanese」の略称だと考える道もある。ジェイの名前は「Jesus」と通底しているという説<sup>56</sup>もある。カタカナの表記は英語名の音訳によく使われるが、その他の国の名前の音訳にも使われてきた。中国人男性はよく「杰」を名前に入れる。この簡体された文字は「傑」にあたり、「傑出」な人になってほしいという親の願いが込められている。現役の俳優の中で苗字が違っても

<sup>52</sup>藤井省三 「ART NEWS」中国絵画は現在、非常（すっごく）村上的なものがクール!」『芸術新潮』2000. 09

<sup>53</sup>藤井省三『UP』35(7) (通号 405) 2006年07月 この部分はのち『村上春樹のなかの中国』(藤井省三 2007年07月25日 朝日新聞社)にも載せた。

<sup>54</sup>藤井省三『村上春樹のなかの中国』朝日新聞社 2007 P23

<sup>55</sup>藤井省三『UP』35(7) (通号 405) 2006年07月 この部分はのち『村上春樹のなかの中国』(藤井省三 2007年07月25日 朝日新聞社)にも載せた。

<sup>56</sup>久居つばき くわ正人『象が平原に還った日：キーワードで読む村上春樹』新潮社 1911. 11

名前を同じく「杰」にした人が何人もいる。男性より女性たちの名前にはよく「洁」という漢字が使われ、潔くなれという考えが含まれているだろう。「杰」でも「洁」でも「jié」と表記され、発音からいうと「ジェイ」と同じである。林少華によって初期三部作が翻訳され中国大陸部に紹介された時、ジェイは「杰」と翻訳されて、中国人の読者は気づかないままこの翻訳から少なからず同感を得たに違いない。

藤井省三はここでジェイを英語名だと判断し、そこからアメリカと中国の戦争に迫られたジェイの気持ちを推測したが、「ジェイ」という名前の解釈は多様である以上、ジェイという登場人物の意味を的確で多義的に解釈すべきではなかろうかと思われる。その中でも、藤井省三もすでに指摘していたようにジェイは在日中国人である以上、そのアイデンティティを重視して、日本と中国の歴史を生きた人だと考え村上春樹を解読することは『村上春樹のなかの中国』というテーマにふさわしいのではないだろうか。さらに、ジェイという人を「僕」も鼠も家族のように思うが、在日中国人という身分と関わりがあるかどうか不明であり、ジェイの役割もまだ明らかにされてなかった。ここで、この章は先行研究を踏まえながら、ジェイを中国の視点から考え直し、ジェイの役割を分析するうえ、初期三部作から始まる村上春樹の関心の方向を明らかにしたい。

## 第二節 中国の視点から「ジェイ」の位置を見る

### 1. 家族

藤井省三の論によると、ジェイは「日本占領軍のアメリカ兵により英語名を命名されて中国名を失ったのである。そしてこのアメリカ名を名乗る中国人は、戦後の中国とアメリカとの関係に翻弄されてきたようすでもある」<sup>57</sup>。ジェイが米軍基地で働くのは、「単に生計のための方便であった」<sup>58</sup>可能性もあるし、「共産主義政権に対する批判意識に基づく自覚的アメリカ軍支持の行為」<sup>59</sup>である可能性もあるという。また、ジェイとジェイズ・バーの位置付けについて以下のようにまとめた。

ジェイは「僕」より「20年も年上」で中国・朝鮮・ベトナムを主戦場とする三大戦争に対して間接的にはあれ加害者の双方として関わっており、「その分だけいろんな嫌な目にもあって」いるといえよう。そしてジェイは「老婆心」よろしく、その夜、東京に戻るという「僕」に「ビールを何本かごちそうしてくれ、おまけに揚げたてのフライド・ポテトをビニールの袋に入れて持たせ」た。(略)

ジェイは戦争を記憶し続けようとする青年たちを、彼らの脇で見守る人生経験の豊かな叔父のような人物でもあるのだ。そして「ジェイズ・バー」とは、日中戦争から朝鮮戦争、ベトナム戦争という二〇世紀の半ばに東アジアで日中米の三カ国が入り乱れて戦った戦争体験を記憶する場であるといえよう。<sup>60</sup>

---

<sup>57</sup>藤井省三『村上春樹のなかの中国』朝日新聞社 2007 23 ページ

<sup>58</sup>藤井省三『村上春樹のなかの中国』朝日新聞社 2007 24 ページ

<sup>59</sup>藤井省三『村上春樹のなかの中国』朝日新聞社 2007 24 ページ

<sup>60</sup>藤井省三『村上春樹のなかの中国』朝日新聞社 2007 25 ページ

藤井の論からわかるジェイの意味はおおまかに二点あると思う。

まず、ジェイは「僕」にとっては家族のような存在である。「老婆」のように食べ物をご馳走してくれたり、「叔父」のように「僕」を見守ったりした。

次に、ジェイは戦争と関わるシンボルである。ここをさらに分析していくと、三点ある。第一、米軍基地で働いて名前を奪われた人である。第二、共産党主義政権を批判する可能性がある人である。第三、ジェイは二〇世紀の半ばの東アジアでの戦争体験を記憶する場である。

テキストから見ればジェイは確かに「僕」とネズミにとって家族のような存在である。村上春樹的な主人公には、家族のいない人がほとんどである。初期三部作のなかで、「僕」はほとんど家族がいないし、ネズミと父の関係を悪くしている。家族と関係を切り、妻に別れを告げられ、恋人と別れるこの設定は村上春樹の小説における仕組みの一環である。個の独立を主張する一方孤独の情緒を感じる存在として、変動期に向かう若者に同感を得たことは『世界は村上春樹をどう読むか』での各地の翻訳者の発言によってもよくわかる。しかし、初期三部作において、ジェイという血も繋がらないし国籍も異なるが家族のような人が登場したことの意味を探る必要がある。

『風の歌を聴け』の40章の38章に、「僕」は東京に帰るんだ。その前、「僕」はスーツケースを持ってまだ開店してないジェイズバーにやってきた。「僕」はこの町生まれだけど、東京へ行くのを「帰る」と言うに対して、中国に行ったことのないジェイは中国へ「一度帰ってみたい」と言っていた。ジェイは「僕」にとってさようならを告げる人だけではなくて、故郷を他郷に思い他郷を故郷に思う移動する人の情緒を共感してくれる家族よりも親しい存在である。実際の家族よりも中国という異国から移動してきた人こそ、現代都市を移動する人の気持ちをわかってくれるだろう。

『1973年のピンボール』において、鼠が町を出る前の躊躇がテーマの一つだった。その躊躇の中心にあるのはジェイに別れを言えないことだ。「僕」に出られた町に、ジェイと鼠は「年老いた夫婦のように肩を寄せ合って過ごした」からだろう。それゆえ、鼠はジェイに別れを切り出せないし、ジェイを「心を乱す」存在だと言っている。やっと言い出した時、ジェイはわざわざ別の町に行き行って働くつもり鼠に対して「わかるような気はする」と言った。それに鼠は「みんながそんな風に問わず語らずに理解し合ってたって何処にもいけやしないんだ」や、「余りに長くそういった世界に留まりすぎたような気がするんだ」と言った。鼠にとって、ジェイは言葉は通じなくても気持ちをわかってくれる家族以上の存在であり、出発点でもある。ジェイが鼠の故郷を出なくなる気持ちを分かり合えるのも、移動した経験があるからに違いない。いずれにしても、ジェイは「僕」と鼠にとって、別れを告げ、気持ちを分かち合う家族のような存在である。

また、ジェイは帰りを待つ家族のような存在である。『1973年のピンボール』で別れを告げた鼠にジェイは笑って別れを言った。

ジェイは笑った。「またいつか会おう」

「今度会った時には見かけがつかないかもしれないぜ」

「匂いでわかるさ」<sup>61</sup>

このようにジェイは目によらず、匂いというさらに深いつながりを持ちながら鼠を待つと言った。ジェイは「僕」の心の中で、寛容と慈悲の心を持った家族のような存在である。「僕」と鼠を送り、待ち、許してくれる存在である。

ジェイの存在は家族にとどまらず、都市の中で存在をあやふやにした「僕」や鼠にとって、確かな柱であろう。食べ物を絶えず作るジェイは現実世界の象徴であり、「僕」と鼠の行きを送り、帰りを待った。このような役割を果たしたジェイは言い換えれば物語の始まりと終わりの象徴であろう。それを最も現れたのは『羊をめぐる冒険』である。『羊をめぐる冒険』の中で、鼠のかわりに町に帰った「僕」に「どうしてホテルなんか泊まるんだい？」と家族の代わりに問いを發した。その後、「僕」は北海道へ行き、本土の日本を離れた非現実的な世界で旅をし、鼠の死を悟った。自殺した鼠と最後の会話を終え、虚しさの末に思い出したのもジェイである。

ジェイ、もし彼がそこにいてくれたなら、いろんなことはきつとうまくいくに違いない。全ては彼を中心に回転するべきなのだ。許すことと憐れむことと受け入れることを中心に。<sup>62</sup>

ジェイが他人に家族と見なされ、気持ちを共感でき、寛容と慈悲を持つ人になった深層にあるのは、移動した経験に基づいた複合したアイデンティティの持ち主だからなのだ。

## 2. 移動の中のアイデンティティ

### 2. 1 在日中国人のジェイ

ジェイは移動の中で複合したアイデンティティを持っている。ジェイはまず中国人である。ジェイは中国に行ったことがないが、中国へ行くことを「帰る」と言う。「帰る」の意味を辞書で調べたところ、「一時的に他の場所にいる人が出発した本来身を置くべき所に向かっていく」という意味である。やはりジェイの心の底で「中国人」であることを意識しているのである。

ジェイが中国生まれの中国人であることは誰もが知っていたが、この街では外国人であることはたいして珍しいことではない。鼠の高校のサッカー・クラブにはフォワードとバックスに一人ずつ中国人が居た。誰も気になんて止めない。<sup>63</sup>

バーテンのジェイが僕の前にやってきて、うんざりした顔で、ケツがすりきれらんじゃないかな、と言った。彼は中国人だが、僕よりずっと上手い日本語を話す。<sup>64</sup>

<sup>61</sup>村上春樹『1973年のピンボール』 講談社文庫 2004 P170

<sup>62</sup>村上春樹『羊をめぐる冒険』下 講談社文庫 2004 P178

<sup>63</sup>村上春樹『1973年のピンボール』 講談社文庫 2004 P94

<sup>64</sup>村上春樹『風の歌を聴け』 講談社文庫 2004 P46

「僕」はジェイのことを「在日中国人」ではなく、「中国人」だと言っていた。ジェイは中国人だが、「僕」より上手に日本語を喋っていると言った。一度も中国へ行ったことがないのに、日本人の「僕」の目に映っているジェイは中国人である。つまり、「僕」にとっても、ジェイにとっても、生まれて一度も中国へ行ったことがなくて日本人よりも日本語が上手なジェイは、正真正銘の中国人である。

しかし、ジェイを在日中国人じゃなくて中国人にしたら、もう一つのジレンマが生じるだろう。それはジェイの戦争への態度である。

「この街は好き？」

「あんたも言ったよ。どこでも同じってさ。」

「うん。」

「でも何年か経ったら一度中国に帰ってみたいね。一度も行ったことはないけどね。…都に行って船を見る度そう思うよ。」

「僕の叔父は中国で死んだんだ。」

「そう…。いろんな人間が死んだものね。でもみんな兄弟さ。」<sup>65</sup>

「僕」の叔父は侵略戦争の協力者として中国で死んだが、ジェイの答えは「いろんな人間が死んだものね。でもみんな兄弟さ」である。日本を長く見てきた中国人でなければ、このような日本への思いやりはないと思う。米軍基地で働いた時、「ジェイ」という名前をもらったと作品中で言われているが、この「ジェイ」は「Japanese」の「J」とも言えるだろう。中国人と日本人は同じアジア人であり、ヨーロッパ人やアメリカ人にとってもともと区別のつけにくい存在であろう。ジェイにとって、日本人も長く付き合った仲間であり、死んではもったいない存在である。

また、在日中国人といえば、ほとんど留学生をはじめとするニューカマー<sup>66</sup>が連想されると思う。1983年の中曽根内閣による「21世紀への留学生政策に関する提言」に始まるいわゆる「留学生10万人計画」が実施されて以来、ニューカマーが一気に増えてきて、その中では中国人の増加が一番スピードが速かった。統計によると、2016年度の法務省の在日中国人の人数は695,522人に達していた。しかし、1980年代の時点では、在日中国人の数も少ないし、社会問題として重視されていなかった。永野武は『歴史とアイデンティティ』<sup>67</sup>で在日外国人のアイデンティティにおける困難を以下五点にまとめた。

- (1) 国籍・政治性の分裂
- (2) 権利・義務の問題
- (3) 就職、結婚などにおける諸障害
- (4) 国籍法と帰化行政

<sup>65</sup>村上春樹『風の歌を聴け』講談社文庫 2004 P150

<sup>66</sup>1980年代以降に日本へ渡り長期滞在する外国人を指す

<sup>67</sup>永野武著『在日中国人：歴史とアイデンティティ』明石書店 1994



## (5) 戦争責任、戦後責任

この五点を巡り、在日朝鮮人の研究は多くされてきたが、在日中国人のアイデンティティについての研究は永野武による博士論文に基づいて一九九三年に発表されたこの一冊である。しかし、その十年も前に、村上春樹はジェイという在日中国人を提起した。

ジェイは中国に一度も行ったことがないことから、おそらく在日中国人の息子世代あるいは孫世代だろう。日本語を日本人よりも上手にできることから、日本文化を深く受け入れ、日本人のアイデンティティをもったにちがいないから、戦争で死んだ日本人に同情を感じるのも不思議なことではない。一方、ジェイは相変わらず中国人だと見なされ、自分も中国人だという自意識もっている。戦争の被害者である同胞の苦難を、身にしみて感じ取るものだと思う。しかし、日本と中国の戦争の歴史に挟まれ、日本の文化を受け入れた在日中国人の代表としてのジェイは、国籍を超えて全ての戦争の死者に同情する広いところと複合したアイデンティティを持っている。アマルティア・センの論によると、このようなアイデンティティの持ち主こそ、平和をもたらす存在である。

## 2. 2 アメリカとアジアに挟まれたジェイ

ジェイズ・バーはすっかり変わっていた。

昔のジェイズ・バーは国道わきの古ぼけたビルの地下にある小さな湿っぽい店だった。夏の夜にはエアコンの風が細かい霧になるほどだった。長く飲んでいるとシャツまで湿った。

ジェイの本名は長たらしくて発音しにくい中国名だった。ジェイというのは彼が戦後米軍基地で働いている時にアメリカ兵たちがつけた名前だった。そしてそのうちに本名が忘れ去られてしまった。

僕が昔ジェイから聞きだした話によると彼は一九五四年に基地の仕事をやめてその近くに小さなバーを開いた。これが初代のジェイズ・バーである。バーは結構繁盛した。客の大半は空軍の将校クラスで、雰囲気も悪くなかった。店が落ちついた頃にジェイは結婚したが、五年後に相手は死んだ。死因についてはジェイは何も言わなかった。

一九六三年、ベトナムでの戦争が激しくなってきた頃にジェイはその店を売って、遠く離れた僕の「街」にやってきた。そして二代目のジェイズバーを開いた。

それが僕がジェイについて知っていることのすべてだった。<sup>68</sup>

ベトナム戦争の始まる1955年11月の前夜、戦争の前の雰囲気には抑圧され米軍基地での仕事を辞めた可能性がかなり高いだろう。藤井の分析によると、「ジェイ」という名前自体は名前が奪われた証拠だそうだが、しかし店を二回変えて町まで移動しても名前を元に戻さないことから、ジェイはこの名前を嫌ってはいないと思っているどころか、本人から認めていると思ってもよからう。民間交流の続きは必ずしも政治状況によって絶えるとは限らなく、個人と個人が出会えば、相手の国籍を重視するより人間性を大事にするのも普通だろう。米軍基地に派遣されたアメリカ軍人の中に、

<sup>68</sup>村上春樹『羊をめぐる冒険』下 講談社文庫2004 P138

差別された黒人等が多く、二つの国がこれから戦争するとは言え、アメリカの中心社会から周縁化された軍人たちがどれだけアメリカの主流の政治状況を受容するかはまず問題だと思う。一方ジェイは中国に行ったことのない日本に長く住む中国人で、中国と日本という両国のナショナリズムを持つとも言えよう。このようなジェイとアメリカ軍の間では、最初の頃は恨みがあるというより、むしろ普通に付き合っていたんじゃないかと思う。ジェイはアメリカ軍にもらった名前を変えないのはその証である。個人と個人の直接的な出会いは、自然に相手を一人の人間と見なし、国籍などの単一したアイデンティティにとらわれないことも多かろう。

しかしやがて戦争が始まり、ジェイとアメリカ軍の間の繋がりが戦争によって壊された。それでもジェイは米軍基地を懐かしく思い、その近くに初代のジェイズバーを開き、基地の将校クラスの人を客に店を繁盛させた。将校クラスの人が客の中心になったことに、昔から付き合った人が将校クラスになった事と新兵たちがジェイに近寄らないことという二点が含まれているだろう。昔付き合った人が将校クラスになる理由に、米軍基地に長く駐在したうえ、戦争の深まりによって新人が多くなるのが背景にあるだろう。確かに、戦時中の日本は、日米安保条約の下、沖縄県や横須賀、横田などの在日米軍基地の提供や、兵站補給基地としてアメリカ合衆国連邦政府を支え続け、1970年には安保条約が自動延長された。一方、新兵たちがジェイに近寄らないことに、アメリカ軍と中国人のアイデンティティが気に触り、わざと敬遠したことも想像できる。第二次世界大戦による日本の分離と、その後の激しい戦争の予兆、および戦争によって人為的に作った人と人の隔たりがジェイの移動によって感じられてならない。

その後、戦争が激しくなるにつれ、ジェイズは初代のジェイズバーを「僕」の街に移動した。昔の常連客たちは当時死んでしまうか、あるいは中国との戦争で親しい人に死なれジェイズバーに行きづらくなる始末になったことは想像し難いことではない。他方、ジェイの会ってもない国の人もたくさん死んだ。この意味で考えると、ジェイの「いろんな人間が死んだものね。でもみんな兄弟さ」という答えの中で懐く死者には、アメリカ人、日本人、中国人が含まれているだろう。この意味で考えると、『羊をめぐる冒険』の終わりに、「羊」をめぐる戦後日本の個人への抑圧、日本の北海道への暴力、羊の背後に隠された近代の戦争という暴力に直面するとき、ジェイを思い出し、ジェイを表象し、ジェイに会いに行くのは、平和と寛容への思いであろう。

無論、学生運動の後の日本に追いつけない「僕」と鼠といういわゆる「終わった」一代の思い出の場所でもある。「僕」は自らから凡庸な道を選び、立身出世を避ける一方、鼠は北海道に潜み、自殺までしてしまう。「僕」とネズミの気持ちを悟るのはジェイだけであるが、若者向けにおしゃれな三代目のジェイズバーを開いたジェイもやがて「僕」と鼠の墮落の象徴でもあろう。戦後日本を経験したジェイとジェイズバーはアメリカ米軍基地、中国人、全共闘運動・大学紛争に参加した学生たちを見守り、同情してきた。

アマルティア・センは『アイデンティティと暴力-運命は幻想である』の最後、「グローバルな民主主義」の可能性を提起した。グローバルな民主主義の対局にあるのは、単一的なアイデンティティによる暴力である。「われわれの国家への義務や地元への忠誠心を、グローバルな帰属意識と完全に置き換え、巨大な「世界国家」の仕組みのなかに反映させる必要はないのである。むしろ、グ

ローバル・アイデンティティはわれわれがもつその他の忠誠心を抹消することなく、当然認められるべきものとして、受け止められ始めているのだ」<sup>69</sup>このようなグローバルな民主主義こそ、国家や宗教など単一なアイデンティティによる暴力を解消できるのである。

ジェイの一生を考えると、アメリカと中国の間の戦争にもとらわれず、米軍基地の軍士にも好意を持っている。アメリカと日本の間の戦争にもとらわれず、どちらにも善意を持っている。日本と中国の間の戦争にとらわれず、中国人にも戦前戦後の日本人にも好感を持っている。このような考えこそ、「グローバルな民主主義」であり、世界平和と結びつけるだろう。村上春樹の平和への思いは、ジェイに託されたのであろう。

---

<sup>69</sup>アマルティア・セン著 大門毅 東郷えりか 訳『アイデンティティと暴力 運命は幻想である』勁草書房 2011.07

## 第Ⅱ部 村上春樹における女性表象

### 第四章 戦闘美女青豆——カルト集団との戦闘

#### 第一節 青豆の身体とセクシュアリティ

本論は、村上春樹の最新作『1Q84』の中の女性像分析を通じて、『1Q84』の中に出現した戦闘女性像を提示し、そこから見える現代女性表象を検証する。「戦闘女性」は文字通り戦う女性をさす言葉であるが、本論では村上春樹『1Q84』を中心に、性暴力やカルトなどの暴力に向かい、他人や男性の助けを待つのではなくて、体力や経済力、超能力を使って積極的に性暴力やカルト集団と対峙する戦闘女性像について試論していきたい。

本論文では戦闘女性を一般的に何者かと戦う女性という意味より狭く限定して、物理的な力を使用することも辞せず強制力や権力と戦って自分や他の弱者とくに女性を護る女性と定義しておきたい。

「英雄が鬼を退治、姫を助ける」のような伝統的な物語の構造とは違って、『1Q84』は、ヒロインの青豆を始め、女性たちは男性主人公にまさる才能の持ち主で、積極的に行動をとって暴力と戦っている小説である。青豆、老婦人、ふかえりの三名の戦闘女性こそ本研究の研究対象である。

村上春樹『1Q84』を取り上げて戦闘女性像を論証することは、サブカルチャーにおける女性表象研究にとっても意義のある研究である。

1979年『風の歌を聴け』でデビューして38年、村上春樹は国境、民族、言語を越えて最も越境的に活躍し、世界で人気を集めてきた日本作家の一人である。その作品は四十カ国に訳されて世界文学と言ってもよい。彼の作品分析を通じて、戦闘女性は現代文学でいかに描かれているのかに注目したい。

今までの村上春樹作品の中で、レズビアン（『スプートニクの恋人』）、双子の姉妹（『1973年のピンボール』）、自殺した女子大生（『ノルウェイの森』）、体の不自由な女性（『国境の南、太陽の西』）、中国人（『中国行きのスロウ・ボート』）や韓国人（『スプートニクの恋人』）など、性格、民族、性向を異なった女性が数多く登場した。直子、緑、青豆、ふかえりなど女性登場人物の名も有名になってきた。しかし、村上春樹2009年の新作『1Q84』で登場した「戦闘女性」たちは、今まで創作された女性像とは全く一線を画して、暴力に立ち向かい、積極的に戦闘する女性がヒロインとなっている。

サブカルチャーにおいても戦闘する女性像が数多く表象されてきた。『戦闘美少女セーラーMoon』『ムーラン』などのアニメの領域にも、『女神の誓い』『氷の微笑』を始め映画の領域にも戦闘女性のブームが世界的に起こっている。

しかし、戦闘女性の文学的な表象は十分に提起されてはこなかった。戦闘女性は現代社会において女性が直面する問題を顕在化するだけではなく、勇敢なる女性の戦闘する立場や態度をも示している。村上春樹『1Q84』の中では、性暴力やカルト集団と積極的に戦う女性を描いている。その分析から戦闘女性像の文学的な表象が見えると思う。しかし『1Q84』についての研究や論証は多く、

ヒロインについての分析も少なくないが、ヒロイン青豆を始め老婦人や美少女ふかえりの戦闘性を指摘する説はまだほとんどない。本研究ではヒロインたちの戦闘性とその深い意義について論証する。

『1Q84』は出版されて以来、研究が多く、村上春樹への批評も世間を騒がせた。二つの月やリトル・ピープルなどの隠喩、「さきがけ」やリーダーの原型、『1Q84』と『1984年』<sup>70</sup>の比較、村上春樹と他の作家との比較など、さまざまな研究が行われてきた。

河出書房新社『村上春樹『1Q84』をどう読むか』<sup>71</sup>は、『1Q84』についての本格的な評論を多く集めたものである。この本の中で、安藤礼二は「王を殺した後に——近代というシステムに抗う作品『1Q84』で、『1Q84』は村上春樹が現代日本のシステムを破壊と再構築の作品で、そのシステムはある意味で天皇制だという。更に、そのシステムは男性的なシステムで、女性の再生する力を利用して、男性は王として永遠の生命を受かると指摘した。島田裕己は『これは「卵」側の小説なのか』で、『1Q84』の中で登場した宗教団体「さきがけ」のリーダー深田保の原型は新島淳良であると言った。新島淳良は「緑のふるさと運動」の提唱者で毛沢東や文化大革命の擁護者。リーダー深田保はまさにそのようである。しかも新島淳良は早稲田大学の元教授で、村上春樹が在学中に退職したので、村上春樹は彼のイメージを援用した可能性が高いという。また、彼は『1Q84』は村上春樹がオーウェルの『1984年』に基づいて「管理社会」をテーマにした小説だと論じた。『1Q84』が発表された数月前に、村上春樹はエルサレム賞授賞式出席で「卵と壁」を題にスピーチした。「もしここに硬い大きな壁があり、そこにぶつかって割れる卵があったとしたら、私は常に卵の側に立ちます」と言った。しかし、『1Q84』で村上春樹は宗教がらみの原理主義者たちが嫌悪という傾向を示した。それは作者村上春樹が「壁側」にたっているからだとして『「卵と壁」を超えて』で指摘し、それは卵＝正義、壁＝悪という単純な構図が破綻したという。

『村上春樹「1Q84」の世界を深読みする本』は『1Q84』BOOK1とBOOK2が出版されて五カ月も経たないうちに編集された。この本は『1Q84』が言及したさまざまな書物や音楽、場所、武器、車を図付けて詳しく紹介してくれた。また登場人物の分析や『1Q84』の謎解きも行い、深くは論じられてこなかったが『1Q84』の研究に非常に役立つ本である。

以上のように多くの研究が出されているが、『1Q84』の分析や青豆を論じる論文はまだ少なく、特に戦闘女性としてのヒロイン——その指摘と意義、戦闘女性の系譜の受容、フェミニズムとの関連などについては深く追求されていない。

また、村上春樹の女性像を分析したものとして、渡辺みえこ『語り得ぬもの：村上春樹の女性表象』（2009 御茶の水書房）がある。渡辺は、村上春樹『ノルウェイの森』の中に登場した悪魔的な「あの子」と『スプートニクの恋人』に登場したレズビアン<sup>72</sup>の分析を中心に、女性は社会的な性の抑圧を受けていかに苦しんでいるのかを村上春樹作品分析を通じて明らかにした。特に異性愛中心

<sup>70</sup>イギリスの作家ジョージ・オーウェルの小説。1949年刊行。スターリン体制下のソ連を連想させる全体主義国家によって分割統治された

近未来世界の恐怖を描いている。反全体主義、反集産主義のバイブルの一つとも言われる。

<sup>71</sup>河出書房新社編集部編『村上春樹『1Q84』をどう読むか』河出書房新社 2009

社会では、レズビアンは隠され、顕在化しても偏見を持たれることを分析した。女性同性愛者を論じ、女性が受ける社会的な性的抑圧を喝破した。フェミニズム批評で村上春樹を再評価する面で、非常に価値ある研究である。

村上春樹作品における身体表象や暴力表象についての分析も行われた。松枝誠『村上春樹研究—その暴力表象について』<sup>72</sup>で、現代の日本の近代化に伴った北海道・大陸進出・満州国建国という暴力が内在しており、更にこの暴力の記憶を隠蔽することは第二の暴力だと指摘している。この分析は村上春樹初期四部作と『ねじまき鳥クロニクル』を中心に行われた。暴力が村上春樹作品の中心の一つだとしたら、『1Q84』での継承は大事になると思う。

戦闘女性について、高橋準『ファンタジーとジェンダー』<sup>73</sup>は映画の境域で、戦う女性表象の系譜を辿った。戦う女性の戦闘対象を過酷な現実、内面の葛藤、システムと、まとめた上で、ファンタジーのなかの家族をジェンダー視点で論じた。

同じサブカルチャーにおいて、小説の中の戦闘女性像は映画と関連するところが多く、女性表象、暴力表象、映画の中の戦う女性についての論証はあったが、村上春樹作品における、暴力を戦う対象とする戦闘女性像はまだ論じられたことはなかった。サブカルチャーの中で描かれた戦闘女性像は、社会的な現実を取り上げながら、社会に影響を及ぼしている。だから、戦闘女性表象の批評や批判を慎重に行う必要がある。村上春樹最新作『1Q84』の中で、戦闘女性は青豆、老婦人、ふかえりなどが登場しており、戦闘女性表象を論じるテキストとしてふさわしいといえる。

本論は、フェミニズム文学批評理論に基づいて分析を行いたい。村上春樹はもともと女性を中心に小説を書いたわけではないが、フェミニズム文学批評により村上春樹文学の可能性に新たな照明を与えることができる。1970年代にアメリカで始められたフェミニズム文学批評は男性中心的な文学評価上の価値基準を批判する文学批評の方法である。小林富久子は「フェミニズム文学批評について—アメリカの場合を中心に—」<sup>74</sup>において「女性の立場から著名な男性作家の作品の女性蔑視的傾向を明らかにしたり、逆に無視されていた女性作家を再評価したりする読み直しの作業を進めるとともに、それまで主流の文学史の支えとなっていたキャンノンの概念の見直しや、文学史自体の再構成といったラディカルな営みも実践してきている」と述べ、フェミニズム文学批評の立脚点を明らかにしている。

『海辺のカフカ』や『1Q84』で、村上春樹は明らかにフェミニストについて言及した。フェミニズムを意識して、ヒロインの造型に工夫を凝らした作家だと考えられる。村上春樹自身には幾つかの転機はあるが、誰とも寝る女の子（『羊をめぐる冒険』）、体に不自由を抱える渡辺（『国境の南、太陽の西』）、精神的に病んだ直子、中国人のコール・ガール、レズビアン（『スポーツニクな恋人』）など周縁化された女性像を今まで多く描いて来た。

2009年村上春樹の最新作『1Q84』の中で、魅力的な女性群像が描かれた。主要な登場人物は 15

---

<sup>72</sup>松本誠『村上春樹研究—その暴力表象について』博士論文 2008

<sup>73</sup>高橋準『ファンタジーとジェンダー』青弓社2004

<sup>74</sup>小林富久子「フェミニズム文学批評について—アメリカの場合を中心に—」『早稲田商学』第320号

人である。その中に、女性は8人男性は7人。男性は政治、文化、経済にかかわる人以外に、性同一障害を持つ男性（タマル）、公の世界に無関心な男性（男性主人公の天吾と牛河利治）がいる。女性像ははるかに豊富になると思われる。麻布に住むDV被害者に保護を与える老婦人、生まれながら男女関係において被害者になる大塚環と中野あゆみ、父殺しの美少女ふかえり、年上のガールフレンズ、年少の天吾を守る小学校の先生、一度死んで、他人のために再生する安達タミ、青豆の心の中で神の形であるベントに乗る中年女性、等。

村上春樹はヒロインに工夫を凝らし、その文学的出発から現在の『1Q84』に至るまで、魅力的なヒロインを創作してきたと同時に、男性作家としてのとらわれ、女らしさへの執着があることが指摘できる。本論文では、フェミニズム及びジェンダー批評に依拠して戦闘女性像の提示の意義とその限界を明らかにすることを目的として展開したい。

小説の最初、ヒロインの青豆はDV施行者を殺しに、混んだ首都高速道路の非常階段から降りてきた。その時から、世界は転換して、questionの多い1Q84の世界に入り込んだ。

青豆は超自然能力に恵まれている。彼女は人の体に詳しく、殺人能力を備えている。アイスピックで人の体を刺して殺し、心臓病発作に見せかける能力を持っている。彼女の身体は以下のように描かれている。

身長は一六八センチ、贅肉はほとんどひとかけらもなく、すべての筋肉は念入りに鍛え上げられている（中略）左右で耳の形と大きさがかなり異なっていることがわかるはずだ。左の耳の方が右の耳よりずっと大きくて（中略）唇はまっすぐ一文字に閉じられ（中略）顔の表情が極端に乏しい（中略）多くの場合人々の注意や関心を惹きつけるのは、静止した顔立ちの善し悪しよりは、むしろ表情の動き方の自然さや優雅さなのだ。<sup>75</sup>

力と美を備える身体だ。表の職業はスポーツインストラクターで、体を鍛えることに十分気を使った。かわいいというより、セクシーな女性である。青豆の身体の設定は後に詳しく分析するかわいい美少女ふかえりや優雅な老婦人と違って、かわいいよりセクシーでかっこいいイメージである。にもかかわらず、美しくて官能的な女性が戦うことは、男性の視線に置かれたヒロインの免れない書き方であると思われる。快感原則に忠実な表現媒体において、「美」が身体とすぐに結託することになる。青豆は鏡の前でくり返して詳しく自分の身体をチェックするシーンはその証拠である。

## 第二節 青豆の戦闘経歴

### 1 偏狭な宗教からの脱出——家族を宗教と共に捨てた

青豆は生まれてから絶えず自分や他人を守るために戦闘している。家族と宗教との戦闘は彼女に常に自分を守ることの大事さを意識させた。親友大塚環の死とそのための復讐は青豆をDV世界に導いた。そして、老婦人とチームを組んでのDV施行者への復讐行為は「より広汎な正義」を達成

<sup>75</sup> 村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P25

した。更に、偏狭な宗教や DV への怒りや憎しみは宗教団体「さきがけ」のリーダー深田保の身に集めて、青豆は最後の戦闘を遂げた。

十歳まで青豆は「証人会」の信条を厳守した生活を送ってきた。彼女の親は「証人会」の熱狂的な信者であった。『証人会』はキリスト教の分派で、その信者はみんな終末論を説いて布教運動を熱心に行い、聖書に書いてあることを「字義」通りに実行している。

青豆の父はエンジニアで世間並みの収入はあったが、主義のために簡素な生活を送った。子供の青豆も極端な質素な生活を送らなければならなかった。青豆が着た服は全部誰かの御下がりだった。信者の組織の中で不要な衣服の交換会があった。肉や魚を家で食べることはできなくて、学校給食で成長に必要な栄養素をとったのだ。素朴な生活は青豆は大人になっても続いていた。また、「教義上の理由で」彼女は生活の面だけではなく、精神的な強制も加えられた。

彼女（青豆のこと、筆者注）が「証人会」信者であることはクラスの全員が知っていた。彼女は「教義上の理由」からクリスマスの行事にも参加しなかったし、神社や仏教の寺院を訪れるような遠足や修学旅行にも参加しなかった。運動会にも参加しなかったし、校歌も国歌も歌わなかった。そのような極端としか思えない行動は、クラスの中で彼女をますます孤立させていた。また彼女はお昼の給食を食べる前に、必ず特別なお祈りを唱えなくてはならなかった。それも大きな声で、誰にも聞こえるようにはっきりと唱える必要があった。

(中略)

天下のお方さま。あなたの御名がどこまでも清められ、あなたの王国が私たちにもたらされますように。私たちの多くの罪をお許してください。私たちのささやかな歩みにあなたの祝福をお与えください。アーメン<sup>76</sup>

当然のことだが、青豆のようなみんなと違った子はクラスメートによって排斥される。彼女はクラスの中でほとんど無視された。青豆は学校に通うことを苦痛だと思った。毎朝起きて学校に行くと思ったら、吐き気が起こるほどだった。しかし、彼女はコミュンで育ったほかの子と違って、誰かと戦って負けたくない一心で毎日学校に行く。押し付けられた信仰のせいでクラスメートから孤立させられたが、小さいながら青豆は勇敢に孤独と戦った。しかし、青豆が受けた精神的な暴力はそれだけではなかった。

「証人会」の家では、「子供も歩けるようになれば」、両親とともに布教活動に参加する義務があったのだ。子供は三歳くらいから母親と一緒に歩いて、家を一軒一軒まわり、「洪水の前」というパンフレットを配り、「証人会」の教義を説く。青豆はまさにそのような生活を送ってきた。

その少女は母親とともに布教にまわっていた。母親は「洪水の前」を詰めた布の袋を片方の手に持ち、だいたい日傘をもう片方の手に持っていた。その数歩あとに少女が従っていた。彼女はいつものよう

<sup>76</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P272



にまっすぐ唇を結び、無表情だった。(中略) そのたびに少女の目のなかで何かがこっそりと光ったように見えた。<sup>77</sup>

信仰に執着し、自分の娘の意志を無視して布教活動に参加した酷な青豆の母親であった。天吾は集金業務を押し付けられて父につられて街で歩くとき、それを目撃した。話しかけたことがなかったが、日曜を無理やり奪われた連帯感を感じ、天吾は彼女に深く同情した。そのため、クラスメートに苛められた青豆を助けてあげた。そしてあるとき青豆は天吾の手を握った。放課後の掃除が終わったあとの教室で、天吾と青豆はたまたま二人きりになっていた時、青豆は何かを決断したように天吾のところにやってきて、天吾の手を握った。長いあいだ無言のまま天吾の手を握り締めた。

わずかな外部からの善意をもとに、青豆は家族と袂を分かった。彼女はしばらく母方の叔父さんの世話になり、高校に入って自立した生活を送った。それ以来、青豆はいつも大事に自分を守る意識＝戦闘精神を強く身に着けた。

しかし、子供時代に強制された信仰から完全な脱出ができるだろうか。青豆はできなかったと思われる。

親友大塚環に暴力を振るい、彼女を死に追い込んだ環の夫を殺す前に、青豆は反射的に祈りを唱えた。「天下のお方さま。あなたの御名がどこまでも清められ、あなたの王国が私たちにもたらされますように。私たちの多くの罪をお許してください。私たちのささやかな歩みにあなたの祝福をお与えください。アーメン」お祈りはあくまで形であったが、実は青豆は子供のとき身に強要された信仰から、完全な脱出はできなかった。彼女は大人になっても、子供時代のように衣服や化粧品やアクセサリに金をつかわない。禁欲と節制はもう子供時代から慣れていたのである。しかし、宗教から完全に脱出できないからこそ、青豆は絶えず戦闘意欲をもち、大事に自分を護る必要があって、戦ってきたのであった。親友大塚環のために行った復讐はその証拠である。

## 2 暴力への復讐——親友のために

青豆のそんなクールな顔立ちは、劇的なまでに一変した。顔の筋肉が思い思いの方向に力強くひきつり、造作の左右のいびつさが極端なまでに強調され、あちこちに深いしわが寄り、目が素早く奥にひっこみ、鼻と口が暴力的に歪み、顎がよじれ、唇がまくれあがって白い大きな歯がむき出しになった。<sup>78</sup>

顔の激変のように、青豆の性格も影の一面を持っている。それは彼女の戦闘意欲と戦闘能力である。青豆に恐ろしく勘の良い指先が具わっている。彼女の指先は「身体機能を左右する微妙なポイント」を瞬時に見きわめることができる。誰かに教わったこともなくて、自然にわかるのだ。首の後ろにある一点を特製のアイスピックで刺すと、人を殺し、しかも心臓発作に見せかけることができる。その才能こそ、青豆の戦闘を可能にするのだ。ギリシア神話の中で、父の額から武装をして

<sup>77</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P271

<sup>78</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P272

生まれた戦いの女神アテナのように、非現実と言えるほど青豆は戦闘能力が備わっている。また、青豆が変身した後のイメージはギリシア神話で登場した女の化け物メドゥーサのイメージを呼び起こしている。メドゥーサは見た者を恐怖で石のように硬直させてしまう能力を持っている。今まで男性主人公の天吾を神話と結びついて解釈する説はあったが、まだヒロインの青豆の神話的・民俗学的な解釈は行われていない。しかし、アテナやメドゥーサとの類似点から、青豆の新しい解釈が出せると思う。

青豆親友大塚環のために、他人のための戦闘を開始した。大塚環は青豆の高校時代の友人であり、初めての親友である。彼女がいないと、青豆の人生は「更に惨めな、うすくらいもの」になる。しかし、彼女は男女関係において「生まれながらの被害者」であった。彼女を傷つける男への復讐は、青豆のDVとの戦闘の出発点だと思われる。

青豆と大塚環は都立高校のソフトボール部のチームメイトだった。高校でソフトボールに接触してしまい、青豆はこの競技にしがみついて生きてきた。ソフトボールのチームの中で、彼女はポジションを与えられ、求められているからである。存在意義が承認され、自信が得られた。大塚環は二塁手で、優れた反射神経を持っていた。頭もいいし、ボールの飛ぶ方向を即座に判断し、的確な位置をカバーして走ることができる。チームのリーダーとしても優秀だった。「チームを統合し、作戦を立て、有益な助言をみんなに与え、励ました」。参加したチームは東京都大会で決勝戦まで残り、二人ともに関東選抜チームのメンバーに選ばれた。

大塚環はまた頭が良くて心の温かい娘だった。高校を卒業すると、一流の私立大学の法学部に進んだ。学業においては努力家で、司法試験を受けて、法律家になることを志望していた。

彼女は裕福で社会的位置のある家に生まれた。しかし、親の仲が非常に悪かった。「父親はほとんど帰宅せず、母親はしばしば錯乱状態」だった。大塚環と彼女の弟はその「荒廃」した家に捨て置かれた。食事さえ食堂やファーストフードや弁当で済ませた。環の悲劇的な運命は「荒廃」した家族と無関係とは言えない。

孤独な少女青豆と大塚環は親友になって、それぞれの生い立ちを「包み隠さず」語りあった。レズ的な真似によって二人の関係は「よりふかく、より共謀的なものになった」。

にもかかわらず、大塚環は男女関係において生まれながらの被害者であった。彼女は病的にハンサムな男が好きで、いわゆる面食いだ。大塚環が関心を抱くのは、いつも「甘い顔立ちの内容空疎な男たち」だった。

大学一年生の秋に、大塚環はテニス同好会の先輩に無理に犯されて、処女を失った。彼の部屋に誘われて、暴力的な性行為を強要された。そのことで、大塚環は大きなショックを受けた。鬱状態に陥ってしまって、一年で六キロも痩せた。

青豆はあの男に制裁を加えようとしたが、環は同意しなかった。自分の不注意なところもあって、いまさらどこかに訴え出ても、どうにもならないと思ったからであった。「誘われるまま一人で彼の部屋に行った私にも責任がある」。癒されない傷は環の心に深い無力感を残した。

大塚環の考えたように、犯されて処女性を失ったことを人に語ったら、女である環の「誘われるまま一人で彼の部屋に行った責任」が問われる。1980年代において、処女性を失う恥を曝すことはできる限り避けたい気持ちもあるだろう。

暴力的な事件に当たって、暴力施行者を責めるより、その場に行く被害者の方を責める傾向がある。性暴力事件に当たって、女である被害者の方を責める傾向は強い。「私のせいで」や「女のせいで」という考え方に縛られ、大塚環はずっとその痛みを語らずに癒されずにいた。

心の傷が語られずにいたら、癒される可能性は低い。語られないことは、そのことが正当性に欠けているに等しい。犯された側の正当性を認めないことは、人を暴力的に犯す側を弁明する傾向を示している。性暴力の目に合わされた女性である自分のほうが悪くないということが判明されない以上、環は同じタイプの男に傷つけられる可能性が高くなる。その意味で、性暴力を振るうタイプの男性の罪を定めて、制裁を与えることは、貴重な価値がある。

青豆は環の考え方と違って、その男に制裁を加えることは「処女性の喪失とか、そういう表面的な問題」ではなくて「人の魂の神聖さの問題」だと思った。青豆は環を犯した男に個人的な制裁を加えることにするのである。

彼女は男の住んでいるアパートの住所を環から聞き出し、製図図面をいれるプラスチックの大型筒にソフトボール用のバットを入れて、そこに行った。その日、環は親戚の法事か何かがあって金沢に行っていた。それは彼女のアリバイになるはずだ。男が部屋にいないことは前もって確かめておいた。ドライバーとハンマーを使って鍵を壊し、部屋に入った。それからバットにタオルを幾重にも巻き、なるべく音を立てないように気をつけながら、部屋の中にあるものを片端から叩き壊していった。テレビから、ライトスタンドから、時計から、レコードから、トースターから、花瓶から、壊せるものはひとつ残らず壊した。電話のコードは鋏で切断した。本は背表紙を裂いてばらばらにし、歯磨きチューブやシェービング・クリームは中身をそっくりカーペットの上にばらまいた。ベッドにはソースをかけた。抽斗中のノートは引き裂いた。ペンと鉛筆は折った。電球はすべて叩き割った。カーテンとクッションには包丁で裂け目を入れた。タンスの中のシャツもすべて鋏で切った。下着や靴下の抽斗にはトマト・ケチャップをたっぷりかけておいた。冷蔵庫のヒューズを抜いて窓の外に捨てた。水洗便器の水槽のストッパーを外して壊した。シャワーヘッドも潰した。破壊は念入りで、隅々まで徹底していた。部屋はしばらく前に新聞の写真で見た、砲撃後のペイルートの市街地の光景に近いものになった。<sup>79</sup>

念入りで隅々まで徹底した破壊であった。青豆はどれだけあの男を怨み、どれだけ「制裁」に準備をしたのかが分かる。大塚環のために復讐を行い、彼女のアリバイまで念頭に入れた。青豆の正義感と環への愛が見られる。

<sup>79</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P295

大塚環の悲劇はそこで終わるのではなかった。大学時代にいるあいだ、環は多くの男たちと付き合い、いつもなにかしらのトラブルに巻き込まれ、裏切られ傷つけられ、そして捨てられた。そのたびに半狂乱に近い状態になった。二度も中絶手術をした。

そして二十四歳のとき、環は二歳上の男と結婚した。婚約をすると同時に、夫は許さないがため、彼女は大学院に通うことを止め、法律の勉強もあきらめた。

環の夫は資産家の息子で、端正であった。口先はうまく、知恵はそれなりに備えていた。しかし、深みのない顔をしていて、人柄の厚みがなく、言葉に重みがなかった。青豆は不吉な予感をした。やはり結婚後、環は急に外に出られなくなった。いつも自分が幸せだといった。「夫は優しいし、夫の両親も親切な人たち」だし、法律の試験をやめることは「惜しくない」し、「司法試験のプレッシャー」から逃れることも良かったと思ったそうであった。子供を作る予定があり、「そうなたらただのそのへんの退屈なお母さん」になるよと幸せそうに言った。それは全部うそだと確認できるのは環の自殺であった。

環は二十六歳の誕生日を三日後に控えて自殺した。夫から絶え間ないサディスティックな暴力を受け続けてきたからであった。暴力は最初からあったし、時を追うにしたがって、ますます「執拗」で「陰惨」なものになった。なぜか知らないが、環はその悪夢のような場所から逃れることはできなかった。

環は青豆への遺書の中で、この婚姻を「間違い」だと言ったが、「地獄」から抜け出すことはできなくて、抜け出した後、「どこに行けばいいのかもわからない」そうであった。しかし、前回と同じように、失敗した婚姻生活は自分が「受けるのに相応しいもの」「誰を非難することもできません」と言った。

環は前にも述べたとおり、「男女関係において生まれながらの被害者」であった。暴力に合わされても、暴力施行者の弁明をし、自分を責めて嫌悪することは、彼女を男女関係の被害者に追い詰めたのであった。

時代背景のことを込めて考えれば、80年代は近代家族の一番盛んな時期で、その時、結婚して家庭主婦になり、二人くらいの子供を産むことは一般的に幸せだと思われた。親の仲が悪かった環にとって、幸せな家庭を作り上げることは何よりの夢だと言える。しかし、その近代家族の夢は彼女に法律家の夢をあきらめて家庭に投げ込み、どんな暴力を受けても文句を言わないことを要求し、結局彼女の生命まで奪い取った。

青豆にとって環の死は一生にわたって癒されることのできない傷を残した。彼女は驚かなかった。しばらく悲しみも湧いてこなかった。「家の中にただじっと閉じこもって」いて、「食事もせず、眠りもせず、水さえほとんど飲まなかった」し、環の葬式にも出なかった。でも、環を失って、青豆は身体を「引き裂かれた」ような気持ちであった。「身体の中のあらゆる体液が外にこぼれ出ていく」ように、何日も泣いた。

「これを境にして私はもう以前の私ではなくなる」と青豆は強く感じ、あの男に制裁を加えることを決めた。

青豆はたっぷり時間をかけて周到に計画を練った。首の後ろのどのポイントをどの角度で、鋭い針で刺せば相手を瞬時に死に至らしめることができるか、彼女はその知識を持っていた。もちろん誰にでもできることではない。(中略) 彼女は工具を揃え、時間をかけて、小さな細身のアイスピックのように見える特殊な器具を作り上げた。その針先は容赦のない観念に鋭く冷たく尖っていた。<sup>80</sup>

青豆は周到な計画を立てて、誰にも気づかれいないように、一年後に環の元夫を訪問し、彼を心臓発作に見せかけて殺した。これは青豆の初めての殺人であった。親友大塚環のために。

環の死は青豆の人生を変えた。昔、環と共に楽しくやったソフトボールは環の死後止めた。青豆が定期的に激しく男の身体を求めるのも環の死後だった。勤めていたスポーツ・ドリンクと健康食品を製造する会社を辞めて、スポーツ・クラブに入ってインストラクターとなった。そのクラブで女性のための護身術のクラスを開いて、男性と対抗できる護身術——つまり睾丸を蹴ることを女性メンバーに教えることをした。そのクラスで、後に彼女の反暴力運動を支持してくれた老婦人と出会い、DV 施行者に広汎な復讐を行い始めたのであった。環のために復讐をするためにはじめて実施するアイスピックで人の首を刺して心臓発作と見せかけることが青豆の戦闘手段になった。

環は青豆の初めての親友であり、唯一の親友とも言える。彼女の死は青豆にとって、癒しのない痛みを残してしまった。また、青豆を反 DV 運動の道に進ませた。環の死を思ってこそ、青豆は「広汎な正義」のために戦闘を続けることができたのであった。

### 3 家庭内暴力への復讐—広汎な正義のために

石油関係の企業に勤めている深山は、中東諸国での設備投資に関してはスペシャリストだという。彼は育ちが良く、収入も高く、ジャガーの新車に乗っている。少年時代は甘やかされ、外国に留学し、英語とフランス語を熟知している。

しかし、深山は「世界は自分中心になって」動いていると思っている。彼は他人とくに女性から要求されることや批判されることには我慢することができない。自分は他人にどんな要求をしても痛痒を感じない。DV 施行者で、妻をゴルフクラブで殴って肋骨を数本折った。彼の妻は、背中、乳房、臀部、太腿に、あざみやみみず腫れが残っている。片耳が難聴の症状を示している。このまま放置するわけには行かないと老婦人は思って、青豆に彼を「あの世に送る」指示を出した。

青豆は彼のことを「ネズミ野郎」と呼ぶ。深山がホテルで仕事をしているところに向かい、青豆はホテルのマネージメントと見せかけ、エアコンの点検を行うと見せかけ部屋に入り、理由をつけて彼の首筋に、特製のアイスピックを刺して殺害した。アイスピックの抜き方に注意を払い、出血のないように傷跡を六分間押さえた。部屋に残る指紋を拭き取って、後始末を済ませた。深山は心臓発作で死んだと人は思うだろう。彼の死に誰も異議を持って検死解剖することはなかった。新聞に載るほどのことでもない。残された妻は、時間・金がかかり、精神的な苦痛も伴う離婚訴訟から免れることができる。家庭内暴力を無事に無くすと同時に、保険金が下り、これからの生活が補償

<sup>80</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P302

される。

深山をはじめ、他にも二人の DV 施行者は青豆の手によって殺された。リーダー深田保を含め、青豆は四人を連続殺害した犯人である。その罪は裁判にとられないまま、青豆はハッピーエンドで終わられるかという問いも出ているが、青豆はすでにその罪を補ったと思う。その分析は四章で行う。

#### 4 〈王〉を殺す——偏狭な宗教や DV との最終戦

青豆の戦闘対象に当たるものは全部 DV 施行者である。高校時代の親友大塚環にレイプを行う環の先輩、暴行を行って環を自殺に追い込んだ環の夫、妻に執拗な DV を行う男性たち三人などである。その戦闘の頂点に当たるのは宗教団体「さきがけ」のリーダー深田保への暗殺行為である。

「さきがけ」のリーダー深田保は、幼女をレイプする疑いがあると見られ、老婦人の協力で、青豆は彼に接触し、暗殺行為を行おうとした。

しかし、リーダーの話からわかるのは、彼は神の〈声を聞くもの〉つまり〈王〉にあたるものだ。幼女との交わりの真実は、観念的な幼女は自分から性行為を求めているそうだ。彼は深い知恵と超自然力を持つ〈王〉であった。つまり青豆は深田保を殺したこと＝〈王〉を殺したことになる。

青豆がリーダー深田保を殺した意味は二つある。ひとつは偏狭な宗教と訣別したこと。ひとつは DV 施行者への復讐の終わりである。

偏狭な宗教が嫌いなことを青豆は何度も繰り返した。宗教的な原理主義者を便秘や家庭内暴力と並べて嫌悪する。

便秘は青豆がこの世界でもっとも嫌悪する物事のひとつだった。家庭内暴力をふるう卑劣な男たちや、偏狭な精神を持った宗教的な原理主義者たちと同じくらい。<sup>81</sup>

また、サダト大統領がイスラム過激派のテロリストに暗殺されることを、青豆は気の毒だと思った。それも「宗教がらみの原理主義者たちに対しては、一貫して強い嫌悪感を抱いていた」からだ。

しかし、リーダーの死後、青豆は「証人会」への憎しみや偏見をなくした。彼女は自然にお祈りを唱えるようになった。「証人会」の信者の親からの脱出は青豆の戦闘意欲を保つ源とでもいえるゆえで、「証人会」への帰還は彼女の戦闘精神をなくす可能性を示す。

また、性暴力を振るったと思われたリーダー深田保は自ら死を望んだ。青豆は彼の願いの元で彼を殺したが、DV への怒りを失って、戦闘理由も失った。

DV 問題の提示や、DV 被害者を守るセーフハウスの提起は、村上春樹が社会問題及び女性問題に関心を寄せる証拠ではある。しかし、性暴力を正当化することによって、青豆の反 DV 行為の正義性が疑われることになる。ここが村上春樹の DV への追求の弱いところであり、問題点だと思われる。村上春樹はチェーホフの名言を引用して「小説家とは問題を解決する人間ではない。問題を提

<sup>81</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P204

起する人間である」と言った。DV問題の提起と中途半端はまさにその名言を実践したのであったともいえよう。しかし、問題を提起するだけで解決方法を見つけようともせずに終わるのは村上春樹の追及の不徹底で中途半端なところであると言わざるをえない。

ノイマン『意識の起源』<sup>82</sup>は意識発達の元型的な諸段階を検証する説であり、この本によれば、古代における「処女」とは「誰にも所属せず、どの男性からも独立している」という意味である。また、同書によれば、サンスクリット語では「独立した女性」は娼婦の同義語である。男性から独立した女性は処女でもあり、娼婦でもあるという。誰にも所属してない女性に「処女」か「娼婦」か「レズビアン」という名をつけて、特別視することは、文学における女性の付属性を決め付けることに他ならない。

青豆は常に自分を娼婦的な存在だと自覚したが、おそらく、誰にも所属はしてないことを意味しているだろう。レズビアンの間は男性の欲望から解放されたところで同性の相手に愛を求めると見ることできる。青豆はレズビアンであることを否定したが、親友とレズビアン的な関係であった。娼婦、処女、レズビアン、三つの自己認識には、男性に所属しない女性という共通点がある。娼婦だと自覚すること、処女懐胎すること、レズビアンではないがレズビアン的なことをしたこと、ここから見えるのは、男性に属さない青豆、家父長制から独立したヒロインだと思われる。

青豆、キリスト教の聖母マリアに共通するのは「処女=母」である。「パルテノゲネーゼ（単性生殖）」とも言えよう。マリアンネ・ヴェックスは『処女懐胎の秘密』で<sup>83</sup>宇宙のリズムの中で、処女懐胎は可能であるし、認められた時代もあった。賢人とか聖人と認められるような男は単為生殖で生まれた可能性が高いと述べた。神話の中の処女懐胎、男に依存してない妊娠は無原罪の御孕みを意味している。聖書は処女懐胎を以下のように述べる。おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう。これは、「神われらと共にいます」という意味である。<sup>84</sup>つまり、処女懐胎は神が人間と共にいる証拠としている。

生まれながら人体について熟知することや処女懐胎することから見れば、青豆が普通の人間より、女神か天女など現実を超えた女性として設定された可能性が高い。青豆とふかえりはそれぞれの問題でもったとき、鴉が毎日来た。鳥は天上と地上を繋ぐ役割だ。鳥の羽は天女の羽衣ともなれるだろう。こういう側面から見れば、『1Q84』を現代の神話と解釈することも可能であろう。この神話の中で、青豆は女神と設定され、戦闘能力も備えた、天上から地上に降りてきたものと考えられる。

男性主人公の天吾や深田保（リーダー）はよく〈王〉と結びついて考えられているが、ヒロインの青豆はいまだに神話的な解釈はされてはいなかった。本論は、青豆の神話的、民俗的な解釈を示したい。

<sup>82</sup>ノイマン著 林道義訳、紀伊国屋書店 2006. 10

<sup>83</sup>『処女懐胎の秘密』マリアンネ・ヴェックス著 伊藤明子訳 現代所管 1999. 07. 20 パルテノゲネーゼ、単為生殖、処女出産のこと、ギリシア語からきた言葉で、パルテノース (Parthenos) は処女、ゲネシス (Genesis) 起源、発生、生成の意味だという。

<sup>84</sup>日本聖書協会 小形新約聖書 マタイによる福音書第一章

### 第三節 家庭に帰還した青豆

どんな正義の理由があっても、青豆は連続殺人者である。その罪を償う方法として、彼女は自殺した。一度死んで、他人のために再生することになった。

文章の最初は、青豆は中東諸国での設備投資に関するスペシャリスト深山を殺しに行く途中とされている。青豆が殺した男は、深山が四人目。一人目は青豆の親友大塚環を自殺に追い込んだ大塚環の夫である。次の三人は皆 DV 施行者である。深田保は自分から死を求めるが、結果としては青豆の手によって、リーダー深田を死なせた。その罪は裁判されることもなく、青豆は天吾と〈1Q84〉の世界を脱出することは、不自然である。実は青豆は自殺を通じて、自分の罪を償ったのである。再生する人には、何の罪もないのだ。だからこそ、天吾とハッピーエンドで終わることができるのだ。

深田保によって、青豆と天吾の中で、一人しか生きることはいない。青豆は天吾のために首都高で自殺しようとした。そこで、彼女を止めるのは天吾のやさしい呼び声だった。空気さなぎは突然現れ、その中にいるのは、十歳の青豆だった。天吾は十歳の青豆をやさしく呼んだ。天吾の声を聞いて、自殺を止めたが、死へ向かう決意は十分であった。

天吾のため死をやめた＝再生した後の青豆は、天吾のための存在になってしまった。青豆が戦闘意欲を失うのもあたり前になってしまう。

深田保にはいろんな身分がある。元学生運動のリーダー、宗教団体のリーダー、性暴力施行者、父、夫、など。しかし、青豆にとって深田保はまず〈王〉である。老婦人は深田保が未成年少女に性暴力を行うため、怒って復讐を行い、青豆に暗殺の指示を下したが、青豆自身はそれほどの怒りを示してはいない。逆に、彼女は深田保の超能力を目撃し、彼と会話をし、深田保＝〈王〉であることを信じ込んだ。

深田保は宗教団体の教祖で、巨漢でもある。初めて筋肉ストレッチングのために彼と会ったとき、「目に見える以上のものを彼は視ている」と青豆は感じた。熟視された後の青豆は「急速に力を失っていくのを感じた。まるでホースで水を撒いているときに、誰かが建物の陰で水道の蛇口を閉めたみたい。」と思った。置時計を持ち上げたり、青豆の心の中に潜む1Q84年代と天吾の存在を言い出したりした。青豆が彼を暗殺しに来たことも最初から分かっており、王の任期が終了したら惨殺を迎えるように、進んで死を求めている。

深田保＝リーダーと短い会話しかしていないが大事な言葉が多い。たとえば、証人会の信者だったことについて、青豆は「選んで信者になったわけではありません」と言ったが、リーダーは「幼い頃植え付けられたイメージから、人は決して離れることはできない」と答えた。リーダーの言うように、青豆は十歳から証人会を離れたが、人を殺す前とか、自殺する前とか、1Q84を逃げる前とか、証人会の祈文を自然に口から出した。最初深田保は少女レイプ事件の犯人、カルト団体のリーダーだと設定されたが、だんだん神の代理人、〈声〉を聞くもの＝王に変換された。彼が言ったことも、ほとんど間違いはなくて、事実そのものになってしまった。

逆に、青豆は深田保を殺す理由を失ってしまった。少女に性暴力を施すことも、麻痺状態におかれたリーダーに巫女役の少女が自分から性行為を求めることになってしまった。川奈天吾を救うと



いう条件で、青豆はリーダーを殺したが、青豆の戦闘の正義性は曖昧化された。

彼女は先代の〈王〉を殺した。同時に、彼女は妊娠して、ドウタを孕んで、パシヴァになる。天吾は物語を語る能力によって、レシヴァつまり継ぎの〈声〉を聞く人＝王になった。妊娠した青豆はマザになり、孕んだものはドウタになる。ドウタはリトル・ピープルたちの通路となる。新しい〈声〉を聞くチームが組まれる。

つまり、青豆は先代の王を殺し、次の王を手伝う役割を果たしている。戦闘は、先代の王を殺すまでの手段である。深田保を殺した後、青豆の戦闘は自然に終わってしまった。

## 第五章 戦闘美少女ふかえり：父との戦い

### 第一節 超自然性を持つ美少女

ふかえりには特異なところがたくさんある。ディスレクシア（読字障害）で本を読むことはできないし、コミュニケーションみたいなところで育ち、学校にはほとんど通わなかった。父親深田保は左翼の革命組織のリーダーだったが、今は宗教団体の教祖である。父親の元から逃げた後、彼女を引き取って育てるのは昔、高名だった文化人類学者戎野先生であった。しかし、ふかえりの最も目立つ特徴は美貌と超自然性に他ならないのである。

ふかえりは小柄で全体的に造りが小さく、写真で見るとより更に美しい顔立ちをしていた。彼女の顔の中で何より人目を惹くのは、その目だった。印象的な、奥行きのある目だ。その潤いのある漆黒の一对の瞳で見つめられると、天吾は落ち着かない気持ちになった。彼女はほとんどまばたきもしなかった。呼吸さえしていないみたいに見えた。髪は誰かが定規で一本一本線を引いたようにまっすぐで、眉毛のかたちが髪型とよくあっていた。そして美しい十代の少女の多くがそうであるように、表情には生活のにおいが欠けていた。

ほっそりとした体つきだったが、そのバランスからすれば胸の大きさはいやでも人目を惹いた。かたちもとても美しい。

彼女は胸のかたちがぐっつきりと出る薄い夏物のセーターに、細身のブルージーンズをはいていた。髪はまっすぐ長く、肌は艶やかだった。まわりの男たちがちらちらと彼女の方に目をやった。天吾はその視線を感じた。<sup>85</sup>

あまりにも端整で美しいので、そこからは性的な意味すらほとんど失われてしまっている。<sup>86</sup>

大きい胸は何度も強調される。性的な意味を含んでない美だが、本人は自覚しないまま逆に男性の心を挑発し、引き寄せる力を持っているふかえりの美だ。

斎藤環『戦闘美少女の精神分析』<sup>87</sup>によると、本人が全く自覚せずに美貌を持ち、性的意味がなく、逆に性欲を呼び起こす力は戦闘美少女の特徴の一つである。斎藤氏によると、戦闘美少女は変身（＝高速な成熟）、能動性（＝戦闘能力）と受動性（＝可憐さ）、突然与えられた戦闘能力と媒介役割などの特徴を持っている。ふかえりの美貌、突然与えられた戦闘能力、媒介の役割からすると、ふかえりは戦闘美少女の系譜を受け継いでいる可能性がある。

<sup>85</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P363

<sup>86</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P375

<sup>87</sup>斎藤環著『戦闘美少女の精神分析』太田出版 2000

## 第二節 ふかえりの父との戦い

我々の生きている世界にとってもっとも重要なのは、善と悪の割合が、バランスをとって維持されていることだ。(中略) 力を使えば使うほど、その力に対抗する力も自動的に高まっていく。<sup>88</sup>

「自分の娘を観念的に多義的に犯すことによって、あなた(深田保、リーダー)はリトル・ピープルの代理人になった。しかしあなたがリトル・ピープルの代理人となるのと同時に、彼女(ふかえり)はその補償のために、あなたのもとを離れていわば敵対する存在になった。」<sup>89</sup>

ふかえりを観念的に多義的に犯すことによって、深田保はリトル・ピープルの代理人になった。父の深田保はリトル・ピープルの代理人になると同時に、ふかえりは自動的に反リトル・ピープル作用の代理人となった。父と合わせてこの世の善と悪のバランスを維持することがふかえりの役割なのだ。ふかえりは父のための娘だといわれる。

十歳までずっとコミュニティーの中で、素朴で純粋な生活を送ってきたふかえりは、十歳のとき、リトル・ピープルと出会い、人生が変わった。コミュニオンの中でいちばん年老いて目の見えない山羊は特別な存在だった。その山羊を世話することがふかえりの役割だが、山羊は死んでしまった。死んだ山羊と十日間隔離処分を受けた。三日目の夜、死んだ山羊の口からリトル・ピープルがやってきた。少女の手伝いで空気の中から糸を取り出して、空気さなぎを作った。少女は好奇心を押さえず、リトル・ピープルの誘いに乗っ取って、空気さなぎの割れるところを見に行ったところ、中にいるのは、少女自身だった。ふかえりはマザで、空気さなぎのなかにいるのはドウタだ。ドウタはマザの心の影であり、少女の代理を務めた。少女はパシヴァで父はレシヴァだ(知覚するものはパシヴァ、知覚したことをレシヴァ)の役割をした。ドウタはリトル・ピープルたちの通路となる。マザの世話なしにドウタは完全ではない。ドウタを失えばマザは心の影をなくすことになる。ドウタが目覚めたときには、空の月が二つになる。リトル・ピープルと空気さなぎは正しくないもので、ゆがんだもので、自然に反したことだと分かって、少女はドウタを残してコミュニティーから逃げ出した。ふかえりは逃げた後、複数のドウタたちが作られて、リトル・ピープルのためのパシヴァ＝知覚するものとなり、巫女的役割を果たすことになった。ドウタを離れたので、リトル・ピープルは復讐をした。ふかえりはマザであるため、彼女に直接手を出すことができないらしい、かわりに、ふかえりの周りには人間に害を及ぼした。そのため、少女は自分の空気さなぎを作って、リトル・ピープルの通路の逆方向にたどって、マザとドウタの意味を解き明かすことを目指した。「われらのことを誰かに言うと、ずいぶんよくないことが起きるぞ」とリトル・ピープルは警告したが、ふかえりは彼らの存在を口述し、戒野先生の娘アザミによって小説となった。後は天吾によって書き直されて最優秀新人賞を取った。ふかえりは物語を提供し、天吾はそれを有効な文章に転換した。その物語はリトル・ピープルの及ぼすモーメントに対抗する抗体の役目を果たした。

<sup>88</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK2 P274

<sup>89</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK2 P278

ふかえりの戦闘対象は、リトル・ピープルである。リトル・ピープルと戦うために、父深田保と戦わなければならない。父の深田保はリトル・ピープルの代理人で、しかも後継者はまだ見つかってはいない。父を潰すことによって、リトル・ピープルに衝撃を与えるわけだ。

父と戦うより、父をリトル・ピープルから解放すると言ったほうがもっと適切であろう。なぜかという、父はリトル・ピープルの代理人になり、宗教団体のリーダーになり、超自然力を持つと同時に、体は滅びていく。視力は衰えて強い光に耐えることはできなくなり、恩寵の代償として、筋肉はしばし硬直となって麻痺状態に落ちる。麻痺が続くあいだ、性欲はないが、勃起が続く。生理がない巫女たちはそのうちリーダーの深田保と交わって、後継者を身ごもろうとする。もともと学生運動のリーダーで、宗教を信じない人が宗教団体の教祖になってしまったり、麻痺状態で自分の娘を含めた幼女と交わったり、娘と対抗的な存在になって離れたりして、体だけではなく、自分との葛藤も想像できる。リーダーは自ら死を望んでいて、ふかえりは父を手伝ったといってもいい。

戦闘美少女ふかえりはリトル・ピープルと戦闘している。リトル・ピープルを日本の天皇制や戦後日本の政治制度だと説明する説がある。(注必要) ジョージ・オーウェルは『1984年』で反全体主義、反集産主義志向を表していて、『1984』はそれと深く関連している。この世界でビッグブラザーはもう出番を失い、主導したのはリトル・ピープルだとしたら、リトル・ピープルは全体主義、集産主義をはじめ、あらゆるカルト集団の象徴だと思われる。

彼女はディスレクシアで直接小説を書くことができない。アザミと天吾の手によって自分の経歴を小説にし、ベストセラーまでなって、リトル・ピープルの存在を世間に知らせた。人に知られたことによって、リトル・ピープルにショックが与えられる。知恵を撒くことによって、カルト集団の魔法が見破られ彼らはうまく運営することができないからであろう。

### 第三節 少女の役割

#### 1 母のイメージを再現する

ふかえりはリトル・ピープルを父のところに連れて、父を王にさせた。また、父がリトル・ピープルに縛られすぎて、身体的に病んだ時、父を殺す行動を手伝った。父を中心に振舞ってきたとも言われる。さて、父のほかにも、他の男性とどのように付き合っているのか。

かえりは現実性を欠いている。現実性が欠けているからこそ、多様なキャラクターとして想像することができる。多様に想像されて、ふかえりは自分の独自性を失い、男性の補いの役割しか果たしていなかった。彼女は天吾と牛河にとっては特別な存在である。天吾にとって、彼女は母親であり、恋人の代理でもある。小説のヒントをくれる人物であり、社会と繋がる媒介でもある。

天吾の最初の記憶は一歳半のときのものだ。彼の母親はブラウスを脱ぎ、白いスリッパの肩紐をはずし、父親ではない男に乳首を吸わせていた。ベビーベッドには一人の赤ん坊がいて、それはおそらく天吾だった。彼は自分を第三者として眺めている。<sup>90</sup>

『1Q84』は天吾と青豆の物語が交互的に語られている。天吾編の最初に、父親ではない男に乳首を吸わせる母親の記憶が紹介されている。乳首は赤ちゃんにとって、自分の専用物であり、唯一の食べ物でもある。それがとられることになったら、不安が高まることは考えられる。更に、父親ではない男性に取られることは、食べ物を失い、母親が与えられるべき安定感を失うほかに、家族の不安定や破滅を示している。この記憶は、母親、家族、安定感を失う象徴として、トラウマの源となり、大人になっても癒されることはない。十秒ほど鮮明な映像は、時々予兆せずに天吾を訪れることになり、その度天吾は絶えられないほどの苦痛と無力を感じる。

無音の津波のように圧倒的に押し寄せてくる。気がついたとき、それはもう彼の目の前に立ちほだかり、手足はすっかり痺れている。時間の流れがいったん止まる。まわりの空気が希薄になり、うまく呼吸ができなくなる。まわりの人々や事物が、すべて自分とは無縁のものとして化してしまう。その液体の壁は彼の全身を呑み込んでいく。世界が暗く閉ざされていく感覚があるものの、意識が薄れるわけではない。レールのポイントが切り替えられるだけだ。意識は部分的にはむしろ鋭敏になる。恐怖はない。しかし目を開けていることはできない。まぶたは固く閉じられる。まわりの物音も遠のいていく。そしてそのお馴染みの映像が何度も意識のスクリーンに映し出される。身体のいたるところから汗がふきだしてくる。シャツの脇の下が湿っていくのがわかる。全身が細かく震え始める。鼓動が速く、大きくなる。<sup>91</sup>

赤ん坊である天吾はその情景を目にして、きっと怯えたに違いない。自分に与えられるべき乳房を、誰か別の人間が吸っている。自分よりも大きく強そうな誰かが。そして母親の脳裏からは自分の存在が、たとえ一時的にせよ消えてしまっているように見える。それはひ弱な彼の生存を根元から脅かす状況である。

<sup>90</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P30

<sup>91</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P32

そのときの根元的な恐怖が、意識の印画紙に激しく焼きつけられてしまったのかもしれない。<sup>92</sup>

手足が痺れ、呼吸が困難になり、汗が出、全身が震える。また、別の世界に呑み込まれるように、時間の流れが止まり、意識が薄れる。いつも側にいてくれると思い込んだ母親は、自分と家族に二重の裏切りを行い、想像できないほど赤ん坊であった天吾に苦痛を与えた。その後、天吾はNHKの集金人である父の手によって育てられ、小説の最後まで母親の死、実の父の正体を知ってはいなかった。

神秘的な男・牛河によると、天吾の母親は夫を捨てて、赤ん坊の天吾を連れて他の男と逐電し、旅館の一室で寝間着の紐で絞め殺された。その男はいまだに行方不明だ。

母親の不在が理由で、天吾は30年間にわたって、母親のイメージを求めていると思う。天吾の回りに、母親に類する人物は幾人も登場した。最初に登場したのは天吾の小学校の担任先生太田俊江である。

太田俊江先生は小柄な三十代半ばの独身女性で、美しいとは言えない。ただし、彼女は公正で心の温かい人柄を持っている。普段は無口で温厚なのだが、いったん怒り出すと、人はがらりと変わり、誰にも止められることはできなくなる。

父親はNHKの集金人で、毎週の日曜日天吾の意志を無視して彼の集金の仕事に連れて行った。天吾はそのことで精神的な苦痛を我慢することはできなかった。彼は父親に反抗の意を示し、家から追い出された。そのとき、天吾を護るのはこの太田俊江先生であった。放課後、天吾は自分の置かれた状況を先生に打ち明けて、太田俊江先生は天吾を自分の家に連れて眠らせ、朝ごはんまで作ってあげた。その上に、頑固な天吾の父親を説得した。

いつも素朴な衣装をしている平凡な小学校の先生だが、夜を過ぎる場所（一晚とは言え、セーフハウスに等しい）を提供してくれる人で、父親よりも頼もしい存在である。ソファに毛布を敷いて寝かせて朝ごはんを作ってくれ、心温かくて優しい母親像が見られる。太田俊江先生の影響で、天吾は若い女性より年上の女性と一緒にいた方が安心できそうであった。年下の女性と一緒にいると、天吾は主導権を握り、責任を持たなければならなくなった。その責任感から免れたいため、天吾は年上の人妻と付き合っている。その十歳年上の既婚女性からも、天吾は母親のイメージを無意識のうちに求めていると思われる。

天吾は自分より十歳年上のガールフレンドをもっている。その十歳年上の女性は、母の優しさをもつことも可能であれば、姉妹、(彼女)妻の役割も果たせる。年上のガールフレンド安田恭子は母、姉妹、(彼女)妻の役割を一身にもって集めて天吾にあげたと言われる。安田恭子は家庭と娘二人を持っているが、毎週の日曜日の午後、彼女は天吾とデートし、天吾の一週間分の性欲を有効的に搾取する。彼女は天吾の記憶の中の母と同じくらい、大きい胸を持っている。母親は父ではない男に乳首を吸わせているときの無我の表情は、年上のガールフレンドがオーガズムを迎えるときの表情によく似ていた。記憶の中の母は白いスリッパをはいていたから、天吾は一度安田恭子に白

<sup>92</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P492

いスリッパを履いてデートすることを要求した。そのとき、天吾の前に現れるのは、安田恭子の肉体であったが、母親の服という記号であった。白いブラウスに白いスリッパを着た安田恭子の胸を、天吾は同じ角度で吸った。そうすると、天吾は「震わせて激しく射精」した。観念的な母と性行為を行うと見られる。

しかし、天吾は年上の彼女から、母のイメージを求めてはいないと考えた。彼はふかえりからの身から母のイメージを求めている自分を初めて発見したのだった。

そのほか、超自然性を持つ 17 歳の美少女ふかえりは、天吾の部屋に籠って天吾としばらく同棲したことがあった。その時、天吾は自分が彼女の身から母親のイメージを求めていることを自覚した。

天吾のパジャマはふかえりには大きすぎたので、彼女は袖と裾を大きく折ってそれを着ていた。身をかめると、襟元から乳房のふくらみが部分的に見えた。自分のパジャマを着たふかえりの姿を見ていると、天吾は妙に息苦しくなった。<sup>93</sup>

朝食をとりながら、自分の胸の中に何か重いものが腰を据えていることに気づいた。(中略) それはふかえりの静かな寝顔だった。

もしかして、おれはあの子に恋をしているのだろうか？いや、そんなことはない、と天吾は自分に言い聞かせた。ただ彼女の中にある何かが、たまたま物理的におれの心を揺さぶるだけだ。でもそれでは何故、彼女が身に着けたパジャマのことがこうも気になるだろう？どうして(深く意識もせず)手にとってその匂いを嗅いでしまったのだろうか？<sup>94</sup>

ふかえりの着ていたパジャマを洗濯機の中から取り上げ、鼻にあてて匂いを嗅いでしまうとき、おれはあるいはそこに母親の匂いを求めていたのかもしれない。<sup>95</sup>

ふかえりの静かな寝顔は天吾の胸に重く腰を据えている。自分のパジャマを着たふかえりの姿をみていると、天吾は息苦しく感じた。いつも強調されたふかえりの胸の膨らみを見て、性欲が呼び起こされたというかと思うと、そうでもない。天吾は洗濯機からふかえりの着ていたパジャマを取り上げ、鼻につけて匂いを嗅いでしまうとき、去っていった母親のイメージを求めている。

ふかえりへの未練は恋ではないと天吾は思ったが、ふかえりの寝顔をパジャマ姿とパジャマの匂いを思い出し、ガールフレンドの口のなかに激しく射精したりした。

無垢だが男性の性欲を呼び起こす、性欲の相手にされたまま母のイメージも求められる。17 歳の可憐な美少女ふかえりは、現実性に欠けているように描写された。だからこそ、母親を含め多様な女性像に想像されることができるのである。

---

<sup>94</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P471

<sup>95</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P492

また、ふかえりの小説を書き換えることによって、天吾の心の中に「変更」が起きた。

その美しい少女は個人的に、彼の心を不思議な角度から揺さぶった。そして『空気さなぎ』を書き直したことによって、天吾の中でなんらかの内的な変化が生じたようだ。おかげで彼は、自分の小説を書き直したことによって、天吾の中で何らかの内的変化が生じたようだ。おかげで彼は、自分の小説を書きたいという強い意欲に駆けられるようになった。それはもちろん良き変化だった。しかしそれと同時に、彼がこれまで維持してきたほとんど完璧なまでの、自己充足的な生活サイクルが、何かしらの変更を迫られていることも事実だった。<sup>96</sup>

美しい少女ふかえりは天吾に空気さなぎの世界を持ってきた。ふかえりの書いた小説を有効な文章にすることで、天吾は優れたレシヴァーになった。また、小説を書く意欲が強くなり、『空気さなぎ』の物語を受け継いで天吾は小説を書いている。ふかえりは天吾にヒントを与え、天吾に優れた小説家になる条件を満たしてあげたのだ。

また、天吾は今まで責務から逃れる生活を続けてきた。そのために天吾は大学にも残らず、正式な就職もせず、結婚もせず、自由な時間を使って自由に小説を書いてきた。性的パートナーも結婚した年上の女性で、できるだけ責任、リーダーシップから逃れていた。しかし、ふかえりによって「変更」がやってきた。前とは対照的に考えれば、責任を持ち、人間関係を築き、この世界を見つめるような「変更」だと考えられる。責任を持たせて、社会生活に戻らせる一面からすれば、ふかえりは天吾を社会と結ぶ役割も果たした。

一方、青豆は天吾の心の中で「おもし」のような役割を果たしたが、二人はずっと離れ離れの状態に置かれた。青豆が不在のあいだ、ふかえりは青豆の代理をやっていた。

雷雨の夜、ふかえりは天吾と性関係を持った。それはたぶん本当のふかえりではなくて、ドウタのふかえりだ。しかし、妊娠したのは青豆であった。ドウタは人と性関係を持ち、マザは妊娠すると考えられる。

天吾にとって、ふかえりは母親と妻の代理人と言える。そして、責任を持って生きていき、社会と天吾を結ぶ役割を果たしている。

## 2 愛と理解をもたらす

牛河利治は「新日本学術芸術振興会専任理事」と名づけて登場した特異な容貌を持つ中年男である。彼は『空気さなぎ』の流布を停止することを目的に天吾に近づいて登場したのだが、リーダーが死後、青豆の捜索が第一任務になった。

牛河利治は彼の家族の中で「異物」のような存在であった。彼は「裕福で自己充足的なエリートの家」に生まれた。父親は病院を経営し、母親はその経理を担当していた。兄と弟は医者で、妹はアメリカに留学した後、同時通訳をやっている。牛河利治以外、牛河家はみんな「やせて背が高く、

---

<sup>96</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK1 P452



卵型の整った顔立ち」をしている。牛河利治だけは、「背が低く、頭が大きく、髪の毛がもしゃもしゃと縮れていた。脚は短く、キュウリのように曲がっていた。眼球が何かにびっくりしたみたいの外に飛び出し、首のまわりには異様にむっくりと肉がついていた。眉毛が濃くて大きく毛虫のように見えた」成績は優秀だったが、運動は苦手だった。このような牛河利治は牛河家にとって隠したい存在であった。できるだけ人前には出さない、やむを得ず出すときは目立たないように扱った。容貌のせいで、家族から排斥されていた。少年時代の牛河はおおむね一人で過ごした。飼っていた犬以外友達はなかった。

にもかかわらず、少年時代から、牛河は同時代の誰よりも博識で、「知識欲に溢れ、無口にして雄弁」だった。25歳で、弁護士資格を持っている。しかし、容貌のせいで、弁護士事務所に雇われてはいなかった。個人で事務所を開いても、依頼は来なかった。自然の成り行きとして、裏社会と結びついていた。裏社会の人々は牛河の容貌を気にとめることはないからだ。中小の金融業者の元住民を追い出し土地の売買や脱税容疑者の弁護、宗教団体との結びつきは牛河の主な仕事だった。

牛河は家族を持って、妻と娘二人がいた。しかし、「突然の暗転」で、家族は崩れ、今牛河は一人になった。妻も娘たちも、彼を愛してはいなかった。妻と娘を愛したが、自分という存在を確保するために、「必要のない心の回路を閉ざしておく必要」があると思った。

こんな牛河は誰から尊敬されることもなくて、誰から愛されてはいなかった。人々から嫌われていることはもう慣れている。牛河は青豆を追跡することに、優れた頭能力と忍耐力を示している。彼は青豆の通話記録から、ラブホテルで絞殺された婦人警官中野あゆみと青豆の親密な関係を承知した。後に青豆の仕事を調査することで、老婦人こそ青豆を支持した人だと確定した。老婦人の怒りの理由も正しく推定できた。また、青豆の小学校がきっかけで、天吾と青豆のあいだに、尋常ではない繋がりがあると推測した。10歳でカルト集団から脱出する女の子には、外部からの力が無いと不自然だと思ったからだ。その外部からの力は、天吾である可能性が高い。天吾にくっ付いたら、青豆の行方が見つかると思うようになった。牛河は、天吾の住宅を監視することにした。天吾は千倉で父の看病をしており、そこで牛河と出会うのは美少女ふかえりであった。ふかえりを最後に見た人は牛河であった。牛河に見られた後、ふかえりは小説から姿を消し、消失した。

牛河は天吾を監視するあいだに、ふかえりと出会った。ふかえりの「身にまとっている超然とした透明さ」にまず注意を払った。「理屈抜きに」揺り動かされて、思わずふかえりを尾行した。ふかえりの後姿を見守った牛河は、彼女を「珍しい異国の蝶」「森の奥に生きる、柔らかな無言の生き物」のように見えた。

彼はふかえりに恋らしい感覚を持っている。性的な側面から惹かれるわけではない。「互いの存在を深く暗いところで理解しあった」からだ。

牛河は望遠レンズでふかえりを覗き見した。彼女を見ると同時に、彼女から見られた。一瞬で、牛河とふかえりのあいだに、魂の交流が行われた。「潜んで人々を盗撮している」牛河の「いびつな頭と汚れた魂を」、美しい少女ふかえりは見ている。少女の視線は牛河の魂を刺し貫き、牛河のことを理解し、憐れんでいるように見る。その目に見られて牛河は家族のことを思い出した。中央林間の一軒家、芝生の庭と犬、妻と二人の娘。彼は幼少時代から家族から隔離され、一度も家族か

ら愛されたことはなかった。ふかえりの目に照らされて、内面化された家族愛への追求を意識し始めた。

現実性の欠けている少女に、自分の存在の根本的なものが揺さぶられてしまう。その美少女は現実にある女性のすべての側面を演じることができる。だからこそ、現実性に欠けている。魂の交流ができるという理由で、牛河はふかえりに恋らしいものを感じたが、現実的な交流はできなくて、魂の交流しかできないからだ。

ふかえりは父殺しでデビューした。そして、自分を媒介に、青豆と天吾を結んで、青豆は結局性行為なしに天吾の子を孕んだ。最後、牛河を見て理解して姿を消した。こうして、ふかえりは「娘」「母親」「恋人」を演じている。いずれも男性主人公の脇役であって、ふかえり自身の戦闘理由はなかった。必要とされるなら、演じてあげる道具である。ふかえりは男性のためにあるヒロイン、男性の心中にある女性像を演じる役しか果たさなかった。

## 第六章 『1Q84』における老婦人論：暴力との戦い

### 第一節 家庭内暴力と戦う老女

#### 1 「若者中心」の村上春樹と日本近代文学

中村真一郎は『この百年の小説—人生と文学と』で、「日本の近代文学史は、青年文学史だとも言える」と言い、社会と直接取引していなかった「孤独者」の青年文学者たちが、社会に背反して純潔な現実批判を行い、また主に青年読者によって受容されてきた日本近代文学史を評して、文学において高齢者たちは周縁化されてきたことを指摘した。確かに中村の言うように、現代日本近代文学は若者中心ではあったが、谷崎潤一郎の『鍵』『瘋癲老人日記』と川端康成の『眠れる美女』など老人を描く作品がある。死を間近に控えたため、社会制約から完全に脱離することができ、一情念において排他的極端性——すなわち「狂気」を果たすことができる。性はその狂気の象徴の一つである。

高齢者の中に、さらにジェンダーや階層などのギャップがあって、老女は年齢とジェンダーという二重格差を受けている。フェミニズム文学批評は若い女性の行き方、葛藤、喜び、成長などの諸問題を解決しつつあったが、高齢女性は十分論じられていない。その中で水田宗子・北田幸恵編『山姥たちの物語—女性の原型と語りなおし』<sup>97</sup>は、老女のイメージで神話や民話に出た山姥を集中的に読み直し、現代制度から解放された老女像として意味づけをした。

村上春樹は文壇登場第一作の『風の歌を聞け』（1979）で、主人公が若年男性で、『羊をめぐる冒険』（1982）の主人公は翻訳会社を経営していた30代の男性で、『ノルウェイの森』（1987）が20代の思い出話をした30代後半の男性だった。30代前後のジャズ好きで社会から孤立した若年男性というのは、デビューした当時の村上春樹と複合一致するところが多い。高齢者について、村上春樹は『海辺のカフカ』（新潮社 2002年）の中に、知的障害を持つ男性高齢者が出てくるが、「頭が悪いのです」と言う癖があった。同じ作品中、自分の息子と性関係を持った50歳の女性がいて、エディプスコンプレックスを連想しなくてはならない中年の登場人物だった。村上春樹は若者を主な読者に想定して、若者を中心に作品を創作してきたと言えるだろうが、六十代に出した作品『1Q84』の中に、脇役ではあるが、重要な老女像を作り上げた。この老女は通常「マダム」「女主人」「老婦人」と呼ばれている。

#### 2 『1Q84』における老女像

老婦人は上流階級の七十代半ばの女性だった。彼女は『1Q84』BOOK 1とBOOK 2において、ヒロイン青豆の行動を誘導し、物語を主導していく。青豆が首都高速道路の緊急階段から降り、家庭内暴力を振るう男性を巧妙な手法で殺すところから、奇妙な『1Q84』が展開されたが、青豆は老婦人の反暴力精神を引き継いだ上で彼女からの指示を遂行しただけだった。青豆の移動に伴い、老婦人の住む世と隔離する「柳屋敷」や、老婦人ボディガードのタマル、老婦人が温室で養った蝶々たち、老婦人の保護を頼りにしたセーフハウスに住んだ女性たち、老婦人が収容したつばさという性

<sup>97</sup>水田宗子 北田幸恵編『山姥たちの物語：女性の原型と語りなおし』學藝書林 2002

的侵害を受けた少女、老婦人が企画したつばさの復讐すなわち宗教団体「さきがけ」のリーダー暗殺行動など、老婦人のおい立ち、趣味、精神世界が詳しく記され、物語の筋を推し進めている。

老婦人のような無視することのできない存在は膨大な『1Q84』研究においてどのように批評されたか。『村上春樹 表象の圏域—『1Q84』とその周辺』<sup>98</sup>では『1Q84』に関する研究系譜を整理するうえで、多くの女性研究者の声を確認することができる。遠藤郁子は「戦う女性表象で読む『1Q84』」で、老婦人を青豆の男性社会の暴力と戦う仲間として捉えた。平野葵は「『1Q84』の〈母〉たち『海辺のカフカ』との対比において」で、老婦人を「語る母」として評価して、彼女の反面は自死した沈黙の娘とする。堀口真利子は「『1Q84』における暴力表象 女同士の連帯と親密性をめぐって」で、女性たちの連帯を提示、そのメンバーである老婦人に賞賛の意味を示している。『1Q84』は上梓後まもなく、多領域の批評家から意見が出されたが、老婦人に対して上記以外は批評が極めて少ないと言えよう。老女に対する無視という暗黙の傾向は、『1Q84』の批評に共通するものと考えられる。

筆者は2013年2月に修士論文を提出する前の二年間、男性作家の語る老女像に関心を持ち『村上春樹「1Q84」と戦闘女性表象』をテーマにして青豆と老婦人の表象について論を試みた。山姥に思いをはせながら、老婦人の主導性や女性たちを守る強い母イメージについて論じた。2014年のJIU学会で、反家庭内暴力を唯一の正義にした老婦人の反暴力活動の極限や、中国文化を連想させる蝶々と老婦人のかかわりについて発表し、老婦人論を展開した。拙論の前、2009年2月-3月という『1Q84』BOOK3がまだ出版されていないころに、福田和也は『新潮』に二回に分けて、『死んだ男』(D・H・ロレンス著 織田正信訳 1936 昌久書房)などの作品と比較しながら、老婦人の反家庭内暴力の先端性と極端性を先見的に読み取った<sup>99</sup>。このような先行研究を踏まえながら、バックグラウンドやヒロインの仲間を超えて、性暴力と戦う老女表象について論じてみたい。

老婦人は女性世界が受けた暴力と真正面から向かい、主導権を握りチームを組んでリーダーシップを発揮して、正面から攻撃を起こした人物である。家族など密閉された空間の中で、親や夫など伝統的な支配者から暴力を受けるとしたら、ヒロインたちはいかなる行動を取るだろう。老婦人の娘は沈黙と我慢の果てに自殺した。しかし、老婦人は娘の復讐を自ら行うことにして、そこで止まらず女性の連盟を作り、経済・法律・後援など各方面の力を結集し、反(男性)暴力運動をシステム化して、反暴力の徹底性を図ろうとした。

『1Q84』はその背景になる暴力に満ちた世界で、ヒロイン青豆・主人公天吾・脇役牛河をそれぞれ中心にしてパラレルな物語が展開された世界である。親に信仰を押しつけられてその教義により衣食まで欠き、周りに排斥された子供時代を過ごした青豆と、彼女のそばに囲んだ家庭内暴力の被害者たち。NHK集金を拒んだ後、唯一の頼りであった父に無視された天吾と、彼と付き合っていた実の父に性暴力を受けた疑いを持つ美少女ふかえり。容貌で家族ないし社会から差別された牛河。このように、『1Q84』は身体的・心理的・感情的・性的暴力を含み、暴力の被害を多面的にあば

<sup>98</sup>米村みゆき編『村上春樹表象の圏域：『1Q84』とその周辺』森話社 2014

<sup>99</sup>福田和也「現代人は救われ得るか 村上春樹『1Q84』」(前篇と後編)『新潮』106(8) 2009年08月~09月

き出し、人々の重層的な反応や反撃に満ちた物語の世界である。その中で老婦人は、暴力に暴力をもって反撃する極端に異端的な表象となっている。

なぜ老女が女性たちを保護するだろう、なぜ老女が女性たちを保護できるのか。娘の復讐という主動的要因のほか、自分の経歴もあり経済的な余裕も彼女の行動を可能にした。しかし、男性が代表する主流世界から弱者が被害を受けた時、老いた女性を前に押すことはただの偶然よりも深い要因が潜んでいると考えられる。

老婦人は、性暴力を受けた10歳の少女つばさの話を青豆に持ちあける前に自分の10歳のときの思い出話を語ったが、その時に経験した死の世界は彼女の精神世界の基盤の一つだろう。

「私もよく覚えています」と老婦人は言った。「十歳の年に、父親に連れられてパリに行き、そこに一年ばかり滞在しました。父親は当時外交官の仕事をしていました。私たちはリュクサンブール公園の近くにある古いアパートマンに住んでいました。第一次世界大戦の末期で、駅は負傷した兵隊さんであふれていました。まだ子供のような兵隊さんいれば、年老いた人もいました。パリはすべての季節をとおして息を呑むほど美しい街ですが、私には血まみれの印象しか残っていません。前線では激しい塹壕戦が繰り広げられており、腕や脚や目を失った人々が、見捨てられた亡霊のように通りをさすらっていました。彼らの巻いた包帯の白さと、女たちの腕につけられた喪章の黒さばかりが目につきました」<sup>100</sup>

第一次世界戦末期に、少女だった老婦人は外交官を務めていた父とパリに行く話だった。その時リュクサンブール公園に溢れていたのは、戦争のダメージを受けた人間たちだった。戦争という大きなシステムの影に、たとえ戦勝国のフランスにしても、老人と子どもは戦場に送られ、女たちは家族を失われつつあった。美しい季節と死、傷者の白さと死者の黒さとの強烈な対比は、生と死という重いテーマを10歳の少女の心に焼付いた。

第一次世界大戦の末期に日本の華族の少女がパリを経験したことは、実際にあり得る話だ。一九一九年、講和会議に参加するため、日本を含めて各国の外交官はパリに集まったが、その時、日本の首席全権西園寺公望は、妾奥村花子と娘新子を連れていた。その連れられた娘の西園寺新子は、公望の長女であった。公望は彼女の二歳の時から、英語やフランス語の教育を受けさせようと熱心に考えたそうだ。成人後の新子もやはりフランス語が得意で、父親の首相時代に、パーティーでホスト役を担ったことがあって、おそらくそのフランス語の言語力で同行することになっただろう。西園寺家の養嗣子八郎と結婚するまで、新子は日本女子大学に在学して、女子教育を主張した成瀬仁蔵とも仲良しだった。しかし、西園寺新子は1920年33才の時、スペイン風邪で亡くなった。彼女が生きていたら、おそらく老婦人のような人生を送ったと想像することもできる。

思春期について複数の著書を出してきた心理学者の岩宮恵子は、「十歳を生きるということ 封印された十歳の印としてのふかえり」をテーマにし、『1Q84』の分析を行っているが、十歳に視線を注ぐ初めての評論家だろう。「十歳は、子どもとしての完成に近づいている年齢であり、第二次

<sup>100</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 P402

性徴を始めとする思春期のさまざまな混乱を迎える直前の臨界点にある年齢」<sup>101</sup>であると述べていて、青豆・天吾・ふかえりの十歳が意味づけられている。十歳の時、青豆は天吾の手を握ることによって、「証人会」の信者である親に対抗するようになった。それと同時に、天吾はNHKの集金を拒否して父の意に逆らった。ふかえりは十歳の時、閉鎖的なコミュニケーションから逃げ出した。十歳の時、皆、圧倒的な力によって損なわれていたと岩宮氏は語っているが、その損ないによって、家族や宗教という閉鎖的な場所から逃走することができ、カルトに近い集団のアイデンティティから自我の独立が成立したと思う。老婦人の十歳は他の人と違って、日本の土から離れた、死の町へたどり着いた華族の少女のことだった。

老婦人をなぜ「老」婦人に設定した理由に、年寄りに設定されたことによって、第一次世界大戦と第二次世界大戦の経験が合理になるということがあるだろう。戦争を経験したから戦争と暴力の残酷さがわかり、暴力の被害者を同情する老婦人の身に村上春樹の歴史感が託されているのではないだろうか。

## 第二節 老婦人の戦闘と「山姥性」

### 1 老婦人の戦闘：セルフハウスと暗殺

娘が自殺した翌年、彼女は同じような家庭内暴力に苦しんでいる女性たちのために、施設のセルフハウスを用意した。麻布の屋敷に近接した土地に、小さな二階建てのアパートを所有しており、近いうちに取り壊すつもりで、人を入れていなかった。その建物に簡単に手を入れて、行き場を失った女性たちのセルフハウスとして活用することにしたのだ。都内の弁護士が中心になって「暴力に悩む女性たちのための相談室」を開設しており、ボランティアが交代で面談や電話の相談を受けている。そこから老婦人のところに連絡がある。緊急の避難場所を必要とする女性たちが、セルフハウスに送り込まれてくる。小さな子供を連れてくる場合も少なくない。中には父親から性的暴行を受けている十代の娘たちもいる。彼女たちは落ち着き先が見つかるまで、そこに滞在する。当面の生活に必要なものは常備されている。食料品や着替えが支給され、彼女たちはお互いに助け合いながら一種の共同生活を送った。そのための費用は老婦人が個人的に負担した。弁護士とカウンセラーがセルフハウスを定期的に訪れ、彼女たちのケアをし、今後の対策を話し合った。老婦人も暇があれば顔をだして、そこにいる女性たち一人ひとりの話を聞き、適切なアドバイスを与えた。働き先や落ち着き先を探してやることもあった。もし物理的な介入が必要とされるトラブルが生じれば、タマルが出向いて適切に処理した。<sup>102</sup>

タマルは言った。「よくあるパターンだよ。男は世間的に見れば有能な人間だ。まわりの評価も高い、育ちも良いし、学歴も高い。社会的地位もある」

「ところがうちに帰ると人ががらりと変わる」と青豆があとを引き取って続けた。「とくに酒が入ると暴力的になる。といっても、女にしか腕力をふるえないタイプ。女房しか殴れない。でも外面だけはいい。

<sup>101</sup> 『村上春樹「1Q84」をどう読むか』河出書房新社 2009.07

<sup>102</sup> 『村上春樹「1Q84」新潮社 2009.05 P391

まわりからは、おとなしい感じの良いご主人だと思われる。自分がどんなひどい目にあわされているか、奥さんが説明して訴えても、まず信用してもらえない。男もそれがわかっているから、暴力をふるうときも、人には見せにくい場所を選ぶ。あるいは跡が残らないようにやる。そういうところ？」

タマルは肯いた。「おおむね。ただし酒は一滴も飲まない。こいつは素面で白昼堂々とやる。余計にたちが悪い。彼女は離婚を望んでいた。しかし夫はがんとして離婚を拒んだ。彼女のことが好きだったのかもしれない。あるいは手近な犠牲者を手放したくなかったのかもしれない。あるいは奥さんを力づくでレイプするのが好きだったのかもしれない」

タマルは足を軽く上げて、革靴の光り具合をまた確認した。それから話を続けた。

「家庭内暴力の証拠を示せば、もちろん離婚は成立するだろうが、それには時間もかかるし、金もかかる。相手が腕のいい弁護士を用意すれば、かなり不愉快な目にもあわされる。家庭裁判所は混み合っているし、裁判官の数は不足している。それにも離婚が成立し、慰謝料なり生活扶養金の額が確定したところで、そんなものまともに払う男は少ない。なんとでも言い抜けられるからね。日本では慰謝料を払わなかったという理由で、元亭主が刑務所に入れられることはほとんどない。支払いの意思はまだまだ男に対して甘くできているんだ」

青豆は言った。「ところが数日前、その暴力的な夫が渋谷のホテルの一室で、うまい具合に心臓発作を起こしてくれた」

「うまい具合にという表現はいささか直接的すぎる」とタマルは軽く舌打ちをして言った。「天の配剤によってというのが俺の好みだ。いずれにせよ死因に不審な点はないし、人目を引くほど高額な保険金でもないから、生保会社が疑問を抱くことはない。たぶんすんなり支払われるはずだ。とはいえ、それでもまずまずの額だ。その保険金で彼女は新しい人生の第一歩を踏み出すことができる。おまけに離婚訴訟にかかる時間と金がそっくり節約できる。煩雑で意味のない法律上の手続きや、その後のトラブルがもたらす精神的苦痛も回避できた」

「それに、そんなカスみたいな危ないやつがこのまま世間に野放しになって、どこかで新たな犠牲者を見つけることもない」<sup>103</sup> (傍点筆者)

老婦人たちは何故暗殺という手段までとって家庭内暴力の目に遭った女性の復讐をするのか。青豆は渋谷のホテルで妻に暴力を振るう男性を殺した後、前に引用部分で示すように老婦人のボディガードのタマルと正規なルートで家庭内暴力から脱出することの難しさについて話した。

まずは現存の制度による被害者の女性たちを救援する難しさである。夫の方が社会的に成功すればするほど、妻の話が信じられない傾向がつよいし、エリートとの対決を女性のほうが自然に避けたがることであろう。次に、夫が認めないと、離婚することの困難さである。現在日本での離婚に関する制度は協議離婚、調停離婚、裁判離婚制度があるが、夫の合意をもらえなければ、協議離婚はまず無理である。裁判にかけるとしたら、混み合っている家庭裁判所で時間と金をかけて、いい弁護士を雇った夫の方が有利だということがテキストから伝わる。最後、離婚がようやく成立して

<sup>103</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK 1 P157

も、慰謝料や生活扶養金がいくらもらえるかはまだ不明のまま。精神的にも身体的にも傷だらけの家庭内暴力被害者は、せつかく離婚を求めた後、貧困の淵に陥る可能性が高いということだ。つまり現状からして家庭から脱出する代価はあまりにも高いので、泣き寝入りする被害者がほとんどである。もし暴力を振るう人をこの世から消したなら被害者は保険金を手に入れるほか時間と金の節約にもなるし、新しい被害者が出なくなるだろうという発想から、『1Q84』に老婦人を青豆のような人物が想像されたのだろう。

## 2 老婦人の「山姥性」

鬼婆に呪術された少女を勇士が助けるという伝統的な物語の構造において、女性が受け身で純潔な役割を担い、人の助けを待つものとされた。恰もその伝統を受け継ぐように、『1Q84』に従順な女性たちが登場したが、一人残さず救済に恵まれていなかった。老婦人の娘は妊娠したまま自殺した、青豆の親友大塚環は首をつり自殺した、現役女性警官あゆみは絞殺された、セーフハウスに隠れた女性は時間の流通さえ拒否し引きこもって生活を送った。勇士が欠如したのであった。しかも、家庭内暴力という社会問題を投影した設定において、男性が女性たちを脅かす存在になった。そこで女性の味方になって、物語の構造を補うのが元鬼婆役の老女であった。老女が女性たちの守り神になって物語のバランスを保ち、女性世界を侵す暴力者を懲罰した。文学作品において、老女は婆ちゃんになってバージョンアップした母性を帯びる存在か、老いてから若い女性を憎んで加害する化け物として描かれることが多かった。いずれにしても、わがままで感性的な人物像であり、悪意に満ちた想像であろう。だからこそ『1Q84』の老女像が際立っている。老婦人は個人の復讐を超えて、DV被害者の女性たちに慈悲の目を注ぎ、同性愛者と携帯関係を結び、法律・経済・武力の力を組み立てて広い範囲でシステムの暴力との徹底した戦闘に挑んだ。

大きな力で女性と子供に庇護を与える老女イメージに、まず「山姥」を挙げておきたい。山姥は妖怪として表象され、「老女」への嫌悪を内面に含んでいるが、現代に入って女性作家と女性評論家は女性の自我と自由を表そうとする時、山姥は新しい発展を迎えた。「山姥」は日本の民話・伝説の中の女性にとどまらず、女性の原型として新たに見直されてきている。「里」から排除され、周縁化された存在として解釈されている。しかし周縁化された存在であるが、女性として生き残り、生き直す存在としてフェミニズム文学批評の中で意味付けてきた。円地文子や大庭みな子などの女性作家、水田宗子などの女性批評家によって山姥は再解釈され、現代システムから自由な居場所に移動し、規範的な女性のアイデンティティから解放された老女のように意味づけられた。

山姥との類似性を老婦人に見出すことができる。白髪で、無限の力の持ち主、女性の肩を持ち、人間の群れを離れて麻布にある大きな柳屋敷という都市の中の「山」に住むというところであるから、里棲みの山姥とも言える。

男性作家村上春樹の描いた老女は女性表現に表われる山姥とは言い切れないが、同性愛者や若い女性と連携関係を結び、DV 施行者を罰する設定から見れば、「老」「女」の「力」を強調するところが共通していると言える。



### 第三節 老女の消失からわかる村上春樹

#### 1 反性暴力を唯一の真理にする「カルト」

「僕が今、一番恐ろしいと思うのは特定の主義主張による『精神的な囲い込み』のようなものです。多くの人は枠組みが必要で、それがなくなってしまうと耐えられない。」

「物語というのは、そういう『精神的な囲い込み』に対抗するものでなくてはいけない。目に見えることじゃないから難しいけど、いい物語は人の心を深く広くする。深く広い心というのは狭いところには入りたがらないものなんです」<sup>104</sup>

カルト集団と対抗する物語の創作は明らかに『1Q84』の目的である。カルトについて村上春樹は自分の定義を出した。「何かのために血にまみれて闘う攻撃的な物語だった」<sup>105</sup>と語る。それでは『1Q84』はどのような手法でカルトと対抗する物語を作ったのだろうか。

宗教団体「さきがけ」は無論その例の一つである。「さきがけ」はもともと農業団体だったが、教主の娘ふかえりがリトル・ピープルを連れて来て以来、完全な秘密主義を徹底させ、外との連絡が切れたシステムになった。教主は自分の娘を含み教団内の少女をすべてレイプした。それが理由で、老婦人は青豆を教主殺しに向かわせた。戦争もカルト集団と言えらるだろう。人々は血にまみれても外の無罪な人を攻撃する物語が強く内包されていた。『1Q84』において、天吾の父は戦争機械から吐き出した残渣である。無知のまま戦争を経験し、戦後は戦争について語る空間を失った。戦争というカルトから出ても、ほかの集団に属したいと望む傾向が強い。それが故にNHKの集金人として満足していたし、息子の天吾を連れて集金の道を歩んだが、日曜日が収奪された天吾に傷を付けた。生涯システムに従属して来た彼には、集金人に満足しない息子の天吾は理解不可能である上に、怒りを持っていた。親子の隔たりと和解は『1Q84』において大きな枚数を占めている。親子のギャップの根本に、戦争とシステムを自分のアイデンティティにする父親と自由と自我を追求する息子の対抗である。こうしてみれば、『1Q84』は徹底したカルトと対抗する小説とも言えらるだろう。カルトとなったの集団のアイデンティティを唯一のアイデンティティとしか認めず、結局個人の自由を無視したからである。

#### 2 善と均衡をめぐる村上春樹の葛藤

『1Q84』は徹底したカルトと対抗する小説とも言えらるだろうが、対抗しながらも「こちら側」(善)と「あちら側」(悪)を必ずしも二項対立にするわけではない。例え悪の存在であっても自分独自の「物語」を語る権利がある。更に、「あちら側」を絶対的な「悪」にすること自体が執念である。ここから善と悪の境目をくっきりつけない故に善と悪を曖昧化したり、悪を善に美化したりしようとする村上春樹の葛藤が生み出されたほか、読者にとっても行き届いてない理念の矛盾が生み出されたと言えらるのではないだろうか。老婦人の「消失」はその例である。

<sup>104</sup>毎日新聞インタビュー、2008.5.12

<sup>105</sup>村上春樹『目印のない悪夢』講談社文庫 1999

老婦人が中心になった反 DV グループは『1Q84』の中でどのような役割を果たしたのだろうか。老婦人はセーフハウスを設立した。夫に暴力の被害を受けた女性たちがそこで慰め合い、門の近くに雌のドイツ・シェパードが繋がり、男が近寄ると激しく吠えるようにしつけられた「現実の世界と死後の世界の間」にある場所であった。完全に男を排斥する場所であった。老婦人は自分の力で男を排除した世界を強引に作り上げた。そこに住み着く女性たちは老婦人に無限の敬意を払っていた。彼女たちは老婦人の信徒とも言えよう。DV 被害者を保護する為に、老婦人は DV 施行者を殺すという極端な行為をとった。老婦人は青豆に DV 施行者の罪を並べ立てて、これら「ネズミ野郎」を殺すように言いつけた。人殺しに不安を持つ青豆に老婦人は「あなたは正しいことをしたのです」<sup>106</sup>「あなたは自分を損なうようなことは何もしていない。何一つ」<sup>107</sup>のような言葉を繰り返して彼女を慰めた。老婦人の作った世界は家庭内暴力を施す男性を殺しても正しいという世界である。オウム真理教で例えると、青豆は林泰男たちと同じ役割を果たしている。尖った先端で人を死に送る。暴力の目に遭った女性と子どもたちを救う、これは正義ではあるが、唯一の正義と見られて、これの為に「何かのために血にまみれて闘う攻撃的」になれば、人の精神を構いこむ偏狭な宗教になり、カルトに成り切っただろう。戦争や「さきがけ」、老婦人を繋いで見れば、『1Q84』の反カルト意味は明確である。反 DV を唯一の正義のように思う老婦人も批判されているのではないだろうか。小説の最後、青豆は天吾から暴力以外の精神つまり他人からの愛を獲得し、老婦人の身から離れた。積極的で行動力のあるヒロインは、やがて草食系の男性主人公によって小説で山姥から救い出されるといふ「山姥退治」の物語に収斂している。

しかしこれは村上春樹の作品における構造に過ぎなくて、周知のように「反家庭内暴力」を行う必要性はある。そして麻原彰晃をモデルにした教主をある程度合理化し、老婦人の悪の一面を描くのはジェンダーを前提として性別分担の価値観によるものだと考えられる。『1Q84』は現存の制度から周縁化されている家庭内暴力の被害者という他者へ関心を寄せ、老婦人という今まで村上春樹の作品世界で新しい表象を試みたが、善と悪の境目を曖昧化しすぎた末に、老婦人を「消失」させた。他者やジェンダーの視点から見ると、家庭内暴力と老女表象の問題は未解決のまま残っている。

老婦人の消失は村上春樹の陋習の一つと言える。麻原彰晃<sup>108</sup>をモデルにした教主をある程度合理化し、老婦人の悪の一面を描くのはジェンダーを前提として性別分担の価値観によるものだと考えられる。『1Q84』は現存の制度から周縁化されている家庭内暴力の被害者という他者へ関心を寄せ、老婦人という今まで村上春樹の作品世界で新しい表象を試みたが、善と悪の境目を曖昧化しすぎた末に、第三部では老婦人を「消失」させた。家庭内暴力と老女表象の問題は未解決のまま残っており、『1Q84』から村上春樹の正義に対する曖昧さが見られる。

家庭内暴力に挑むという壮大なスケールで老婦人と若い女性を登場させ、二人を中心に作品を展開しながら、第三部では老女を作品世界から追放して、狂信的集団と反 DV をカルトの名で同一視し、天吾と青豆のロマンスの成就という安易な結末をつけている。村上春樹の中のエイジズムや女

<sup>106</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK 1 P388

<sup>107</sup>村上春樹『1Q84』新潮社 2009.05 BOOK 1 P291

<sup>108</sup> 2018年7月6日、6名の信徒と共に処刑された

性の性役割への固定観念に回帰する結果となっており、従来の村上ワールドから脱出する予感を持たせながら、果たすことはできなかつたことは惜しまれる。

## 結語

本論は中国人留学生という論者の個人経歴から出発しながら、中国人表象と女性表象を中心に、村上春樹の描いた他者表象というテーマについて、他者から村上春樹の作品を理解する新しい視点を提供しようとするものである。

そのため、本論は「村上春樹における中国表象」と「村上春樹における女性表象」という二部に分けて論じた。

まずは村上春樹における中国表象である。

第一章で『羊をめぐる冒険』のなかの「羊」の表象を先行研究に踏まえながら解説した上で、中国のイメージが「羊」の表象に含まれていることを明らかにした。『羊をめぐる冒険』については多様に研究されてきて、今までの「羊」表象についての解釈をまとめたい。また、「羊」の背後に中国が隠されたことを指摘し、中国が他の集団のように村上春樹の作品において矮小化され、個人の自由の妨げのように描かれたことを批判したい。この章はテキストに基づき、夏目漱石『三四郎』を連想しながら羊の意味と羊のふるさとという二部に分けて展開している。

第二章で村上春樹の初短編小説『中国行きのスロウ・ボート』において登場した中国人を論じた。その中国人は大陸部に生活する中国人ではなくて在日中国人であることはすでに指摘されていた。それに基づき、この章は今まで論じられなかった『中国行きのスロウ・ボート』で登場した中国人小学校の先生、中国人女子大生、高校時代の中国人クラスメート三人の中国人の心理状態を分析した。20世紀80年代の始め、村上春樹は日本を生きる在日中国人の生き方とアイデンティティを先見的に描写したことを評価したい。

第三章で初期三部作において登場した「ジェイ」という中国人の脇役を分析した。「ジェイ」は今までの研究であまり論じられていなかったが、三部作の三作目『羊をめぐる冒険』の最後に「僕」は「ジェイ」を思い出し、彼を寛容的で暖かい存在だと思ふシーンがある。それは「ジェイ」が日本と中国・アメリカとアジアの戦争史に挟まれた経験があり、戦争から生き残ったジェイは多国の人間に理解と共感を持ち始め、国籍を超えて「僕」と鼠の家族になったからではないかと思う。移動のなか、ジェイは複合したアイデンティティの代表になっているのではないかと考えられる。

また村上春樹における女性表象である。

第四章で『1Q84』に登場した青豆という登場人物を中心に論じていた。青豆は受動的なヒロインと違い、積極的に行動を取るヒロインである。彼女は偏狭な宗教と家族から脱出し、親友の復讐のために殺人まで行った。また家庭内暴力と戦うため暴力を振るい、宗教のリーダーと最終戦を行った。しかし、結局青豆は自殺によって再生し、家庭のなかに回収された。今までの村上春樹作品のなかの女性登場人物と違った色彩を持ったはずのヒロインの「消失」は村上春樹の他者視点の不徹底の表れとしか言えないだろう。

第五章で『1Q84』に登場したふかえりという美少女ふかえりを中心に論じた。サブカルチャーを連想できるふかえりは『1Q84』において性的描写や身体描写が不自然さが多いものとなっている。ふかえりは実に父に性的被害を受けたが、意識的に復讐することなく、作品中では「母」や「愛と

理解をもたらす」役割を果たしていただけた。ふかえりの身から、村上春樹の女性をリアリティに反してまでも性的相手にする傾向が強く見られる。

第六章で『1Q84』に登場した老婦人という登場人物を中心に論じた。村上春樹は若者を主な読者に想定して、若者を中心に作品を創作してきたと言えるが、『1Q84』の中に、脇役ではあるが、重要な老女像を作り上げた。この老婦人はリーダーとして反家庭内暴力と戦った。現代システムから自由な居場所へ移動し、規範的な女性のアイデンティティから解放された老女のように意味づけられた。しかし、反カルトをテーマにする村上春樹は結局老婦人の精神をカルト的に描き、「消失」させた。老婦人の消失から善と悪の境目を曖昧化しすぎた村上春樹の精神がうかがえるだろう。

以上の検討によって村上春樹における他者表象には様々な問題が内包されていることが指摘できるが、中国、女性という他者表象において現代の問題をテキスト内に先鋭に取り込み、新たな他者性の表現空間を創り出していることは疑いようがない。

グローバル時代において、村上春樹を読むことによって移動や変動する人たちが言葉の境界を越えて共通するイデオロギーを持ち始め、結局は自己と他者の輪郭が緩め共通するアイデンティティを共有できるに至ることも少なくないだろう。ここに村上春樹の意義があり、世界で読まれる理由でもあるだろう。

今後の課題としては、村上春樹の中の中国表象と女性表象を論じ続けていることである。

- 一、 村上春樹『アフターダーク』は、日本人でありながら中国人小学校で育った女子大生が登場し、密航した暴力を受けた在日中国人女性を助けたことによって展開された物語である。『アフターダーク』の分析により、国を超えた村上春樹の中の女性同士の繋がりを考察しながら、抑圧された在日中国人女性に注目したい。
- 二、 『騎士団長殺し』に登場した少女秋川まりえは今までの村上春樹における少女と同じ、性的対象として描かれた。村上春樹における少女表象を批判しながら、フェミニズム文学批評の先行研究を踏みながら女性作家における少女表象と比較しながら論じたい。
- 三、 『1Q84』において、現代フェミニズム文学批評により再解釈された「山姥」表象と類似性を持つ老女が登場し、年をとって社会から周縁化されたからこそ、既存の制度によって晴らすことのできない暴力と戦闘表象を作り上げた。村上春樹の場合は中途半端で終わったが、このような他者による認識と戦闘精神を文学作品の世界でさらに探したい。
- 四、 夏目漱石から村上春樹まで、中国は日本作家の作品によって描かれつつあった。日本文学作品における中国表象の変遷を明らかにしたい。

以上のように、この論文は主に村上春樹の『中国行きのスロウ・ボート』『風の歌を聴け』『1973年のピンボール』『羊をめぐる冒険』『1Q84』という五作を中心に、中国表象と女性表象をはじめとした他者表象を論じてきたが、これからは文学における他者表象をテーマに研究をさらに続けたい。

## 参考文献

### I 研究著書

#### 一、村上春樹研究と近代日本文学

- 村上龍他著『村上春樹：シーク&ファインド』青銅社 1986. 07
- 鈴木和成『未だ/既に：村上春樹と「ハードボイルド・ワンダーランド」』洋泉社 1986. 08
- 笠井潔他著『村上春樹をめぐる冒険：対話篇』河出書房新社 1991. 06
- 久居つばき くわ正人『象が平原に還った日：キーワードで読む村上春樹』新潮社 1911. 11
- 千石英世『アイロンをかける青年：村上春樹とアメリカ』彩流社 1991. 11
- 横尾和横『村上春樹の二元的世界』鳥影社 1992. 07
- 黒古一夫『村上春樹：ザ・ロスト・ワールド』第三書館 1993. 05
- 鈴木和成『村上春樹クロニクル：1983-1995』洋泉社 1994
- 横尾和博『村上春樹×九〇年代』第三書館 1994. 5
- 久居つばき『ねじまき鳥の探し方：村上春樹の種あかし』太田出版 1994. 06
- 河合隼雄 村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』岩波書店 1996. 12
- 小林正明『村上春樹論：フロイト・ラカンを基軸として』青山学院女子短期大学学芸懇話会  
1997. 3
- 吉田春生『村上春樹、転換する』彩流社 1997. 11
- 加藤典洋編『村上春樹：イエローページ 作品別(1979~1996)』荒地出版社 1997
- 小林正明『村上春樹・塔と海の彼方に』森話社 1998
- 久居つばき『ノンフィクションと華麗な虚偽：村上春樹の地下世界』マガジンハウス 1998
- 石倉美智子『村上春樹サーカス団の行方』専修大学出版局 1998
- 木股知史編『村上春樹』若草書房 1998
- 栗坪良樹 柘植光彦編『村上春樹スタディーズ』1-4 若草書房 1999
- 村上ワールド研究会『村上春樹イエロー辞典：アーティスト解体新書』アートブック本の森  
1999
- 井上義夫『村上春樹と日本の「記憶」』新潮社 1999
- 村上春樹研究会編『村上春樹作品研究事典』鼎書房 2001
- 酒井英行『村上春樹分身との戯れ』翰林書房 2001
- 平野芳信『村上春樹とく最初の夫の死ぬ物語』翰林書房 2001
- 林正『村上春樹論：コミュニケーションの物語』専修大学出版局 2002
- 渡辺新一『中国に入った日本文学の翻訳のあり方：夏目漱石から村上春樹まで』中央大学  
2002
- 三浦雅士『村上春樹と柴田元幸のもうひとつのアメリカ』新書館 2003
- 酒井英行『「ノルウェイの森」の村上春樹』沖積舎 2004
- 舘野日出男『ロマン派から現代へ：村上春樹、三島由紀夫、ドイツ・ロマン派』鳥影社 2004
- 鈴木和成『村上春樹とネコの話』彩流社 2004

- 柄谷行人『柄谷行人集』 第5巻（歴史と反復） 岩波書店 2004
- 今井清人編『村上春樹スタディーズ2000-2004』 若草書房 2005
- 宮脇俊文『村上春樹ワンダーランド』 いそっぷ社 2006
- 大塚英志『村上春樹論：サブカルチャーと倫理』 若草書房 2006
- 小森陽一『村上春樹論：『海辺のカフカ』を精読する』 平凡社 2006
- 加藤典洋『村上春樹：イエローページ』1-3 幻冬舎 2006
- 川本三郎『村上春樹論集成』 若草書房 2006
- 清水良典『村上春樹はくせになる』 朝日新聞社 2006
- 風丸良彦『越境する「僕」：村上春樹、翻訳文体と語り手』 試論社 2006
- 川村湊『村上春樹をどう読むか』 作品社 2006
- 佐藤幹夫『村上春樹の隣には三島由紀夫がいつもいる。』 PHP 研究所 2006
- 柴田元幸 沼野充義 藤井省三 四方田犬彦編『世界は村上春樹をどう読むか：a wild Haruki chase』 文藝春秋 2006
- 塩濱久雄『村上春樹はどう誤訳されているか：村上春樹を英語で読む』 若草書房 2007
- 岩宮恵子『思春期をめぐる冒険：心理療法と村上春樹の世界』 新潮社 2007
- 坪内祐三『アメリカ：村上春樹と江藤淳の帰還』 扶桑社 2007
- 石原千秋『謎とき村上春樹』 光文社 2007
- 酒井英行他著『『ダンス・ダンス・ダンス』 解体新書：座談会村上春樹』 沖積舎 2007
- 内田樹『村上春樹にご用心』 アルテスパブリッシング 2007
- 村上春樹研究会編『村上春樹作品研究事典』 鼎書房 2007
- 風丸良彦『村上春樹短篇再読』 みすず書房 2007
- 黒古一夫『村上春樹：「喪失」の物語から「転換」の物語へ』 勉誠出版 2007
- 山崎眞紀子『村上春樹の本文改稿研究』 若草書房 2008
- 明里千章『村上春樹の映画記号学』 若草書房 2008
- 酒井英行他著『村上春樹を語る：世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 沖積舎 2008
- 柘植光彦編『村上春樹：テーマ・装置・キャラクター』 至文堂 2008
- 宇佐美毅 千田洋幸編『村上春樹と一九八〇年代』 おうふう 2008
- 松本誠『村上春樹研究—その暴力表象について』 博士論文 2008
- 河出書房新社編集部編『村上春樹『1Q84』をどう読むか』 河出書房新社 2009
- 竹内清己『村上春樹・横光利一・中野重治と堀辰雄：現代日本文学生成の水脈』 鼎書房 2009
- 『1Q84 スタディーズ』1-2 若草書房 2009-2010
- 土居豊『村上春樹を読むヒント』 ロングセラーズ 2009
- とよだもとゆき『村上春樹と小阪修平の1968年』 新泉社 2009
- 村上春樹研究会編『村上春樹の「1Q84」を読み解く』 データハウス 2009
- 鈴村和成『村上春樹・戦記：『1Q84』のジェネシス』 彩流社 2009

- 大塚英志『物語論で読む村上春樹と宮崎駿：構造しかない日本』角川書店 2009
- 鈴木智之『村上春樹と物語の条件：『ノルウェイの森』から『ねじまき鳥クロニクル』へ』  
青弓社 2009
- 柴田元幸他著『代表質問：16のインタビュー』新書館 2009
- 風丸良彦『村上春樹〈訳〉短篇再読』みすず書房 2009
- 空気さなぎ調査委員会『村上春樹「1Q84」の世界を深読みする本』ぶんか社 2009
- 柴田勝二『中上健次と村上春樹：〈脱六〇年代〉的世界のゆくえ』東京外国語大学出版会 2009
- 土居豊『村上春樹のエロス』ロングセラーズ 2010
- 宮脇俊文『村上春樹を読む。：全小説と作品キーワード』イースト・プレス 2010
- 市川真人『芥川賞はなぜ村上春樹に与えられなかったか：擬態するニッポンの小説』幻冬舎  
2010
- 平居謙『村上春樹小説案内：全長編の楽しみ方』双文社出版 2010
- 黒古一夫『戦争・辺境・文学・人間：大江健三郎から村上春樹まで：黒古一夫書評集』勉誠  
出版 2010
- 柘植光彦『村上春樹の秘密：ゼロからわかる作品と人生』アスキー・メディアワークス 2010
- 内田樹『もういちど村上春樹にご用心』アルテスパブリッシング 2010
- 平居謙『村上春樹の「1Q84 BOOK3」大研究』データハウス 2010
- 松本健一『村上春樹：都市小説から世界文学へ』第三文明社 2010
- 芳川泰久『村上春樹とハルキムラカミ：精神分析する作家』ミネルヴァ書房 2010  
『ユリイカ』臨増 42 (15) (通号 590) 2011. 01
- 柴田勝二『村上春樹と夏目漱石：二人の国民作家が描いた〈日本〉』祥伝社 2011
- 河合俊雄『村上春樹の「物語」：夢テキストとして読み解く』新潮社 2011
- 谷崎龍彦『村上春樹『1Q84』の性表出：BOOK 1のパラフレーズ』彩流社 2011
- 清真人『村上春樹の哲学ワールド：ニーチェ的長編四部作を読む』はるか書房 2011
- 波瀬蘭『村上春樹超短篇小説案内：あるいは村上朝日堂の16の超短篇をわれわれはいかに読  
み解いたか』学研パブリッシング 2011
- 酒井英行 堀口真利子『村上春樹『ノルウェイの森』の研究』沖積舎 2011
- 今井清人編『村上春樹スタディーズ 2008-2010』若草書房 2011
- 尾高修也『近代文学以後：「内向の世代」から見た村上春樹』作品社 2011
- 平野芳信『村上春樹：人と文学』勉誠出版 2011
- 日本近代文学会関西支部編『村上春樹と小説の現在』和泉書院 2011
- 平野芳信『村上春樹と《最初の夫の死ぬ物語》』翰林書房 2011
- 石原千秋 亀山郁夫 三浦雅士 藤井省三 加藤典洋 菅野昭正編『村上春樹の読みかた』平凡社  
2012
- 土居豊『ハルキとハルヒ：村上春樹と涼宮ハルヒを解説する』大学教育出版 2012
- 福田和也『村上春樹12の長編小説：1979年に開かれた「僕」の戦線』廣済堂出版 2012



小山鉄郎『空想読解なるほど、村上春樹』共同通信社 2012  
 重里徹也 三輪太郎『村上春樹で世界を読む』祥伝社 2013  
 吉岡栄一『村上春樹とイギリス：ハルキ、オーウェル、コンラッド』彩流社 2013  
 細谷博『所与と自由：近現代文学の名作を読む』勉誠出版 2013  
 浅利文子『村上春樹物語の力』翰林書房 2013  
 徐忍宇『村上春樹：イニシエーションの物語』花書院 2013  
 黒古一夫『文学者の「核・フクシマ論」：吉本隆明・大江健三郎・村上春樹』彩流社 2013  
 大川隆法『村上春樹が売れる理由：深層意識の解剖』幸福の科学出版 2013  
 鈴木和成『紀行せよ、と村上春樹は言う』未来社 2014  
 小谷野敦『病む女はなぜ村上春樹を読むか』ベストセラーズ 2014  
 湯川豊 小山鉄郎『村上春樹を読む午後』文藝春秋 2014  
 黒古一夫『村上春樹批判』アーツアンドクラフツ 2015  
 加藤典洋『村上春樹は、むずかしい』岩波書店 2015  
 清水良典『村上春樹はくせになる』朝日新聞出版 2015  
 大森望 豊崎由美著『村上春樹「騎士団長殺し」メッタ斬り!』河出書房新社 2017

## 二、フェミニズム文学批評

駒尺喜美『魔女的文学論』三一書房 1982. 7  
 E. アン・カプラン著 水田宗子訳『フェミニスト映画：性幻想と映像表現』田畑書店 1985  
 浅野美和子他編『リブの台頭：1970～1972』BOC 出版部 1987. 12  
 水田宗子『フェミニズムの彼方：女性表現の深層』講談社 1991  
 リサ・タトル著 渡辺和子監訳『フェミニズム事典』明石書店 1991. 07  
 上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子『男流文学論』筑摩書房 1992. 01  
 水田宗子『ヒロインからヒーローへ：女性の自我と表現』田畑書店 1992  
 水田宗子『物語と反物語の風景：文学と女性の想像力』田畑書店 1993  
 井上輝子 上野千鶴子 江原由美子編『リブとフェミニズム』岩波書店, 1994. 11  
 大庭みな子 水田宗子『〈山姥〉のいる風景：対談』田畑書店 1995  
 女たちの現在を問う会編集『全共闘からリブへ』インパクト出版会 1996. 7  
 水田宗子 北田幸恵 長谷川啓編『母と娘のフェミニズム：近代家族を超えて』田畑書店  
 1996  
 水田宗子『ことばが紡ぐ羽衣：女たちの旅の物語』思潮社 1998  
 ヴァージニア・ウルフ著 川本静子訳『自分だけの部屋』みすず書房 1999. 4  
 ソニア・アマンダマール キャロル・ウォルコウイツ テリー・ロヴェル著 檜村愛子 金子珠理訳『現代フェミニズム思想辞典』明石書店 2000. 03  
 斎藤環著『戦闘美少女の精神分析』太田出版 2000  
 ボーヴォワール著『第二の性』を原文で読み直す会訳『第二の性』新潮文庫 2001

- 水田宗子 北田幸恵編『山姥たちの物語：女性の原型と語りなおし』學藝書林 2002
- 日本婦人団体連合会『雇用と女性、戦争と女性』ほるぷ出版 2002. 8
- 加納実紀代責任編集『リブという「革命」：近代の闇をひらく』インパクト出版会 2003. 12
- 高橋準『ファンタジーとジェンダー』青弓社 2004
- 根本萌騰子『文学の中の女性：擬態か反抗かー『源氏物語』から村上春樹まで』近代文芸社 2005
- 大越愛子 井桁碧編『戦後思想のポリティクス』青弓社 2005
- 岩淵宏子北田幸恵編『はじめて学ぶ日本女性文学史 近現代篇』ミネルヴァ書房 2005
- 王宇『性別表術与現代認同一索解 20 世紀後半葉中国的叙事文本』上海三聯書店 2006. 03
- 西村光子『70 年代ウーマンリブを再読する』社会評論社 2006. 11
- 北田幸恵『書く女たち：江戸から明治のメディア・文学・ジェンダーを読む』學藝書林 2007
- 金井淑子編『身体とアイデンティティ・トラブル：ジェンダー/セックスの二元論を超えて』明石書店 2008. 5
- 渡辺みえこ『語り得ぬもの 村上春樹の<sup>レズビアン</sup>女性表象』御茶の水書房 2009. 06
- 天野正子他編『新編日本のフェミニズム 11 (フェミニズム文学批評)』岩波書店 2009
- 斎藤美奈子 天野正子 井上輝子 伊藤公雄 伊藤るり 上野千鶴子 江原由美子 大沢真理 加納実紀代『フェミニズム文学批評』岩波書店 2009
- 倉田容子『語る老女語られる老女：日本近現代文学にみる女の古い』學藝書林 2010. 2
- 田中美津『いのちの女たちへ：とり乱しウーマン・リブ論』パンドラ 現代書館 2010. 5
- 『文學界』特集 64 (7) 2010. 07
- 上野千鶴子『〈おんな〉の思想：私たちは、あなたを忘れない』集英社インターナショナル 2013
- 山崎眞紀子『村上春樹と女性、北海道…。』彩流社 2013
- 森本隆子『〈崇高〉と〈帝国〉の明治：夏目漱石論の射程』ひつじ書房 2013
- 水田宗子『大庭みな子記憶の文学 = Minako Oba; Literature of Memory』平凡社 2013
- 土居豊『いま、村上春樹を読むこと』関西学院大学出版会 2014
- 米村みゆき編『村上春樹表象の圏域：『1Q84』とその周辺』森話社 2014
- 水田宗子編『家父長制とジェンダー』城西大学出版会 2014
- 水田宗子編『文学批評女性と表現女性作家と語る』城西大学出版会 2014
- 水田宗子編『外地と表現』城西大学出版会 2015
- 飯田祐子『彼女たちの文学』名古屋大学出版会 2016

### 三、村上春樹と他者

- ディディエ・フランク著 米虫正巳 服部敬弘訳『他者のための一著：レヴィナスと意義』法政大学出版局 2015. 10
- 永野武著『在日中国人：歴史とアイデンティティ』明石書店 1994
- クラウド P. ケピング著 松戸行雄編訳『他者へのまなざし：異文化理解のための比較文化論』新泉社 1998. 9

- 浦澄彬『村上春樹を歩く：作品の舞台と暴力の影』彩流社 2000
- ガヤトリ・C・スピヴァック著 鈴木聡他訳『文化としての他者』復刊版 紀伊国屋書店  
2000.6
- 吉田春生『村上春樹とアメリカ：暴力性の由来』彩流社 2001
- 渡辺新一『中国に入った日本文学の翻訳のあり方：夏目漱石から村上春樹まで』文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書 2005.03
- 柴田元幸 沼野充義 藤井省三 四方田犬彦 編『世界は村上春樹をどう読むか：a wild Haruki chase』文藝春秋 2006
- 三井善止『他者のロゴスとパトス』玉川大学出版部 2006.10
- ジェイ・ルービン著 畔柳和代訳『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』新潮社 2006
- 藤井省三『村上春樹のなかの中国』朝日新聞社 2007.07
- 須藤隆仙著『世界宗教用語大事典』コンパクト版 新人物往来社 2007.09月15日
- ビル・アッシュクロフト ガレス・グリフィス ヘレン・ティフィン著 木村公一編訳『ポストコロニアル事典』南雲堂 2008.08
- 藤井省三編『東アジアが読む村上春樹：東京大学文学部中国文学科国際共同研究』若草書房 2009
- アマルティア・セン著 大門毅 東郷えりか 訳『アイデンティティと暴力 運命は幻想である』勁草書房 2011.07
- 本田和子『女学生の系譜・増補版』青弓社 2012.09
- 神田由美子 高橋龍夫編『渡航する作家たち』翰林書房 2012
- 王海藍『村上春樹と中国』アーツアンドクラフツ 2012
- 思想の科学研究会編『新版哲学・論理用語辞典』新装版 三一書房 2012.05
- 三宅晶子編『文化における想起・忘却・記憶』千葉大学大学院人文社会科学研究所, 2014.02
- 池内輝雄 木村一信 竹松良明 土屋忍編『〈外地〉日本語文学への射程』双文社出版 2014.03
- 柴田勝二 加藤雄二編『世界文学としての村上春樹』東京外国語大学出版会 2015
- 藤井省三『魯迅と日本文学：漱石・鷗外から清張・春樹まで』東京大学出版会 2015
- 内藤千珠子『愛国の無関心：「見えない他者」と物語の暴力』新曜社 2015
- 小林敏明『柄谷行人論：〈他者〉のゆくえ』筑摩書房 2015
- 華僑華人の事典編集委員会『華僑華人の事典』2017.12.1

## II 記事

- 一、「中国行きスロウ・ボート」について
- 田中実「港のない貨物船―「中国行きのスロウ・ボート」」『国文学：解釈と鑑賞』  
1990.12

- 平野芳信「『貧乏な叔母さんの話』—『中国行きのスロウ・ボート』所収—物語のかたちをした里程碑(マイルストーン)」『国文学：解釈と教材の研究』1998.02
- 柴田元幸『生半可な漂流者(31)中国行きのスロウボート』『大航海：歴史・文学・思想』2000.02
- 山根由美恵「村上春樹「中国行きのスロウ・ボート」論—対社会意識の目覚め」『国文学攷』2002.03
- 吉川良太郎「『中国行きのスロウ・ボート』は、どこへ着いたのか?」『ユリイカ』2004.04
- 藤井省三「村上春樹のなかの中国を読む(2)「中国」への背信と原罪—「中国行きのスロウ・ボート」論」『UP』2006.06
- 加藤典洋「村上春樹の短編を英語で読む(第3回)「無謀な姿勢」はどこから来るか—「中国行きのスロウ・ボート」—初期短編の世界(その2)」『群像』2009.11
- 浅利文子「村上春樹の中国—『中国行きのスロウ・ボート』という視点から」『異文化』2010.04
- 石城正志「教科書教材としての「中国行きのスロウ・ボート」」『研究紀要』2011.12
- 徐子怡「中国における村上春樹「中国行きのスロウ・ボート」の受容：「豆瓣網」ユーザーとしての中国人読者に対する読書調査」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』2015.01
- 津久井秀一「村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』試論：〈非正規〉な記憶への「放浪」あるいは「冒険」」『宇大国語論究』2015.11

## 二、『羊をめぐる冒険』について

- 日野啓三 佐伯彰一 佐々木基一「創作合評村上春樹『羊をめぐる冒険』」『群像』37巻9号 1982.09
- 川本三郎「村上春樹をめぐる解説」『文学界』36巻9号 1982.09
- 鮎川信夫「若い世代の感性」『週刊文春』1982.11
- 生井英考『村上春樹と黄金の羊』『ユリイカ』15巻12号 1983.12
- 村上春樹「受賞のことば」『群像』38巻1号 1983.01
- 「第四回野間文芸新人賞の決定—村上春樹『羊をめぐる冒険』」『群像』38巻1号 1983.01
- 加藤典洋「自閉と鎖国—一九八二年の風の歌—村上春樹『羊をめぐる冒険』」『文芸』河出書房新社22巻2月 1983.02
- 幻想文学企画室「村上春樹羊をめぐる冒険〇ぼくらのモダン・ファンタジー」『幻想文学』1983.04
- 桂秀実「折り返された「未来」」『すばる』5巻7号 1983.07
- 関井光男「村上春樹論：〈羊〉はどこへ消えたか」『国文学』30(3) 1985.03
- 磯田光一「左翼がサヨクになるとき—7—“政治と文学”論争以後40年—立松和平・村上春樹の位置」『すばる』8巻5号 1986.05
- 柄谷行人「村上春樹の『風景』」『海燕』8巻12号 1989.12

- 玉置邦雄「村上春樹『羊をめぐる冒険』論：〈都市小説〉への志向」『人文論究』46巻1号  
—2号 1996年5月—9月
- 太田鈴子「村上春樹『羊をめぐる冒険』における〈暴力〉」『学苑』683号 1997.01
- 坪井秀人「プログラムされた物語——『羊をめぐる冒険』論」『国文学：解釈と教材の研究』  
43巻3号 1998.02
- 清水良典「1982『羊をめぐる冒険』——作家「鼠」の死」『ユリイカ』32巻4号（通号429）  
2000.03
- 上田穂積「物語の起源——村上春樹『羊をめぐる冒険』についての一考察」『徳島文理大学  
比較文化研究所年報』19号 2003.03
- 徳永直彰「村上春樹作品におけるキリスト教的表象——『羊をめぐる冒険』『ノルウェイの森』  
を中心に」『埼玉大学紀要（教養学部）』43巻1号 2007
- 柴田勝二「受動的冒険——『羊をめぐる冒険』と〈漱石〉の影」『東京外国語大学論集』74  
号 2007
- 松枝誠「『羊をめぐる冒険』論：北海道から満州、そして戦後」『論究日本文学』86号2007  
.05
- 岡野進「ムラカミ・ハルキについて語るときに私たちが語ること：『羊をめぐる冒険』：ムラ  
カミ・ハルキと政治小説について」『言語文化論究』29号 2012
- 柿崎隆宏「作家としての冒険：村上春樹『羊をめぐる冒険』論」『九大日文』20号 2012  
.10
- 勝原晴希「遠く離れた場所で：村上春樹『羊をめぐる冒険』を読む」『国語と国文学』91巻8  
号（通号1089号）2014.08

### 三、『1Q84』について

- 島田裕巳「村上春樹『1Q84』」『小説 tripper：トリッパー』2009
- 福田和也「現代人は救われ得るか 村上春樹『1Q84』（前篇と後編）」『新潮』106(8)  
2009年08月～09月
- 河合俊雄「村上春樹『1Q84 BOOK1～3』」『小説 tripper：トリッパー』2010
- 池田雄一。「うんざり」するけど無視できない——「村上春樹なるもの」の不思議」『金曜日』  
17(49)（通号795）2009.10
- 池田雄一。「うんざり」するけど無視できない——「村上春樹なるもの」の不思議」『金曜日』（特  
集「ベストセラー」にだまされるな。『1Q84』）17(49)（通号795）
- 武田浩「状況2009 秋 文学 村上春樹『1Q84』と「ゼロ年代」風土」『社会評論』（159）2009
- 青木陽子「村上春樹『1Q84』を読む」『季論21：intellectual and creative』『季論21』  
(6) 2009
- 塩田勉「村上春樹『1Q84』を読み解く—連想複合の文体論的解明」『Waseda global forum』  
(6) 2009

- 佐藤優「ナショナリズムという病理(第32回)『1Q84』とニライ・カナイ」『創』 39(9) (通号 438) 2009
- 香山リカ「『こころの時代』解体新書 80年代とは無縁の『1Q84』」『創』 39(9) (通号 438) 2009
- 鈴木力 町井孝「新潮社担当者が語った出版の舞台裏 村上春樹『1Q84』の驚異的な売れ方」『創』 39(9) (通号 438) 2009
- 村上春樹「『1Q84』バカ売れに見る“カリスマ待望論”」『週刊ポスト』(シリーズ:スクープ・ワイド この人たちの『ムシムシの夜』)41(25) (通号 2029) 2009.06
- 伊東武彦「小説 村上春樹『1Q84』秘密作戦で100万部—5年間書き下ろしなしで渴望感、小川洋子が読む「現世界への諦観と希望」」『Aera』 22(27) (通号 1169) 2009.06
- 「BOOKS 熟読・斜読・積読 ソフトな混沌に満ちた時代をシンプルに描く難解な物語 『1Q84 BOOK1・2』村上春樹-著」『Verdad』 15(7) (通号 171) 2009.07
- 「早川死刑 オウムウォッチャーは『1Q84』をこう読んだ」『週刊文春』 51(29) (通号 2537) (特集:人物ワイド 沈まぬ太陽) 2009.07
- 島崎英威「海外出版レポート 中国 『1Q84』と中国」『出版ニュース』 (通号 2184) 2009.08
- 西脇英夫 勝田友巳「映画で振り返る 1960年代後半～1Q84年」『キネマ旬報』 (1539) (特集:『1Q84』と映画で考える、変わりゆく社会) 2009.08
- 小浜逸郎「1968と1984の精神史」『キネマ旬報』 (1539) (特集:『1Q84』と映画で考える、変わりゆく社会) 2009.08
- 沼野充義「読み終えたらもう2000年の世界」『文學界』 63(8) (特集 村上春樹『1Q84』を読み解く—謎と刺激に満ちた七年ぶりの大作を、四人の論者が四つの視角から読む) 2009.08
- 安藤礼二 苅部直 松永美穂 他 座談会「村上春樹『1Q84』をとことん読む」『群像』 64(8) (特集 ムラカミハルキを10倍楽しむ) 2009.08
- 小山鉄郎「温かい日本茶を飲むまでに—『1Q84』を読む」『群像』 64(8) (特集 ムラカミハルキを10倍楽しむ) 2009.08
- テーミス編「村上春樹『1Q84』絶賛の声に疑問あり—ノーベル賞候補がたんなるポルノ小説とも」『Themis』 18(8) (通号 202) 2009.08
- 藤井省三「『1Q84』の中の「阿Q」の影—魯迅と村上春樹」『文學界』 63(8) (特集 村上春樹『1Q84』を読み解く—謎と刺激に満ちた七年ぶりの大作を、四人の論者が四つの視角から読む) 2009.08
- 福田和也「現代人は救われ得るか(前篇) 村上春樹『1Q84』」『新潮』 106(8) 2009.08
- 清水良典「〈父〉の空位」『文學界』 63(8) (特集 村上春樹『1Q84』を読み解く—謎と刺激に満ちた七年ぶりの大作を、四人の論者が四つの視角から読む) 2009.08
- 加藤典洋「「桁違い」の小説」『文學界』 63(8) (特集 村上春樹『1Q84』を読み解く—謎と刺激に満ちた七年ぶりの大作を、四人の論者が四つの視角から読む) 2009.08
- 村上春樹『1Q84』を読み解く—謎と刺激に満ちた七年ぶりの大作を、四人の論者が四つの視角

- から読む 『文學界』 63(8) 2009.08
- 佐藤洋二郎「村上春樹『1Q84』は本当に面白いのか」『正論』(通号 450) 2009.08
- 安藤礼二「王国の到来—村上春樹『1Q84』」『新潮』106(9) 2009.08
- 加藤典洋「村上春樹の短編を英語で読む(第1回)「井戸」の消滅—『ねじまき鳥クロニクル』と『1Q84』」『群像』64(9) 2009.08
- 福田和也「現代人は救われ得るか—村上春樹『1Q84』(前篇と後篇)『新潮』106(9) 2009年8月～09月
- 乙部宗徳 新船海三郎 三木朋子他 座談会「村上春樹『1Q84』を巡って」『民主文学』(529)(通号 579) 2009.08
- 小野瞭「村上春樹『1Q84』—「ハルキ・ワールド」が示す「展望なき未来」」『季報唯物論研究』(110)(特集 この一冊(part 1)) 2009.08
- 松本健一「村上春樹『1Q84』を読み解く」『第三文明』(通号 600) 2009.08
- 小畑精和「『1Q84』はエンタテインメントだ」『現代の理論』25(特集:日本の近現代史を問う)2010
- 中村三春「中村三春のテキスト文芸学(第1回)村上春樹『1Q84』論(Book1・Book2)—歴史の書き換え、物語の毒」『iichiko: quarterly intercultural: a journal for transdisciplinary studies of pratiques』(106) 2010
- 趙立男「村上春樹『1Q84』における「父親像」について:—主人公天吾を中心に—」『アジア文化研究』17(17) 2010
- John Brown「1984 and 1Q84」『共通教育センター紀要』(3) 2010
- やまだようこ「村上春樹『1Q84』の会話分析」『N:ナラティブとケア』(1)(特集:私の実践とナラティブ(第1回))2010.01
- 熊田一雄「小説『1Q84』における悪の表象について」『愛知学院大学文学部紀要:愛知学院大学論叢 文学部紀要』(40) 2010
- 鈴村和成「村上春樹の『1Q84』を行く—ハイパーシティ東京へ」『文學界』64(2) 2010.02
- ジェイルービン「『1Q84』翻訳者が語る村上春樹—なぜ世界中で読まれるのか」『文芸春秋』88(7) 2010.05
- 鈴村和成「誰もが〈死後の生〉を生きている」『文學界』64(6)(特集:村上春樹『1Q84』BOOK3) 2010.06
- 福田和也「暴力論の消息」『新潮』107(6)(特集:『1Q84』BOOK3をめぐって) 2010.06
- 安藤礼二「連続と不連続」『新潮』107(6)(特集:『1Q84』BOOK3をめぐって) 2010.06
- 河合俊雄「世界の物語と私の物語」『新潮』107(6)(特集:『1Q84』BOOK3をめぐって) 2010.06 松永美穂「1984年の「聖家族」」『文學界』64(6)(特集:村上春樹『1Q84』BOOK3) 2010.06
- 村上春樹『1Q84』狂騒曲の裏を読む—新聞や文芸誌の書評は腰が引けて賛辞ばかり」『Themis』19(7)(通号 213) 2010.07
- Jay Rubin 小森陽一 根本治久「対談『1Q84』と漱石をつなぐもの」『群像』65(7)(特集:村上春樹、世界文学への軌跡—『1Q84』英訳者と、世界デビューの契機を作った功労者が語

- る「ムラカミ文学」)2010.07
- Elmer Luke 「羊を追って―村上春樹のブレイクスルー」(特集：村上春樹、世界文学への軌跡  
―『1Q84』英訳者と、世界デビューの契機を作った功労者が語る「ムラカミ文学」) 2010.07 武藤  
功「本・文学と思想 合せ鏡がずれ落ちて―村上春樹著『1Q84 BOOK3』『葦牙』(通号  
36) 2010.07
- 山岡頼弘「『都市幻想』を超えて―『1Q84』と『グレート・ギャツビー』」『文學界』64(7)  
(特集「1Q84 BOOK3」徹底分析―10年代の入口で 文學界2010) 2010.07
- 岩田真志「脳時代の小説―村上春樹『1Q84』と瀬名秀明『BRAIN VALLEY』」『現代文学史研究』  
15 2010.12
- 山根正博「1Q84年のその先へ―『1Q84』BOOK4を夢想する」『現代文学史研究』15 2010.12 稲尾一  
彦「新たなる“物語性”の創出：『1Q84』試論」『国語と教育』35 2010.12
- 石上敏「村上春樹『アフターダーク』再論―『1Q84』を読み解く補助線として」『大阪商業大  
学論集』6(4) (通号160) 2011.02
- 上田穂積「村上春樹、内田百閒を引用する―「1Q84」への視座、あるいは志賀直哉」『徳島文  
理大学比較文化研究所年報』(27) 2011.03
- 鈴木宏明「なぜ拳銃は火を吹かないのか―『1Q84』論」『近代文学. 研究と資料. 第二次』(5)  
2011.03
- 辻惟雄「橋と階段 村上春樹『1Q84』などからの連想」『芸術新潮』62(7) (通号739) (特集：  
辻惟雄×村上隆 ニッポン絵合せ(17番)村上春樹ほか) 2011.07
- し しょうい「中国の村上春樹―二〇一〇年度最優秀図書トップ10入り 大人気の『1Q84』  
『東方』(367) (小特集：中国語圏の村上春樹) 2011.09
- 和田勉「村上春樹論(2)『1Q84』を中心に」『九州産業大学国際文化学部紀要』(50) 2011.12
- 吉岡栄一「オーウェルと村上春樹：『1984』と『1Q84』をめぐって」『スペイン現代史』(20)  
2011.12
- 海村惟一、海村佳惟「Book 1の青豆の人物像の再構築に関する一考察(1)―(3)村上春樹著『1Q84』  
の頼訳と施訳との対照比較を中心に」『福岡国際大学紀要』(27) 2012.03
- 野田晃生「文学にみる障害者像 村上春樹著『1Q84』」『ノーマライゼーション：障害者の福  
祉』32(5) (通号370) 2012.05
- 明里千章「読む 村上春樹『1Q84』における「記憶」」『日本文学』編61(11)
- 藤井省三「中国とポスト『1Q84』」『文芸春秋』90(14) 2012.11
- 土井奈緒美「最早期記憶に対する内在的アプローチの試み：村上春樹『1Q84』天吾の最早期  
記憶を題材に」『京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要』(17)2013
- 馮英華「村上春樹作品における想起の空間：『1Q84』における近代日本植民地についての語  
り」『千葉大学人文社会科学研究』(26) 2013.03
- 風丸良彦「『グリーンピース』から「青豆」へ：『1Q84』後に読む『ノルウェイの森』」『盛  
岡大学紀要』30 2013.03



- 岡田善明「『ビッグ・ブラザー』と『リトル・ピープル』の作る悪：オーウェル『1984年』と村上『1Q84』における考察」『国際文化表現研究』(10) (特集：学会創立10周年記念号)2014
- 跡上史郎「村上春樹「鏡」のあちら側とこちら側：一九八〇年代から『1Q84』まで」『昭和文学研究』68(特集：文学の一九八〇年代) 2014. 03
- 佐藤義夫「『一九八四年』と『1Q84』：ビッグ・ブラザーとリトル・ピープル」『和洋女子大学英文学会誌』(50) 2016. 03

### Ⅲ中国文献

#### 一、研究著書

- 稻草人编著《遇见100%的村上春树》当代世界出版社 2001
- 王昕《村上春树音乐之旅》南海出版公司 2004
- 苏静、江江编著《嗨，村上春树》朝华出版社 2005
- 雷世文编《相约挪威森林》华夏出版社 2005
- 林少华《村上春树和他的作品》宁夏人民出版社 2005
- 岑朗天《村上春树和后虚无年代》新星出版社 2006
- 杨炳菁《后现代语境中的村上春树》中央编译出版社 2009
- 林少华《为了灵魂的自由——村上春树的文学世界》中国友谊出版社 2010
- 杨永良《并非自由的强盗》山东人民出版社 2010
- 郭正佩《东京·村上春树·旅》天下远山出版股份有限公司 2010
- 杨照《永远的少年》本事文化股份有限公司 2011
- 杨永良《并非可逆的“世界尽头”》山东友谊出版社 2012
- 杨永良《并非偶然的寻羊冒险》山东友谊出版社 2012
- 欧宗智《从夏目漱石到村上春树》致良出版社有限公司 2012
- 杨照《永远的少年》新星出版社 2013
- 尚一鸥《村上春树小说艺术研究》商务印书馆 2013

#### 二、記事

- 日本后现代主义文学与村上春树 北京师范大学学报(社会科学版) 王向远 1994
- 村上春树效应 出版广角 林少华 1997
- “和臭”要不得——村上春树文集翻译随笔 出版广角 林少华 1998
- 论“村上春树现象” 外国文学 孙树林 1998
- 风为何歌 - 论村上春树《听风歌》的时代观 外国文学评论 孙树林 1998
- 村上春树作品的艺术魅力 解放军外国语学院学报 林少华 1999
- 比较中见特色——村上春树作品探析 外国文学评论 林少华 2001
- 从大江健三郎眼中的村上春树说开去 外国文学评论 许金龙 2001
- 井·水·道 - - 论村上春树文学中的老子哲学 日本研究 孙树林 2001

村上春树长篇小说的发展 华东师范大学学报(哲学社会科学版) 钟旭 2001

当代日本女性自我主体意识的失落与复苏——谈村上春树短篇小说中的几篇女性题材作品 职大  
学报 吴永恒 2001

试论村上春树小说中的比喻 修辞学习 刘信宏 2001

在东方与西方之间——“春树热”的社会背景探析 贵阳金筑大学学报 钟旭 2001

通俗的经典——一个中国人读《挪威的森林》 出版广角 李德纯 2001

“天黑以后”的善与恶——关于村上春树新作《天黑以后》 书城 林少华 2005

村上春树暴力性的由来 文教资料 杨超 2006

村上春树与菲茨杰拉德——《挪威的森林》与《了不起的盖茨比》的比较 华东师范大学学报(哲  
学社会科学版) 徐谷芄 2006

村上春树《挪威的森林》中的女性形象 黔西南民族师范高等专科学校学报 李轶坤 2006

村上春树在中国——全球化和本土化进程中的村上春树 外国文学评论 林少华 2006

暴力是打开日本的钥匙——读杰·鲁宾《倾听村上春树》 中国读书评论 林少华 2006

《挪威的森林》与《失乐园》的性爱主题比较 《财经界》(中旬刊) 刘静 2007

关于文学翻译的思考——评林少华的文学翻译观点 日语学习与研究 陶振孝 2008

再谈翻译风格——林少华译作是否“浓妆艳抹” 东京文学 唐嘉磷 2008

国内村上春树研究概况及走向 日本学论坛 刘研 2008

遭遇“后现代”的日本女性——以村上春树为中心的考察 江苏社会科学 李继凯 2008

村上文学经典化的可能性——以语言或文体为中心 外国文学 林少华 2008

历史记忆与文学语言——评小森阳一的《村上春树论：精读《村上春树》》 外国文学 杨炳菁 2008

村上春树作品中“追寻者”意向——论村上作品与影视的梦幻关系 时代文学 孙宵 2008

“中间地点”论——村上春树的多元文化身份初探 外国文学评论 刘研 2008

美国情节与村上春树的小说创作 国外社会科学 尚一鸥 2008

日本的村上春树研究 日本学刊 尚一鸥 2008

村上春树年谱(1949-2007) 日本学论坛 尚一鸥 2008

试析村上春树的处女作《且听风吟》 解放军外国语学院学报 尚一鸥 2008

当代著名翻译家林少华的翻译观 江苏社会科学 李明 2008

中国大陆村上春树研究述评 长江大学学报 朱道卫 2008

文体的翻译和翻译的文体 日语学习与研究 林少华 2009

翻译的文体与政治——“林译”文体论争之刍议 日语学习与研究 王成 2009

作为斗士的村上春树——村上文学中被东亚忽视的东亚视角 外国文学评论 林少华 2009

后殖民主义话语的文学表达——从村上春树小说《海边的卡夫卡》谈起 晋阳书刊 杨书评 2009

身体与文体之间 书城 林少华 2009

《挪威的森林》中的男性叙述与女性形象 太原大学学报 刘婧 2009

世界性与民族性的因素融合——论《海边的卡夫卡》 钦州学院学报 耿海霞 2009

近十年来中国对村上春树作品的研究述略 河南教育学院学报(哲学社会科学版) 耿海霞 2009

村上春树的中国观 国外社会科学 尚一鸥 2009

文学史意义的地震灾难讲述——以村上春树的《神的孩子都跳舞》为中心 东北师大学报（哲学社会科学版） 尚一鸥 2009

论村上春树的中国观 襄樊职业技术学院学报 吴思佳 2009

论村上春树的日本关心 宁波教育学院学报 吴思佳 2009

从《挪威的森林》透析现代都市人的孤独失落与自我寻找 科技信息 李娟 2009

村上春树与安妮宝贝作品特色比较探析 剑南文学 张蕾 2009

文学翻译与翻译文学——林译村上文本在中国大陆 日语学习与研究 杨炳菁 2009

翻译、解读与文化的越境——也谈“林译”村上文学 日语学习与研究 王志松 2009

文本的翻译与评说——以林少华译《挪威的森林》为例 日语学习与研究 林璋 2009

论村上春树早期小说的救赎作用 江苏社会科学 许志强 2010

记忆的编年史：村上春树《奇鸟行状录》的叙事结构论 东疆学刊 刘研 2010

夜幕下的暴力风景——解析村上春树小说《天黑以后》 长江学术 徐谷芄 2010

森林中的彼岸世界——从《挪威的森林》中透析村上春树的生命态度 太原城市职业技术学院学报 张文彬 2010.01

《1973年的弹子球》的孪生性——村上春树小说艺术论之一 外国问题研究 尚一鸥 2010.01

村上春树可以作为东亚的“斗士”吗？——《奇鸟行状录》战争叙事论 外国文学评论 刘研 2010.01

试析村上春树作品中的隐喻——以《寻羊冒险记》为中心 重庆三峡学院学报 吴思佳 2010.02

论村上春树的翻译 日语学习与研究 杨炳菁 2010.02

村上春树的个人理解与宽容——村上春树与他的《地下铁事件》、《约束的场所地下铁事件2》 长春理工大学学报（社会科学版） 刘钟鸣 曾研 2010.03

《1Q84》：当代“罗生门”及其意义 外国文学评论 林少华 2010.02

身体的出场、规训与突围——论村上春树和王小波的小说 东方丛刊 刘研 李春洁 2010.02

《1Q84》中的非后现代因素——兼及村上春树的“新的现实主义” 东方丛刊 王新新 2010.02

村上春树的伪满题材创作与历史诉求 国外社会科学 尚一鸥 2010.04

村上春树的悖论：虚拟时代的生存之道 东北师大学报（哲学社会科学版） 刘研 2010.04

之于村上春树的物语：从《地下世界》到《1Q84》 外国文学 林少华 2010.04

偏爱与契合——村上春树的翻译思想 外语教学理论与实践 朱波 2010.04

试论村上春树否认历史、开脱日本战争责任的故意和逻辑方法 国外文学 由同来 2010.04

解读村上春树的“寻找”意识 日本研究 刘海英 关醒 2010.04

村上春树文学作品中情感慰理念的现实意义分析——以《挪威的森林》为例 时代文学（下半月） 刘小荣 刘伟 2010.12

林少华与赖明珠的翻译风格之比较——以翻译村上春树作品为例 绥化学院学报 金兵 刘青梅 2011.01

地震对“我们”意味着什么？——村上春树的灾难叙事 社会科学论坛 曾军 2011.03

论村上春树后期作品中的荒诞意义 长春理工大学学报（社会科学版） 王昕 2011.03

- 村上春树短篇小说中的后现代文化语境 文化学刊 王宁 2011.01
- 村上春树作品中荒诞背后的人性文化 文化学刊 王昕 2011.02
- 村上春树小说的电影空间 东北师大学报(哲学社会科学版) 尚一鸥 2011.02
- 村上春树对于战争的态度 云南电大学报 吴思佳 2011.01
- 村上春树与日本文学 当代外国文学 张昕宇 2011.02
- 浅析《且听风吟》中村上春树式的乡愁 文学界(理论版) 邓英杰 2011.04
- 再议村上春树中译本优劣之争 苏州教育学院学报 张昊 2011.02
- 短篇小说在村上春树创作中的作用和价值——以《去中国的小船》为中心 东北师大学报(哲学社会科学版) 王艳华 2011.03
- 从《红与黑》汉译讨论到村上春树的林译之争——两场翻译评论事件的实质外语教学理论与实践 邹东来 朱春雨 2011.02
- 近三十余年日本、中国内地村上春树研究述评 长江师范学院学报 张敏生 2011.04
- 村上春树短篇小说的叙事策略 西北师大学报(社会科学版) 付昌玲 2011.05
- 性与爱的分离——性别(gender)视角的夏目漱石与村上春树比较研究 中国海洋大学学报(社会科学版) 张小玲 赵春先 2011.05
- 蛋撞墙:村上春树的文学选择 日本研究 佟君 2011.03
- 村上春树后期作品中的“父亲” 浙江万里学院学报 徐蕾 2011.06
- 透过“暴力”认知村上春树笔下的近现代日本社会 河南科技学院学报 徐蕾 2011.11
- 论村上春树《去中国的小船》思想内涵及艺术特色 江苏社会科学 许志强 2011.06
- 理解村上春树三个的“关键词”:后现代主义、音乐与孤独 文学界(理论版) 赵曦 2012.02
- 从《世界尽头与冷酷仙境》看村上春树的自我流放意识 河南教育学院学报(哲学社会科学版) 贾迪扉 2012.05
- 再议村上春树——以其对战争和体制的认识为中心 西南农业大学学报(社会科学版) 赵晓玉 2012.05
- 论村上春树初期作品中他者认知的轨迹 中北大学学报(社会科学版) 齐明皓 2012.03
- 在《约定的场所》:之于村上春树的“奥姆” 外国文学 林少华 2012.04
- 论“独生子根性”对村上春树创作的影响——以《国境以南 太阳以西》为中心 西安石油大学学报(社会科学版) 吴思佳 2012.04
- 论村上春树的汉语翻译——日本文化本土化与中国本土文化的改革 扬子江评论 藤井省三 贺昌盛 2012.04
- 历史的记忆与传承——论村上春树的战争观 译林(学术版) 赵佳舒 2012.05
- 村上春树文学世界的支配原理——兼论村上春树文学创作的主题与主线 山东社会科学 杨永良 2012.11
- 作为“符号”的中国——从《诺门罕的钢铁墓场》看村上春树中国观之内涵 中国海洋大学学报(社会科学版) 张小玲 2012.06
- 村上春树与华语圈——日本文学跨越国界之时 当代文坛 藤井省三 贺昌盛 2013.01

- “电影中毒者”村上春树的电影馆 电影新作 王海蓝 2013.03
- 论村上春树的战争观——由“死使我想起中国人”谈起 甘肃社会科学 王海蓝 2013.04
- 多元文化的融合体——论村上春树笔下的“杰” 解放军外国语学院学报 关冰冰 杨柄菁 2013.05
- 莫言与村上春树的文体特征——以比喻修辞为中心 东北亚外语研究 林少华 2014.03
- 村上春树“故事”的临界点——论《地下》和《在约定的场所：地下2》 东北亚外语研究 王志松  
2014.04
- 《透明的红萝卜》与《且听风吟》的文学起点——莫言与村上春树的小说艺术比较研究 学术研  
究 尚一鸥 2015.03
- 当经验记忆沦为文学记忆：论村上春树“满洲叙事”之史观 外国文学评论 李立丰 2015.03